
再生と破壊の刻

小西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再生と破壊の刻

【Nコード】

N9045P

【作者名】

小西

【あらすじ】

20XX年、地球は崩壊の危機を迎える。しかし、地球は生き残り、美しき蒼き星は幻想世界へ生まれ変わる。それから幾千年後の物語。精霊の加護を持つ人間達と科学が混在する地球上で、再び戦争の火蓋が開かれた！さあ、どう戦う？どう生き残る？どう守る？お節介な傍観者も、時にはお助けマン。そして再生と破壊の刻が、やってくる。

※投稿後も適宜、誤字・脱字の修正、および描写の追加をしています。

す。

プロローグ

20XX年

それは、突然だった。

何の前兆もなく、大地が割れた。

風が吹き荒れ、各地で火山が噴火した。

大地の揺れは止まらず、各国で保管されていた核爆弾は爆発した。
人が住める大地は、人が築いた文明は崩壊していった。

多くの命が消え去り、誰もが絶望し

全ての大地が海に沈もうという時、奇跡が起きた。

大地が眩しく輝き

光が消えると大地の揺れが止まると、そこにあったのは幻想世界であつた。

沈むはずだったある島は空中に浮かび、海に沈んだはずだった遺跡は浮上した。

そして、何より人々の目をひいたのは

精霊と幻獣たちだった。

プロローグー2ー

ガヤガヤ ガヤガヤ

JR新宿駅西口改札前、幾人もが忙しなく行き交う所。柱に寄りかかる者、案内図の前に立つ者、床に座りこみ円になる若者達、人と人の隙間を縫うように各々があちらこちらに点在し、通り過ぎる。その日も駅前には数多の老若男女で溢れていた。

今日も1人、待ち人を待つ青年。夏の盛り、気温は30度を越え、額から染み出る汗をハンカチで拭っていた。

ゴゴゴゴゴ：

前触れなく、大地が揺れる。

地震？…でも長いな。

ゴゴゴゴゴ：

揺れは1分、2分と止まることなく揺れ続けた。

…揺れがおさまらない？

寧ろ激しくなっていないか？

これは、もしかして…。

ああ、とうとうきたのか。

今日がそうなのか。

揺れは激しさが増し、所々床が割れていく。目の前のタクシー乗場では車がぶつかり合い、火の手も見える。

そして、駅ビルが崩れ始め

天井が落ちてくる。それでも青年は逃げなかった。

「危ないっ。」

青年は横に突き飛ばされ、瓦礫の下には別の青年がいた。腰からは崩れたコンクリートに埋まり、頭から血を垂れ流し、表情は苦痛で満ちている。

「どうして、庇ったの？」

死ぬのは僕だったのに。」

「っつゝ恋人なら庇って当然だろ。」

ここは危ない。早く逃げろ。」

「…あなたのいない世界で？」

「お前は生きろ。俺はお前に会えて幸せだったよ。お前を守れて死ぬるなら本望だ。」

揺れは益々激しくなる。人々は逃げ回るが逃げ道は少なく、辺りに一人二人と死体が転がっていく。瓦礫に半身が埋もれた青年の呼吸は荒れ、出血も激しくなる。

「はあはあっ、はやくっ…」

意識が朦朧とする中、必死に青年に逃げるよう願う彼。彼の死は間近に迫っていた。

愛しい彼の思いを真摯に受けとめ、何かを思案する青年。

「……………僕を庇ってくれてありがとう。でも、あの時僕は死ぬつもりだったし、あなたの生きていない世界に堪えきれない。

だから、……………ごめんね。幸せだったよ。あなたに会えて。たった1つの愛に出逢えて。」

そう言うと、青年は靴からナイフを取り出し、頸動脈に刃先を定

める。

そして、思いきり首を切りつけた。

頸動脈が切れる瞬間、青年の体が眩しく光り、光りは大地を包んだ。

第1部 序章 迷いの森

「はっ！

……なんだ昔の夢か。懐かしいな。もうあれから3千年か。」

青年は起き上がり、寝袋を畳む。壁の隠しボタンを押し、開いた空間に寝袋をしまう。

青年が寝ていた場所はとある森奥にある洞窟だった。一見ただの岩穴だが、3千年前の建物の周りを岩や森が覆っている。

幾千年生きる彼だからこそ、知り、活用できる遺跡である。

「さてと、今日の朝食は何にしようかな♪」

青年は床を触り、床収納を引っ張りだす。そこには色とりどりの食材なぞなく、あるのは無機質な固形物やパックだった。

「うーん。栄養機能食品か経管栄養剤か。さすがに生ものはないか。…ふむ、今日は森で何か探すかな。」

青年は長く伸びた銀髪を1つにくくり、マントを羽織り、洞窟を出ていく。

霧がかった森の中を、道しるべもなく突き進む。

ここは、人を惑わす濃い霧に覆われた、通称『迷いの森』。けれども、そんなことは彼に関係なかった。

「…おいで。」

彼はおもむろに右手を前に上げる。すると、青髪の少女が霧の中

から現れ、宙に浮かぶ。フランス人形のようなかわいらしい、身長150cm程の美少女だ。

「長さま、お久しぶりです。」

森の霧も、湖も異常ありません。」

「久しぶり。いつもここを守ってくれてありがとう。」

そう、彼女はこの森の守護者であり、水を司る精霊の1人。ちなみに人型なので、高位精霊である。

「朝から悪いんだけどさ、お腹すいてるから、湖まで案内頼めるかな？」

「どうぞ、こちらへ。」

彼女がそう言うと、湖に向かって霧が晴れ、道ができる。青年は、ただその道を進むだけである。

湖に着くと、そこには金色に輝く鮎に似た魚たちが泳いでいた。

それはそれは、神秘的な風景だった。

「おー、今日は腹いっぱい食べるぞ！」

さて、青年はいかにして魚を捕まえるのか。釣竿もなければ、網もなかった。

「さてさて、せーの、よっと」

掛け声とともに、青年の手の指先から蜘蛛の糸のようなものが飛

び出すではないか。

糸は水中を泳ぐ魚を次々と絡めとり、糸が青年の手に戻る時には魚が数匹入った珠形の籠と化していた。

「大漁大漁っと。ちよつくら加熱するか―」

青年は火の玉を呼び、籠ごと加熱する。

数分で焼魚の完成である。

「あ、君も食べる？」

「いえ、私は精霊ですから必要ありません。それにしても、相変わらずとんでもない力の使い方ですね。人間達に見られたら研究材料にされますよ。」

「ま、僕たち精霊使いは表社会から退散しちゃったしね。隠れ里からでるような若い者もないし。」

「……長さまが里からでてきたのは、近いということでしょうか？」

「そうだね。僕にもハッキリつかはわからないけど、近いよ。」

「…どうして女神様は、あなた様に過酷な役目を与えたのでしょうか。長さまのために何もできない私は……。」

哀しげな表情で青年を見つめる精霊。何もできず歯痒いのか、下唇を噛む彼女。

「そんなに気に病まないで。」

精霊にしかできないことがあるように、僕にしかできないことがあるんだから、ね。」

「…そうですね。まあ、念のため水鏡を通して他の精霊達に伝えときますね。」

水の精霊が手を湖の水面にかざし、力を注ぐと青い光りが辺りを包む。

「…長さま、大変です！水の里に火の手が。恐らく火の里の者と思われませんが。」

「そう……。戦禍がもう。」

「……でも、まだ滅びの時じゃない。とりあえず、少しお手伝いにくかな。」

「んじゃ、またね」

そう言うと青年は音もなく、森から姿を消した。

第1部 水の章 カグラ教国

チュンチュンチュン

鳥のさえずりが聴こえ、風が囁き木々が揺れる。天から光が射し込む爽やかな朝。

遙か昔のEU加盟国とアフリカ大陸の北部は一つの大陸と成っていた。大陸の名をリヒト大陸という。リヒト大陸の北西部、かつてイギリスという国があった辺りにぽつんと宙に浮かぶ島、カグラ教国。

島からリヒト大陸へ滝のように水が注ぎ、その水はリヒト大陸の河川の源となっている。島へ梯子を架けることは叶わず、教国へは、転移門を通るか空からしか入ることができない。

今日も首都の南西に位置するサラの泉に、渡り鳥やユニコーンが水飲みに来ていた。カグラ教が崇める女神サラの癒しの水が湧くとされる泉で、何千年と枯れることない清浄な命の水。いつの日も、精霊や幻獣・野生動物で溢れる泉。

しかし、その日は違った。

泉の中央に1人の蒼髪の少女が、水に守られ宙に浮いていた。少女は身長165cm程の細身で、胸はやや小さめだか、目を開けていない今でも美少女と言ってもおかしくない容貌の少女だ。

どこからともなく泉の水精たちが近づき、声をかけても反応がない。

どうやら彼女は意識を失っているようだ。

宙に浮かぶ少女が精霊に声をかけられている頃、1人の亜人の少

年が、サラの泉に向かっていた。

「あつれー？」

何か今日、静かだね、メイ？」

「くるつくるうゝの、ちゃんまげっ！キャハハハッ♪」

「……いつもいつも、ボクの髪で遊ぶなあー！」

ドドドド

バタバタバタバタ

身長120cm程の金髪でかわいらしい丸顔、耳が細長い少年は、彼の髪で遊ぶ風精の小人を追いかける。

「はあはあはあつ、あんの野郎どこ行きやがったあー。ああん？」

：

……

……ふう。

ま、とりあえず泉に行こ。」

テクテク トコトコ

テクテク トコトコ

容貌だけでなく足音もカワイイ少年。

彼が泉に辿り着くと、泉にいたユニコーンが場所をあげる。すると、目の前に宙に浮かぶ少女がいた。

「……何これ？水の結界かな。

えっとー、もしもーし、お姉さんお姉さん、起きて起きて。」

うーん、反応ないなあ。

お姉さんにゃ悪いけど、結界を壊すしかないかな。

確かやり方は、結界に手を当てて、えーと。

「れれれ！ボク触っただけなのに、何故に光るうゝ！？」

「なァーに、やってるのゝ？」

結界に触れただけで輝きだした状態にパニックを起こす少年。そこにやってきた風精。

2人が騒いでいる間に、光はおさまり、消える。少女を守っていた水は、いつの間にかに消えていた。

空から水が注がれ
数多の水精や人魚が唄う
癒しの水の里

その面影もなく
火の手が上がり
大地が割れていた

人々は逃げまとい
ある者は殺され
ある者はなぶられ
ある者は奴隷に

「長を殺せー。」

「巫女を捕らえよー。」

「何処に隠したー。」

湖の底にある祭壇に巫女はいた。そこには数人の蒼髪の間達が集まっていた。彼らの目の前の祭壇には大きな水鏡があった。

水精霊の長『マーメイド』が、契約の証として初代巫女に与えた水鏡。

「さあ、若さま、巫女さま、皆様、水鏡の前へ。」

「嫌よ。私も戦います。この鎖を離してっ！」

水鏡の前で激しく抵抗する巫女。

「我が娘、愛しい巫女よ。今はこうするしかないのだ。

戦いに長けた火の里と、大地を味方にできる土の里に、癒しと守りの水の里の力だけでは足りないのだよ。辛いだろが、耐えておくれ。」

「御父様、御母様を置いて逃げるなんて反対よ。

御父様と御母様が命をかけて戦うなら、私も戦う！」

「いいえ、それはなりません。愛しい娘、あなたは初代巫女の再来といわれる力を持つ巫女。水の里の希望。

…あなたの晴れ姿を見れないなんて残念だわ。」

巫女の母は、そう言うとき長と共に祭壇から離れる。

「さあ、最後の仕事をしましょうか。

彼の者に水の守りを。水鏡よ、巫女の血に応えよ。我が血肉を代償に、彼らに水渡りを。

マーメイドよ、我が願い叶えたまえ。」

「彼の者に水の癒しを。水鏡よ長の血に応えよ。我が血肉を代償に、彼らを風の里へ。

水の民を守りしマーメイドよ、我が願い叶えたまえ。」

長と先代巫女が祭壇に祈りを捧げると、水鏡が青く輝きだす。水鏡の前にいた者たちは、1人1人と水鏡に吸い込まれていく。

「御父様、御母様あー。いやあー。」

輝きは増し、青い光が里全体を包む頃。水鏡の前には誰もいなかった。

祭壇の前にいた2人の跡には、水溜まりが遺されただけだった。

水の守りを失い泉に落ちる寸前で、少年は空を飛び少女をキャッチする。

少年が泉の花畑に少女を横にすると、わらわらと泉の精霊や幻獣が寄ってくる。ユニコーンは少女の頬を舐め、心配そうに寄り添う。すると、少女がモゾモゾと動きだす。

少女の顔を覗く、少年・風精・ユニコーンたち。

「ううーん。御母様？」

「あたっっー」

「痛っー…あれ？」

勢いよく起きた少女。頭と頭をぶつけ、痛がる少女と少年。そこに声をかける風精。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。大丈夫？」

「大丈夫。心配してくれてありがとう。…あなたは風の精霊さん？」

「そうよ。風を司る精霊、小人族のメイよ。で、横で痛がってるコイツは私と旅してるクルトよ。」

ね、その蒼髪ってさ、もしかして水の里の人？」

「うん…、私は水の民のレンよ。ねえ、ここにいたの私だけかしら？」

あと、ここは風の里？」

「残念ながら、ここは風の里でもないし、お姉ちゃんしかいなかったよ。」

ここは、カグラ教国のサラの泉よ。」

「カグラ教国……」

「それはそうと、精霊Newsで、水の里って火と土の里に襲われて荒れ果てたって聞いたけど。」

「……………そう。」

会話は途切れ、暗い空気が2人を包む。里から逃げてきたレンからすれば当然の結果であったが、改めて話に聞くと何とも言い難い苦痛に襲われる。

そんな時2人の視界の端で、何かが動く。

「完全ふっかーあつ！ボクは痛みになんかに負けないぞっ！……ってあれ？何2人で仲良くなっちゃってるの？ボクも仲間にいれろぉ〜」

「ぷっ。クルト君だっけ、面白い子ね。私、弟いないからカワイイなあー。」

クルトの持つ独特な雰囲気は吞まれ、気持ちや和らぐレン。

互いに自己紹介し、クルトがお馬鹿発言を連発し、メイがツッコミ、レンが笑う。そして『クルト』『メイ』『レン』と呼び合う仲になる3人であった。

「で、さあーレンはこの後どうするの？」

「私は風の里に向かうつもりよ。」

「え、でも精霊Newsによると風の里は、丸ごと加護者の風龍の故郷に移り住んでどの大陸に隠れてるのかわからない。……って聞いたよ？」

「そもそも、レン姉さんお金持ってるの？
旅するにもその服装さ…。」

「はっ！私って、もしかして一文なし…。」

「もしかしてじゃない？

レンって、おバカさあゝん？

クルトと張り合えるわね！」

「そんな！クルトと同レベル！？」

からかうメイ。落ち込むレン。

「…ねえ、そこって落ち込むところ？ボクって、ボクってえゝ」

夕日に向かって泣き叫び、駆け走るクルト。

「ま、とにかく首都に行きましょう。とりあえず私たちの宿で、今後を考えましょう。」

「そうね…。ありがとう。」

「それじゃあ、L e t ' s g o !」

街に向かって歩きだす2人。

「…ねえ、クルトはほっといいていいの？」

「えゝクルト？」

大丈夫大丈夫、夕食の時間には何故か席についてるから、アイツ。
どんだけ食いしん坊なんだかねー。」

カグラ教国―2―

幻想世界と化した蒼き星、地球

幾千年の間に、生きるため精霊の加護を得た者たちがいた。

精霊は加護を与えた者の血と契約を交わし、その血族に力が宿った。

血族は数を増やし、大きな里を築いた。

フェニックスの加護を得た火の里

エルフの加護を得た土の里

マーメイドの加護を得た水の里

風龍の加護を得た風の里

精霊の大多数は、この4種である。もちろん、少数だが光や闇・時といった特殊精霊も存在する。精霊の中でも希少な彼らの加護を得た人間も少数で、特殊能力者と呼ばれた。大多数は精霊の加護を得られず妬んだ者に住まいを追われたのだった。

精霊の加護を得られなかった人々はどうなったか。

荒れた大地で死した者が多かった。

しかし、彼らは生き延びた

古代科学を受け継いだ者

古代科学を発掘し、研究した者

能力者を狩り拐い、科学を用い能力者を人造した者
各里に保護された者
幻獣を味方につけた者

そして、大地は大国がいくつかと、各里にて治められるようになった。

様々な色彩の髪色の人々が行き交い、亜人や幻獣が街中で見られる。老若男女が笑顔で歩き、活気ある市場の声が聴こえる。

入口には壮大な門があり、門番は竜人の厳ついお兄さんと露出度高めの茶髪のお姉さん。門からは空に浮かぶ城が遠目に見える。街の右端と左端に、東京タワー程の高さを有する塔が聳え立つ。

左右の塔と城、門を基点に、うっすらと半透明の結界がドーム状で張られている。

この結界は建国以来、2千年も張り直されたことがないといわれる強固な守りである。結界を張ったのが誰なのか、人々は知らない。

「ほわぁ、これがかの2大国の片翼、カグラ教国の首都！」

「レン、ぼけっとしてないでさっさと行くよー。」

門を見てあんぐりと口を開け、呆けていたのは水の箱入り娘、レンである。そして、そんなレンの首もとを掴んで引き摺っていったのは、風精メイ。小人のメイに一体全体どこに、そんな力があるのか謎である。

「じゃんじゃんじゃん！」

ようこそ、ボクらの宿り木へ！」

宿に辿り着き、扉を開こうとした時、どこからともなく現れたの

はクルトだった。

「あっそ。」

「そっ、そんな冷たい！」

「私、アンタとの契約切ろうかしら？」

「痺れるうゝ」

冷たくあしらわれるクルト。しかし、クルトはめげなかった。
恐るべし天然。

宿にて今後について話し合う小人と馬鹿と少女。

「さて、レンは一文なしと。売れる装飾品もなしと。」

「レン姉さん、ギルドカードは？」

「ギルドって、あの世界ギルドのこと？」

「そうそう。」

「私、巫女だからギルドに行ったことないわ。」

「巫女!？」

「…え、もしかして初代の再来という噂の今代の水の巫女ってレンなの？」

「噂？」

「水の神殿の最奥に隠された、才色兼備・絶世の美女・歴代最強の力をもつとかいう噂よ。」

「実態はドジっ子、箱入り娘か。」

「なんですって？」

「お転婆娘か。はあ。」

「溜め息つきたいのは私よ——」

レンとクルトが騒いでいた間、精霊Newsもあてにならないと思うメイであった。

「じゃあ仕切り直して、ギルドについてね。」

「レン姉さんはギルドカードを持ってないから、まずは登録しに行こう。」

「なんで？」

「世界ギルドは各国と各里の首脳陣で管理されている機関よ。」

加入は人種や身分による差別がない上、ギルドランクを桃まであげれば、ギルドカードだけで審査なく国境を渡れるのよ。」

「で、レン姉さんはランクは知ってる？」

「確か、下から黒・赤・黄・緑よね。」

「そうね。一般的に知られている大ランクはその4つね。」

噂では緑の上に、幻のエメラルドランクがあり、教皇様がお持ちという話よ。」

「大ランクを細かく分けたのが、小ランク。」

黒は黒↓紺↓青↓紫の4つ。

赤は紅↓桃↓白の3つ。

黄は黄↓茶の2つ。

最後に緑ランクだよ。」

「大ランク分けの由来は、古代文明の名残で、災害時の救助優先度だったらしいわ。」

「なんでも、黒はもう死んでる・助からない、ってさ。」

「だから加入時に小ランク黒の人は、外でたら死ぬって恐れて必死にランク上げに励むそうよ。」

「…………へえ。じゃあクルトのランクは？」

「ふふん♪」

ボクはこれでも小ランク黄の猛者なのだよ。えっへん！

「…クルトのくせにナマイキね！」

「…………むうー」

「さあってと、馬鹿はほっというて食堂に行きましょ」

そうして3人の夜はふけていくのであった。

閑話：火の里

かつて富士山があった場所

そこは幾千年前に姿変え、周囲は熱帯となった。

そこは火の精霊たちの聖地。

火の精霊長、フェニックスの宿る大地。

火の民の故郷。

火の里の最奥に長の住まう、古代文化を取り入れた和洋折衷の長屋敷がある。

その一室に男たちはいた。

焦げたような赤髪の壮年の男性が上座に、下座に輝かしい赤髪の青年と茶髪の青年。

「大儀であった。して、報告をせよ。」

「はい、父上。」

「焰、この場では血が繋がろうが、上司と扱えと言ったはずだが？」

「はっ、申し訳ありません。」

……長さま、報告致します。」

「水の里では巫女と次代・他数名のみ取り逃がしましたが、長と先代巫女の死亡の確認がとれました。捕らえた民は、アースランドの研究者へ。予定より多く上質な能力者が得られたと、今後も協力を惜しまないとのこと。」

風の里については、セイより致します。」

赤髪の青年は火の次代長、火の戦士の称号をもつ『焰^{ほむら}』。そして続いて報告するのは、土の里、狩人『セイ』。朗らかな微笑みをもちながら、腹黒で冷静沈着、計略に長ける参謀だ。

「はい。風の里では、里の結界が強固で、大地ごと割った時にはもぬけの殻でした。樹の精霊が、北西に風龍が飛び去るのを確認しております。風の民は龍の庇護にあると思われます。今、手をだすのは得策ではありません。」

まずは逃げた水の巫女の搜索を優先させるべきでしょう。」

「うむ、ではそのように。」

逃げた水の巫女は見つけ次第捕らえ、次代は殺せ。」

「御意。」

「では下がるがよい。」

セイが部屋を去った後も、部屋に残る焰。

「……何かようか？」

「長さま。」

「……いえ、父上。この度の本意をお聞かせ願えないかと。」

「本意？」

「我ら火の民は確かに闘いにて血を燃やす一族です。しかし、何故今まで協力体制だった水や風の里を襲うのですか？ あんなに友好的に交流していたではないですか。」

それに、愛らしい水の巫女を捕らえるなんて……。」

「……好いていたのか？」

「ええ、初恋でした。」

里の掟がなければ、彼女が同族であつたら、自分のモノにしたかった女です。」

「なら、この戦いでモノにすればよからう。」

「……しかし、彼女からすれば自分は憎き侵略者。」

侵略以外の理由があるはずです。教えて下さい、父上！」

「何のことやら、部屋に戻りなさい。」

「父上！」

長い廊下をズンズンと音を立て歩くのは焰だ。

「チッ、あんのくそ親父。なーにが、何のことやらだ！」

焰が怒りに任せ、火の玉を手に出した所で、セイが顔を出す。

「ちょっとちょっと、屋敷を燃やさないでよね。暴れるなら裏庭でしなさいな。」

「セイ！うるせえな！ほっとけってえんだ。」

「全くいつまでたっても短気なんだから。愛しの彼女に嫌われるよ？」

「もう嫌われてるし、憎まれてるだろうよ！」

「そうかな、きっと彼女も襲う理由があるはずだって思ってるかもよ。」

「…………。」

「大体さ、いくら他族との婚姻で奇形児率が高いとか、死亡率が高いから掟で縛るなんてどうかしてるよ。それに、昔は例外に結婚を許された人もいたらしいし。」

「なんだと。はやく言え、そういうことは！」

「ま、でも最近知ったんだけどね。」

「チッ。」

「……そんなに理由が気になるなら、先代火の巫女さまの預言書を漁ってみたら？」

「ん？てめえ何か知ってやがるな？吐け、吐け！」

「何のことやら、部屋に戻りなさい？」

ヒュ

ドドドド

セイは言うだけ言って、その場を立ち去った。

「チツ、逃げ足の早い奴め！」

カグラ教国―3―

翌朝、レン・クルト・メイはギルドに向かった。

「つて、ここ教会じゃない!」

目の前にあるのは、三角錐の建物。屋根の上には裸体の女神像が掲げられている。そして、一軒家程度に敷地も狭く、所々つぎはぎの壁がみれる。しかし、敷地面積に対し許容範囲を超えるのではと思われる人数が出入りしていた。

「どれだけ貧乏なのよ。しかもこんなに何十人も押しかけたら建物が壊れるわよ!」

「まあまあ、とりあえず中に入ろうよ。」

「きつと、レンもビックリするわよ。」

入口の扉は1つ。取手は欠けた箇所があり、叩いたら割れるのではないかと思わせる一枚板。

「ええい、ままよ!

……………あれ?」

扉を開けるとあったのは、部屋の中央に掲示板があるだけで、誰もいない小部屋だった。窓はなく、四方の壁に隙間なく扉が付いている。天井にはステンドグラスが嵌められ、幻想的な光が射し込んでいる。

「えっとお……………」

「ビックリした?」

「そうよね、私でさえ初めて来た時は、驚いたもの。」

「：ねえ、壁の先は外よね？」

「ふふっ♪」

「まずは実体験してみないとね♪」

「え？」

驚きのあまり固まってしまったレンを2人は、ある扉の前に案内する。

「さあどうぞ♪」

「何なのよ一体。」

扉を開くと、一枚のガラス。毒々しい緑色なのが、なんだか気味悪い。

「……………は？」

「あゝもう焦れたい！クルトおゝ」

「レン姉さんごめんね！」

「ちよっと、ぶつかろう！」

クルトに背を蹴られ、ガラスにぶつかり、レンは目を咄嗟に閉じた。しかし、いつまで待っても痛みはこなかった。

「あれ？」

気づくと先程とは異なる部屋にいた。視線を先に延ばせば、横長のカウンターが見える。何人か受付の女性がおり、その後ろでは忙しなく人が動いている。まるで銀行のカウンターだ。

「ようこそ、ギルド受付へ！」

「ビックリしたでしょ？」

レンが後ろを振り向くと扉と2人。

「どういうこと？」

「あの扉は、古代科学技術と精霊や幻獣との共同発明品よ。あのガラスを通ると、あら不思議。別室へ瞬間移動よ。」

「掲示板があった部屋の壁に沢山扉があったでしょ？」

「そう、あれらも色んな所に繋がってるの。だから敷地は狭くても運営できるのよ。」

「レン姉さんの面白い顔も、たくさん見れたことだし。」

「ギルドカードを作りに行くわよ！」

レンの手をとり、カウンターに向かうクルト達。

「待って！」

「どうしたの？」

「私、身分証明書も持ってないわ。」

「大丈夫だよー」

「どうして？」

「とりあえず受付しましょ。」

頭の中でハテナを浮かべて不思議に思うレン。

「やほーお姉ちゃん、今日もキレイだね！」

「あら、今日は珍しい人を連れてるわね、クルト君。」

「私達の新しい仲間よ。彼女のギルドカードを作りたいの。」

「承りました。」

ではこちらの箱に手を入れ、箱の上のマイクにお名前をおっしゃって下さい。

偽名でも構いません。古代技術を用いてますので、不正カードは作れませんから。」

「古代技術？」

「はい。手から一部、あなた様の遺伝子情報を採取させて頂きます。クロールでない限り、全く同じ遺伝子の方は存在しませんので、本人確認が容易になります。」

「痛いのかしら？」

「少しチクツとするだけです。∴採取に了承して頂けるなら、お手をどうぞ。」

箱に手を入れ、名前を言うレン。

「それでは、ギルドカードを作成します。5分程お待ち下さい。その間に、ギルドについての説明を致します。まず、ランクについてですが、一般にも知られていますし、説明は必要ですか？」

「ランクは小ランクについてまで、2人から聞いたから大丈夫よ。」

「それでは、カードについてから説明しますね。世界ギルドカードは各人の遺伝情報を記録してますので、身分証明証としての利用もできます。遺伝情報に基づき、素養判定も行いますので、各人のスタートランクは異なります。」

ですがどんなに才ある者でも、最高紫ランクまで、と制限されております。ギルドカードの色がそのままランクを示せるようになってます。

国境での審査無効は桃ランクから、奴隷から一般人への格上げは黄ランクからとなっております。

また、ギルドカードはギルド銀行でも利用できます。詳細はギルド銀行にてお聞き下さい。

ここまでで、何かご質問は？」

「大丈夫です。」

「では次にギルドで受けれる仕事について、説明致します。

ギルドで仲介・斡旋している内容は10種あります。

人を襲う悪霊や魔物を狩る、討伐系。

有事の際雇われる傭兵や武闘大会関連等の闘いに関する、武闘系。

無償で国民の依頼を受ける、ボランティア系。

一般民や商人などの依頼を受け金銭を受ける、アルバイト系。

薬草や街では手に入らないモノを見つけてくる、物品調達系。

物品調達は常時受け付けてますが、報酬額は市場価格の影響を受けませんので御了承下さい。

あとは、

古代遺跡を調査する、遺跡発掘系。

新しい技術や技能を発明する、新技開発系。新しく開発された技術や能力は、特許ギルドに登録すれば定期収入が望めます。

騎士や大手商店、ギルド運営機関などへの雇用を目指し、決まった段階を乗り越える、就職系。

就職系は、他種の仕事をしてもギルドランクや報酬に反映されません。雇用されるまで決まった段階以外の仕事はできないとお思下さい。

残り2種は、国や里からの依頼になります。

依頼内容によっては審査がありますので、低ランク者には勧めません。

ここまでで、御質問は？」

「いっぱいあるんですね、知りませんでした。

今のところは、大丈夫です。」

「では、次にギルド機関についての説明です。

ギルドは世界ギルドに加盟している各国各里の主要な街に配置され

てます。

各国を象徴する、狭い敷地で壊れそうな建造物がギルドとなっています。

貴女方は緑の扉から来ましたので、カグラ教国ですね。カグラ教国は教国なので教会となります。

この部屋は各国各里と繋がる扉がありますが、基本的に入ってきた扉からしかできません。」

「えー、ケチッ。」

「…説明を続けますよ。」

扉は有事の際は、自動的に使用できなくなります。ですので、現在各里の扉は機能を停止しています。

各地に配置されたギルドの構造は全て、共通しています。扉の色は各地で異なりますが、中央の掲示板に案内がありますので、御参照下さい。

ギルドで最初に入られた部屋には、仕事や案内に関する掲示板があります。

依頼を受ける場合は依頼書を剥がし、受付までお越し下さい。

扉は、受付への扉・ギルド銀行・特許ギルド・武闘大会運営委員会・物流センター・ランクアップ試験室・就職相談室・ギルドホテル・各国の象徴に関する部屋、と9つ扉があります。」

「それで壁にたくさん扉があったのね。」

「各部屋の機能の説明を致します。

受付は、総合的な受付をしています。分からないことがあれば、受付にていつでも説明します。

ギルド銀行は、得た報酬を預けることができます。定期預金や積立預金・住宅ローンなど、取り扱いが多岐に渡ります。

特許ギルドは、先程説明したので割愛しますね。

武闘大会運営委員会では、大会参加手続きや大会ランクアップ、賞金の受け取りなどを行っています。

物流センターでは、物品調達系での依頼品の受け取りや希少アイテムの販売・買取をしています。また、世界ギルドは奴隷の販売は致しません。

ランクアップ試験室は、まあ、そのまんまですね。ランクアップに必要な分、依頼をこなし、受付でランクアップ試験資格書を受け取って行って下さい。

就職相談室では、専門の相談員や現役の先輩が相談に応じます。

ギルドホテルは、ギルドランクに合わせて宿泊料金が定められています。

公的なホテルなので、1ヶ月以上の連泊はできません。居座る場合は、自動的に追い出される術が発動します。

各国の象徴に関する部屋は、カグラ教国でしたら教会の礼拝堂と懺悔室に繋がります。

大まかな説明は以上になります。御質問はありますか？』

「至れり尽くせりね！」

詳しい説明ありがとう。」

「ギルドカードが出来上がったようですね。………はい、こちらがギルドカードで、これが細かい案内書になります。」

「………綺麗な紫ね。」

「それでは新規受付は以上になります。」

「良かったね！桃まで2ランクだね。」

「私達も手伝うから頑張りましょ。」

3人は受付嬢に盛大に感謝を述べ、再び緑の扉を渡った。

カグラ教国―4―

再び教会に戻ってきた3人。掲示板は、端から端まで隙間なく仕事貼り出されている。

「さあ、どの仕事にしよう？レン姉さんは何系からしたい？」

「ねえ、クルト？まずは、レンの実力が幾ほどか知らないを選ぶに選べないわ。」

「うーん。」

「まずは、討伐系で得意不得意を見るのはどうかしら、ねえレン？」

「討伐系！？」

「…そんな、自信ないわ。」

「ボク達が後衛でフォローするよ？」

「うー、じゃあ危ない時はちゃんと助けてね！」

箱入り娘のレンは、巫女として守りと癒しの修行をしてきたが、無論魔物討伐など未経験である。護身術として多少の武道をたしなんでいるが、実践に欠け、不安が募るレンであった。

「討伐系、討伐系、討伐系…」

「……………あ、これなんて丁度いいんじゃない？弱すぎず強すぎない魔物だし。」

「どれどれ？ナニナニ？ふむふむ。」

「クルト、ハッキリしなさい！」

「ちよつと2人だけで話進めないのっ。」

「…で、どんな内容なの？」

「えっとねー」

「…首都から南に下るとある砂漠の遺跡周辺に、一角狼を頭とする炎狼の群れがたむろしている。遺跡を調査したいが、炎狼がいてできない。どうにか駆除してくれないか。」

だつて」

「報酬はギルド通貨5玉、対象は青ランク以上の者か…。

報酬も悪くないし、火属性の魔物なんて水の巫女に最適な相手じゃない？」

「…そうね。この依頼にしましょ！」

この時代の通貨は世界共通のギルド通貨が主流だ。

各国で発行される通貨は、祭典時などの特別な時にだけ作られ、発行数も少なく価値が高い。

一方ギルド通貨は、世界ギルドの監督のもと流通するため、国境を越えても使えるのだ。また、ギルド通貨はその『形状』にて金額を示す。一番価値が低い通貨はコイン型。

100コインで、立方体の1石と等しく、1万石は球形の1玉と等しい。千玉でお札型の1札と等しい。

20XX年の日本円に換算すると、100コイン100円となる。今回の報酬の5玉は、5万円という訳だ。

「さあってと、受付も済んだことだし、武器防具を揃えましょ！」

「大ランク黒の間は、物流センターで武器防具の支給を受けるか、支度金を受けとるかどちらかが選べるって案内書にあったでしょ？
…レン姉さんはどっちにする？」

「……んーとりあえず、どんなモノが支給されるのか見ないことには何とも言えないわ。」

「そうね。じゃあ物流センターに行くわよ！」

黒い扉を開け、物流センターに渡る。辿り着いた先は物流センターというだけあって、巨大な倉庫だった。端から端までモノが溢れ、天井にも何かがぶら下がっている。整理が大変そうだ。ポカンと物流センター内をレンが見渡していると、前方から恰幅のよい中年の男性が近づいてくる。

「へい、らっしやいっ！」

お嬢ちゃん見ない顔だね。新人かい？俺はここの管理販売責任者のトップスだ。

分からないことあったら何でも聞けよ！ハッハッハ。」

「はじめまして、私はレンです。黒ランクはどんな武器防具が支給されるのですか？」

「レンていうのか、イカしたねめえだな！よろしくな！
んで、レンの小ランクは何なんだ？」

「紫です。」

「そっかい。んじゃ紫ならこっちの部屋だな。」

3人を別室に案内するトップス。部屋に向かう途中、同じように案内されている団体とすれ違う。

「：あのもしかして、1人1人に担当者がついて案内しているんですか？」

「んあ？そうだぜ。センター内は広いし、何処に何があってどんなアイテムなのかの価値や扱い・適性が分かって説明できる専門家じゃねえとギルドメンバーを無駄死にさせちまうしな。

外の商店には客の身の丈や素養に合わない商品売りつける店もあるけど、ここではそんなことしねえ。俺たち物流センター担当者がキチッと正しいモノの見方を教えてやっかるよ、安心しな！」

「そうなんですか、ありがとうございます。」

「ほらよ、着いたぜ。」

案内された部屋には、剣や弓といった武器、革の鎧や可愛いワンプイス、精霊の力が宿った宝石など様々なモノが四方の棚に配置されていた。

「で、よ。レンが扱ったことがあって得意な武器はなんだ？」

「私は槍ですね。」

「槍かゝ。うーん。

：レンは濃い蒼髪だから水の民の血が強くて力も強いんじゃないか？」

「そうですね、ドーム型の水結界を張れます。」

「ふむふむ。じゃあ、これなんてどうだ？精霊の心臓ともいわれる核玉、それも中位の水精の核玉が詰められた槍だ。

良い品だからこれを支給しちまうと防具や薬を支給できなくなるが、レンなら扱える代物だと思うぜ！」

「：試しにふってみてもいいですか？」

「いいぜ。右脇の小部屋に案山子があるから、使い心地を試してみろよ。」

5分後

「トップスさん、この槍にします！」

「どうやら相性も良かったみてえだな。じゃあ支給登録するからギルドカード出しな。

：…ほらよっと。これで支給完了だ。槍の状態が悪くなったり、刃を研いで欲しいとかメンテナンスは1年後までアフターケアするかだよ。たまには来いよ。」

「はい！また来ます！」

ギルドをでて、商店街にやってきた3人。通りの右も左も盛況だ。色鮮やかな野菜や果物たちがあちこちの店で見れ、食欲をそそる芳しい匂いが辺りに漂う。ある通りに武器防具が、ある通りには屋台が並ぶ。

「トップスさんって良い人だったよね」

「そうね。それはそうと、武器は手に入ってたけど防具はいいの？」

「ふふっ、防御については大丈夫。私には水の纏いがあるもの。」

「水の纏い？」

「ドーム型の水結界の上に能力があがると力は魚の形態に格上げされるんだけど、まだ私はそこまで至ってないの。」

で、結界を私なりにアレンジしたのが水の纏いよ。

こう、今みたいにただ服を着ているように見えても、体全体を水の膜で覆えるの。服だけに水の守りを付加させるんじゃないくて、体全体だから防御力は高いと思うわ。」

「へー器用なことね。じゃあ旅にでるのに問題ないってことね。」

「砂漠まで片道徒歩10日程って聞いたけど、食料の調達は平気なの？」

「食料については心配するのは無駄よ。ほら、アレをご覧ください？」

メイが示す先には、買い食いしながら背に大量の食料を背負い、点々と店をハシゴするクルトの姿があった。

カグラ教国―5―

翌朝首都を出発し、南の街道を歩く3人。歩いて1時間もしないうちに、道の整備は悪く凸凹の道になっていく。実の所、カグラ教国の南側はまだ未開発の土地が多く、色々と整備されていないのであった。

「…ねえ、休憩しよ？私、もう足がしんどいわ。」

「え！まだ大して歩いてないじゃない。軟弱ねえ」

「そんなあ」

「メイ、いいんじゃない？初めての旅なんだろうし、休憩したら、ボクらが足に風を纏わせてあげればいいじゃん。」

「ダメよ。それじゃ歩いて行く意味がないわ。私達の力を使えば、砂漠手前の村まで1日で着けるじゃない。」

「えっ、そんなことできるの？」

「うん。足に風を纏わせると、跳躍力が上がって馬よりも速く走れるんだ！だからボクらの旅は馬車いらず、足マメ作らずで今まできたんだけど…。」

「…：とりあえず、レンは体力がないのがよくわかったから、村に着くまで風を使わず自力で行くわよ！ビシ、バシ鍛えてあげるわ！さあ、覚悟しなさい。」

ふふふふ♪」

どこからともなくムチを取り出しニヤリと微笑むメイ。レンにじわりじわりと忍び寄り、ムチをふるう。

ビシッ

バチッ

ビリッ

咄嗟にムチを避けたレンだったが、体は弱い痺れを感じた。そう、ムチはムチでもただのムチではない雷属性のムチであった。

「あら？まだ避ける元気があるじゃない。それならまだ歩けるわよね。走れるわよね。」

キャハッ♪た・の・し・み♪」

「いつ、嫌っ！メ、メイ？ムチなんて危ないからしましょ？

……いやあゝクルトたすけてええええゝ」

ドドドドドドド

にこやかにムチをふりながらレンを追うメイ。水を駆使して、必死な形相で逃げるレン。

「……………御愁傷様です。」

いやゝあのムチはよく痺れるんだよね。何度やられたことか。

ふっ…、レン姉さんに矛先が向かったからボクはやつとアノ痛みから解放される！

ああ、女神さま！レン姉さんに会わせてくれてありがとう！」

クルトはメイを止める気も、レンを助ける気も微塵もなかった。

レンの必死な努力も甲斐あって、3日も経つと徒歩で旅する体力がついていた。もう二度とあのムチの被害にあうことのないことを、レンは神に祈った。

「あと少しで、魔の森に着くわよ。魔物の強さも街道より上がるから気を引き締めなさい。」「魔の森？村に行くんじゃないの？」

「村は魔の森の中にあるんだ。」

「魔物がいるのに、危険じゃないの？」

「魔は魔物の魔じゃなくて、魔法の魔。」

「は？」

「精霊でも幻獣にも属さない力を宿すモノが生まれる森だから魔の森と呼ばれるの。」

「物語で魔女とか魔法使いとかでてくるよね？魔法って、効果は似てても精霊の力と根本的に似て非なるモノらしいよ。魔物は精霊を食い殺した獣の成れ果てとか悪霊の進化系とか謂われているんだけど、魔の森で生まれ育った魔物は魔法を使うんだよ！」

「で、村は魔法使いの村だから安全よ。それに、砂漠にでるには魔の森を通るのが一番近いのよ。遠回りすると予定の倍、歩くことになるけど？」

「ぜひ魔の森を通して下さい！」

ムチの件で学習したレンは、メイの微笑みにセンサーを働かせ危機を脱出した。

「と、とにかく、魔の森に入ろう？」

「……そうね、獲物は逃げないんだから、機会はまだあるわね。ふふ♪」

レンはどこでメイのスイッチを入れてしまったのかと、過去の自分を叱責し、メイの発言に寒気を感じ身を縮めた。

魔の森は、魔というだけあって魔物は強い。

今、目の前にいるのは身長2m弱の熊だ。体が大きく、腕を大地にふると穴が空くほどの怪力。口から氷の塊を飛ばしてくるのも厄介だ。

「はっ、ふっ、とおっ」

水の盾を空中に4つ浮かばせて氷を弾きつつ、隙間をぬって走り、槍で突く。熊の体表に傷をつけられても、中々致命傷を与えられず、体力を消耗していくレン。

「はあはあはあ、次で決めるわよ！」

熊が氷を吐く瞬間は、熊の体が止まる。その時に狙いを定め、機会が来るまで防御に徹する。

「今だ！」

水で鎖を創り、手足を拘束する。それと同時に槍に水を纏わせ、刃先を凍らせ瞬時に心臓を一突き。槍は熊に突き刺さり、膝を折る熊。

「やった！」

喜びのあまり、はしゃぐレン。だが：

「喜ぶのは早いんじゃない？」

「え？………うそ！？」

確かに熊の胸に槍は刺さった。だがしかし、心臓には到達していなかった。また、拘束できたと思っていた鎖は解かれていた。

「そつ、そんなあ？」

「レン、熊の動きは私が押さえて、守りはクルトがしてあげるから、あなたは奴の頭を氷漬けにしなさい。それだけに集中するならできるでしょ？」

「わ、わかったわ。」

レンは後衛に下がり、意識を集中する。

「風よ、あの図体でかい輩の足留めを。」

「風よ、ボクらの盾となり鎧となりて。敵を幻で惑わせよ。」

熊は動きを風に制限され、攻撃を逆方向に向かってしている。

「レン、今がチャンスよ!」

「水よ、彼の者の息を塞げ。水球よ、彼の者の頭を纏い、凍てつけ。」

ピシッ

…ズドーン

熊は酸欠の上、凍らせらせ、絶命した。

「はあはあはあ。もうだめえー。」

疲れて、座りこむレン。レンはそのまま眠ってしまった。言いたいことは色々あったが、こうなってしまった以上無理に起こすことは躊躇われる。

「仕方ないから、そのまま村につれてきましょ。」

「結構いい線いったのに。全くスパルタだね。」

「何いつてるの? カグラ教国だっていつまで安全かわからないのよ。それにレンは火や土の民に狙われてるの。呑気にしている場合じゃないのよ。」

「そうだけどさ」

「何? クルトもスパルタがいい?」

「め、滅相もない! それだけは! それだけは」

村に向かって逃げ去るクルト。

目を開けたら知らない天井だった。木目の天井になんだかほっくりと、心が温められた。

「あ、おねえちゃん、おきたあ？

おにーちゃん、おねえちゃんおきたよー」

「あ、あれ？ここは？」

「ここはまほーつかいのむらなの。ミラのいえにとまりにきたこびとさんが、おねえちゃんをはこんできたんだあ。ミラがね、おねえちゃんをかんびようしてたんだよー。」

「そうなの、ミラちゃんありがとう。おかげでお姉ちゃん元気になったわ。」

すると、勢いよく扉が開けられた。扉を開いて部屋に入ってきたのは、クルトだ。

「レン姉さん、おはよう！

顔色も良くなったね。ミラちゃんありがとう。メイを呼んできてくれるかな？よろしくね。」

「クルト、私、一体…？」

「あれ、覚えてない？森で熊を倒した後、疲れてそのまま寝ちゃったんだよ。それで村まで運んできたんだ。

でも、その後、熱出しちゃって2日も寝込んでたんだよ。だるくない？」

「そう、ありがとう。体は平気よ。心配かけてごめんなさい。」

次はメイが部屋に入ってきた。

「レーンー、大丈夫？体は辛くない？熱までだして、私がいじめず

ぎたせいだわ。ごめんなさい。」

「ううん、メイのせいなんかじゃないわ。私が未熟なせいよ。気にすることないわ。これからもよろしくね。」「…そう、じゃあこれからもしバシ行くわよ。起きて早々なんだけど、言わせてもらおうわ。レン、あなたは確かに潜在能力は高いんでしょうね。でもそれを過信してはだめよ。あなたはコントロールが悪すぎるわ。せっかく持ってる力を生かしきれずに無駄に体力を消耗した結果がこれよ。宝の持ち腐れよ。」

ということで、コントロール力をつけるのが、今後の課題よ!」

「ま、とりあえずご飯食べて栄養つけようよ。」

「まずは体が資本だものね。さぁ行きましよ」

一晩明け、レンの体調はだいぶ良くなり、メイによる特訓が始まった。

「さあ、始めるわよ！」

レン、あなたの課題は質を保ったまま2つの水の操作ができることよ。」

「わかったわ。」

「じゃあ、水の盾をだして防御しながら水球をこの案山子に当てることができたら一先ず合格よ。」

さあはじめっ！」

開始と同時に鎌鼬がレンを襲い、メイは小さな渦巻きを3つ案山子の回りに発生させる。

レンは頭の中から足の先まで覆う大きな盾を作り、隙をみて水球を飛ばす。だが渦巻きに簡単に弾かれてしまう。盾の端に小さな孔があき、その隙間から鋭い風の爪が飛び出し足をやられる。

「ほらほら、盾の隅々まで力を均等に強く張って、水球も強固にしなさい！」

痛い思いはしたくないでしょ？」

簡単にあしらわれてしまうレン。

「なにをうう負けないんだから！」

「レン姉、ファイト！」

レンはめげずに、意識を集中させていった。

特訓は日が暮れるまで続いた。

辺りは暗くなりそろそろ宿に帰ろうかという時、宿屋の若女将が顔をだす。

ミラの未来の姿、とも言えるような風貌の、金髪でブルーの瞳を持つ優しい女将さんだ。

「皆さんお疲れ様です。

あのうちのミラを見かけませんでしたか？お昼過ぎに遊びに行くと行ってでたきり、オヤツの時間になっても戻らなくて。

あの子皆さんになついてましたから、来てないかなと思ひまして。」

「ミラちゃんですか？

いいえ、一度も来てませんよ。」

「そうですか……。全くだこへ行ったのかしら。夜になると外は危ないのに……。」

「女将さん、私達も探すの手伝います。探してないのはどの辺ですか？」

「お客さんなのに、申し訳ないですわ。でも、お願いできますか？

ええと、探してないのは……。」

「フムフム、はあはあ……。」

わかりました。じゃあメイは風に頼んで探して頂戴。クルトは女将さんと一緒に村の中全体を、私は水精に協力を頼むわ。

とりあえず1時間後に宿屋の前で！」

1時間後

「……見つからないわね。何故か分からないけど、途中で風の痕跡が途絶えるの。まるで何か大きな力に阻まれてるように。」

「風も？」

水もそうなのよ。一体どういうことかしら？」

「まるで神隠しみたいだね。女将さん、こういうことはこの村でよくあるの？」

「いえ、聞いたことはありません。…無事でいてくれるかしら？とても心配だわ。どうして目を離してしまったのかしら…。」

「女将さん、水精は血は流れていないと言っています。だから無事であることを信じましょ！」

「とりあえず、これ以上の屋外での搜索は危険だわ。宿に戻って早く寝て、朝一で搜索を再開しましょ。」

「うっ、ミラ、どうか無事でいてっ…。」

3人は女将を宥め、部屋に入り床に就いた。

その晩、レンは夢を見る。

レンは何故か森の中をさ迷っていた。

「どうして私は魔の森にいるの？宿屋で寝ていたはずなのに。」

レンは自分が森のどこにいるのかわからず、村を、人を求めてひたすら歩いた。しかし森は生き物が息づく気配もなく、不気味で静かであった。

レンがひたすら木々をわけ歩き、もう歩けない、もうだめだ、と諦めを感じたその時、突然道が開け、目を先に向けると祭壇があった。

「この祭壇は一体？里の祭壇に似ているわね。」

レンが疑問を抱きながら祭壇に近づくと、そこにはミラが横たわっていた。思わずミラに駆け寄り寄るレン。

「ミラちゃん！…ミラちゃん大丈夫？ミラちゃん？」

レンがミラに声をかけ、体を揺さぶると反応があった。そして、ミラが目をあける。すると、淡い青色だったミラの瞳は濃い蒼色をしていた。

「え？…ミラちゃん？だよね？」

「……………」

「ミラちゃん？」

「……………妾が誰かわからない？水の巫女よ。」

「え！」

「水の里があのようになってしまった手前、そなたとリンクをとれる場所がなくての。困っていた所、丁度良く精霊を身に降ろせる子がおったのでこのような手段を取らせて貰ったのだ。」

この子どもには悪いのう。」

「あ、ああああ！この水の波動は！まさか、マーマイド様？」

「左様。そなたは何れ、力で妾を呼び出すことができる素養を持つ者。気長に成長を待つつもりでおった。しかし、そうもいっとられない情勢でな。」

妾はそなたに水鏡の欠片を授けに來たのじゃ。強い力じゃが、そなたなら使いこなせるはずよ。」

ミラの体に宿ったマーマイドは、レンの手に青い玉を渡す。すると、玉はレンの手の平に沈み、レンの体は青く輝き始めた。

「ふう、そろそろ時間じゃ。」

…良い夢を。」

視界が霞んでいき、レンは意識を失う。

朝、日が昇る頃、レンは目覚める。森をさ迷っていたのは夢だったのか、と思うのは束の間。自分の隣でスヤスヤと眠るミラを見つ

け、夢ではなかったと知る。そこへ、メイとクルトが部屋にやってくる。

「レン、朝よ！」

さあミラちゃんを捜しに行くわあ……………ミラちゃん!？」

「あつれ〜?なんでミラちゃんがいるの?」

「うう〜ん…、おかあさんあと5ふん。」

「……………」

「はっ、とりあえずボク女将さん呼んでくる!」

「何があつたのレン?」

「…ミラちゃん起こして、女将さん来たら説明するわ。私もイマイチ整理できてないし。」

階段を駆け上る音が聞こえる。女将がこちらに向かっているようだ。そして、勢いよく部屋の扉が開かれる。

「ミラっ!ああミラ、よく無事で!」

…ミラ?ミラ、起きて?」

「ふああ〜、おはようおかあさあん。あれえ、おさかなさんは?」

「おさかなさん?」

「うん。ミラね、もりであそんでたのー。そしたらね、おさかなのおねえさんがね、たすけてっていうの。まものじゃなくてきれいなおねえさん。おさかなのしっぽがあつて、おっきなみずたまたくさんみせてくれたよ!」

「魚の尻尾をもったお姉さん?って〜精霊かしら。」

「レン、何かわかる?」

「…実は昨晚夢で、かくかくしかじか、ということがあつて、目覚めたら隣にミラちゃんがいたのよ。メイはどう思う?」

「…ミラちゃんの言うお魚さんて、水の精霊長のマーメイド様で間

違うんじゃないと思うわ。おそらく、ミラちゃんは何千年に1人生まれるといわれる神降ろしの巫女なんじゃないかしら。

マーメイド様程の高位の存在を体に宿せるなんて並の素養じゃないわ。

マーメイド様の仰る通り、レンを助けるためにミラちゃんに協力して貰った、ということだった訳ね。」

「まあ、なんてことでしよう！

ミラはもう3才になるのに魔法の発現が遅れていて、それなのに時々村からでて無事なのは何故かと思議に思っていたのです。

：そういえば、ネズミさんとか蝶々さんとお話ししてたって言ったのは、精霊だったのかしら。」

「ちようちようさん？

もりでね、くまさんでもちようちようさんと、もぐらさんと、ねずみさんがまもってくれるんだあ―」

「……………精霊に愛される子か。」

「ん？クルト何か言った？」

「いや、何でもな〜い。」

「変なクルト？

……女将さん、私事にミラちゃんを巻き込んでしまっただけで申し訳ありません。」

「いえ、ミラは無事戻ってきましたし、ミラ的能力も知ることができました。」

「気になさらないで。」

「そうですか、ありがとうございます。」

「ミラね、おなかすいた〜」

「そうね、朝ごはん食べにいこっか。」

翌日、3人は村の入口にいた。

「本当に、何から何までお世話になりました。」

「いい特訓ができたわね。」

「ミラちゃん、精霊さんたちと仲良くね。」

「こちらこそ、何のおもてなしできなくて。」

砂漠の依頼が終わったなら是非村に寄って下さい。」

「またミラとあそんでね。」おねえちゃん！」

村に向かって大きく手を振り、砂漠に向かう3人であった。

閑話：隠れ里

いつの時代からか

この世に精霊使いなる存在がいた。

彼らは精霊に好かれやすい性質を持ち

血に精霊を縛る契約を結ぶ事はなかった。

『全ての精霊の友人であれ。

慈しみの心で、彼らを愛そう。』

彼らは能力者とは呼ばれない。

何故なら、全ての精霊種と語れ

精霊の力を最大限に引き出せる

稀な才を持つ者だから

故に彼らは精霊使いと呼ばれるのだ。

そして稀な才は毒となり

いつの日か表舞台から

自ら消え去った。

この星の何処かに

伝説の精霊使いの里があるという。

衛星にも映らず

古代科学の研究者達は、眉唾物と嘲笑う。

しかし

果ての秘境に里はあった。

人が辿り着けない秘境に。

衛星に映らないよう、特殊な膜に覆われて。

地球が幻想世界へ

天変地異に見舞われた時

アメリカ大陸であつた場所の東は、厚い氷の壁に覆われた。

イギリスからアフリカ大陸であつた場所の西を覆うように、
空から滝が海に注がれた。

幾度も勇気ある人々は

氷の壁を、水の壁を越えようと挑戦した。

精霊や幻獣を通す壁は

決して人間を通すことはなかった。

そう、壁の先に精霊使いの里がある。

全ての精霊に愛され

全ての精霊を慈しむ者達が

命育む聖地が

そこは白い一室。黒い椅子と長机がある以外、真っ白な空間だった。

長い白髭の者から、プルプル肌の子どもまで、老若男女が席にっていた。

そして上座には1人の銀髪青年。そう、迷いの森から里に戻ってきた彼だ。

「それでは、里会議を始める。まずは、諜報部より報告を。」

「はい、長さま。」

先日の精霊Newsで流れた内容と重複する部分もありますが、報告致します。」

報告を始めたのは、黒髪の美丈夫。日本人の血を色濃く継ぐ者だ。

「先日、火と土の里が同時に水と風の里を襲いました。火と土の里は、科学国のアースランドと軍事同盟を結び、この襲撃には多数の後天的能力者が兵器として投入されています。」

これにより、水の里は壊滅し、主要人物と奴隸になった者以外の生存者は確認されておりません。」

風の里は早期に加護者風龍が民を守り、風龍の里に保護されています。」

「それで、火と土の里の狙いは？」

「恐らく、4精霊の取り込み、里の統一かと。」

しかし、火の長は数年前から戦準備をしていた様で、里の統一は建前で別の思惑があるように思われます。」

「ふむ。」「では、次。気象部の報告を。」

「承知、長殿。老いぼれから各地の報告を致すぞ。」

長い白髭で中国出身の仙人か、とツツコミたくなる容貌のじい様だ。

「長殿の予測通り、各地で温暖化が進行しておる。

里の守りの氷も例年より2℃温くなったの。火の里の下に眠るマグマもより活発化しておる。里周囲では時折、弱い地震が起きるの。以上じゃ。」

「やはり、…近いか。

次は、育成部の報告を。」

「はい、長さま。」

報告をするのは、腰まで金髪を伸ばしたおとしやかな女性。シスターの服装をさせたいと、長は密かに思う。

「育成部では、見習いを里にて2名指導中です。素質・人間性に問題はありません。里をでて放浪修行をしている者は1名。素質は問題ないのですが、実年齢より幼く、肝心な時に抜けているのが玉に傷です。

監督の風精の評価は低いです。

素養保持の非能力者の保護ですが、アースランドで軍事妨害にありました。幸い高位精霊を傍に置けたので、死ぬことはないと思われ

ます。

以上です。」

「ありがとう。そう、里をでてるのは1人ね。…もしかして、あのクルトかい？」

「はい、あのお調子者でお馬鹿なクルトです。」

「まあまあ、童心を忘れないというのも大事なことですよ。

精霊使いは長生きですからね。」

その後も、長は各々の報告を淡々と聴いていく。
そして、眉間の皺が増えていく。

全ての報告を聞き終え、長は大きな溜め息をはく。

「皆、報告ありがとう。

さて、皆も僕が言いたいことの予測がついているだろうけど
敢えていうよ。

来るべき刻は近い。

その刻まで僕は傍観者でしかいられない。けれど君達は違う。
定められた寿命を持ち、女神に与えられた役目もない自由の存在。」

ふう、と息をつく長。

「精霊使いの長から、世界の全ての精霊使いへ伝達せよ。
来るべき運命の刻は間近だ。

戦争を止めたい者は、力を奮え。

里の外世界への夢描く者は自由に羽ばたけ。

各地で隠れ住む者は堂々と表舞台を歩きなさい。」

「…長さま、よろしいのですか？長く精霊使いの存在を秘匿してき
ましたのに。」

「いいんだよ、君たちは。

僕の我が儘で、君たちを縛っていたようなものだもの。

……クルトには水の巫女の護衛を。」

「わかりました、長さま。そのように伝達させましょう。」

砂漠の遺跡

ギラギラと太陽が照る。辺りに草木はなく、視界いっぱい砂が広がっていた。光に照らされ、砂は黄金のように輝き、ただそこにあるだけで美しい風景だった。砂漠は生憎の快晴で、気温は45℃を超えていた。

「暑い暑い暑い、あゝっっいゝ」

「やだっ、肌が焼けちゃう！」

「み、みずうゝ」

砂漠を歩き始めて早1時間。順にメイ、レン、クルトの台詞である。

メイとクルトは風を起こせば、砂が目に入り砂中に眠る魔物を起こしてしまうため何もできず、早くも暑さに参っていた。

一方、レンはというと2人にわからないよう、己の体にだけ全身にうっすら氷を纏わせ、1人何でもないといった感じだった。

「2人とも？まだ遺跡にすら着いてないのよ？さっさと行くわよ。」

「レンは暑くないの？休憩したいわ！」

「レン姉、汗かいてくない？………なんかアヤシイー。」

ジーっとレンを真顔で見つめるクルト。黙っていれば、可愛らしさ満点のつぶらな瞳のクルトの視線がレンを突き刺す。

「確かに、旅慣れしている私達よりレンが元気なんてオカシイわね。」

メイは目を細め、ふんふん言いながらレンの周りを1周する。レンはメイとクルトに見つめられ、頬がひきつる。

「……………氷のニオイ。」

「!？」

「あら当たりっばいわね。レン、あなた氷をうつすら全身に纏ってるのね？」

怒らないから、しょーじきに言って？」

「……そ、その通りよ。でも言い訳ぐらいさせて。氷を見えないぐらい薄くして纏い続けるなんて初めての試みで、上手くできたら2人にもかけようと思っていたのよ。」

「ふうん、1時間もお試し？」

「ボクらが水欲しがってた時、何もしてくれなかったくせにい？」

「それは、同時に力を行使したら力が暴走すると思って…。」

「でもレンってマーメイド様から力を授かった後、コントロール上手くなったよね。水だす位、そんなに負担じゃなかったんじゃない？断る時、氷の纏い云々のことは言ってなかったわよねえ。」

「そ、それはっ…。」

「レンとは気心知れた仲になってきたと思っていたけど、私達って信頼されていないのかしら。」

肩を落とし、しょんぼりとして涙を目に浮かばせるメイ。

「そんなことないわ！」

「黙っていてごめんなさい。悲しい思いをさせてごめんなさい。何でも御詫びするから。」

「何でも？」

「それじゃあもちろん、私達にも氷の纏いをかけてくれるわよね！それから喉を潤わせたいから、冷たいお水を頂戴。あとね、かき氷をつくって食べさせて。一緒に氷菓子も作って。」

それから…………、あと…………、ついでに…………、明日も…………で、

……で、よろしくね！」

満面の笑顔でメイは言った。その瞳に涙はなかった。

「あーあ、レン姉もいい加減、メイの手の平で転がされてることに気づけばいいのに。」

…メイが泣くわけないじゃん」

3人はレンの力で潤い、砂漠をさらに突き進む。

砂漠の奥深く

右を見渡しても

左を見渡しても砂漠

人の住めない灼熱の大地に遺跡があった。

いつからあるのかわからない、三角形の建造物。

いつだったか、砂漠を包んでいた蜃気楼が晴れ、人々の前に姿現した。

外面は太陽の光で金に輝き、どういう仕組みなのか、砂を弾く。

砂嵐が起きても壊れることはなく、侵入者が近づけば遺跡の周りに砂流が発生し、遺跡を荒らされることはなかった。

遺跡内から火の精霊が生まれ、灯りもないのに内部は明るかった。

人々が遺跡を調査し始めたと同時期に、どこからともなく炎狼をたくさん従え、頭に角を持つ狼が現れ、調査員を殺していった。

遺跡の守護者か、と囁かれたが人語通じず、真実は誰も知らない。

グルル

グルルルルル

「ニンゲンガ、オロカニモ、マタキタ。」

「ワガケンゾクヨ、センメツセヨ。」

グル、ルルルル！
オオオオーッ

メイはどこからか狼の遠吠えを聴いた。3人は視界に遺跡が入るほど、遺跡に近づいていた。

「……！？

2人とも、風が狼の声を拾ってきたわ。気を引き締めて！」

「あいさ。風よ、ボクらの足に風を纏わせて。」

「来るわっ！」

炎の塊が四方から飛んでくる。

「氷よ、我らに守りを。」

氷の壁を四方に張り、炎を防ぐレン。だが、氷よりも火力が強く、所々穴が空く。

「レン！私達に氷の鎧と盾を！」

西側の炎狼に向かって駆けるメイ。東側の炎狼に向かって駆けるクルト。

「炎で溶けない強固な氷の鎧と盾を風の戦士に。
マーメイドよ、水の巫女の声に応えたまえ。
水よ我に、不可侵の加護を。」

メイの声に応えるレン。

「風よ、敵を切り裂け。首を刈れ。」

次々と四方の炎狼を倒していくメイとクルト。レンは水を強固に続けるため、後衛で力を注ぎ続ける。

炎狼を前方だけの6匹まで数を減らした頃、炎狼の後ろに一角狼が現れる。

「アイツがリーダーね！」

クルト行くわよ！レンは手下たちを。」

メイとクルトが一角狼に向かい前にでる。レンも氷の鎧を纏い、槍にも氷を纏わせメイとクルトを追おうとする炎狼を突いていく。

「あなたたちの相手は私よ！
かかってきなさい！」

一方2人は…

グルルル…！

「ワガケンゾクガ！」

オロカナ、ニンゲンニテンバツヲ！」

「ボクらが相手だよ！」

風よ、目の前の敵の足に鎖を。風の刃よ、角を折れ。」
「！？」

…これは精霊言語？つつ、クルト待ちなさい！」

風の動きを察知した一角狼は、さっと避ける。

「さすがやるなあ」

「クルト、そいつは私に任せて。」

「いやいや、さすがににメイだけじゃ倒せないって。強いよ。」

「いいから！」

「試したいことがあるの。」

グルル：

「ソノテイドデ、ワレヲオソウナゾ、ムダナアガキヨ。」

シャラララ：

「ワタシハ、フウリュウサマガタバネル、カゼノケンゾク。アナタ
サマハ、ドナタデスカ。」

精霊言語で一角狼に話しかけるメイ。

グ、グルル！グルル：

「ソナタ、カゼノセイレイトナ！」

ワレハ、タイヨウシンサマニツカエル、ヒノオウ。カゼハ、フウリ
ユウデナカッタハズ。」

「ああ！なんてこと！」

「ねえねえ、何話してるのかサッパリんだけどお？」

「ちよつと精霊言語でこの方と話してるから待ってなさい。」

炎狼とレンは闘いを止め、炎狼たちと2人は後ろに佇む。

精霊言語で熱く会話し始めたメイと一角狼。

「風の者、何故に人間と共にする？愚かな人間の所業を忘れたか。
太陽神様が戻られるその時まで、我はここを守らなくてはならない。」

「火の王よ、申し訳ありませんが、今は貴方様が眠りに就かれた時

代と精霊の在り方が変わってしまったのです。

火はフェニックス様が束ね、土はエルフ様、水はマーメイド様、風は風龍様が各々精霊を束ねております。」

「なんと、火はあの熱血漢がだと！我に敵わなかった小僧が長だと！」

「それと、誠に言い難いことなのですが…。」

「なんだ。小娘、さっさと言え。」

「……この大地、この星、この世界、どこを探しても神はもう、女神サラ様だけに御座います。」

精霊言語を理解できない者には、『グルルル…とシャララ…』としか聴こえなかった。メイ達の会話は白熱し、互いに百面相をしていたが、全くもって話の内容はちんぷんかんぷんであった。

日が陰って気温が下がり始めた頃、やっと会話が終わった。そして、メイから教わったのか、一角狼が人間にもわかる言語で声をかけてくる。

「人間たちよ、先程は殺そうとしてすまなかった。

我らはこの場所を守っていたが、風の娘から歴史を聞いてな。もう守る必要はないと知ったところだ。我らはこの地を離れるが、詫びに我が加護を授けよう。」

「喋った！えっ！加護？」

慌てるクルト。ニマニマするメイ。キョトンとするレン。

「ふむ、ただの迷惑料だ。小僧と後ろの水の娘よ、近こうよれ。」
「「はいっ！！」」

2人揃って一角狼の前に気をつけの姿勢をとる。

グルルル……

「我、太陽より生まれし最後の火。女神の定めに属さず、自由の脚を持つ者なり。」

如何なるモノにも消されることのない命の炎よ。

我が命の炎よ、彼の者に祝福を。彼の者の命に守りの炎を。彼の者に灼熱の武力を。」

温かい青い炎と赤い炎が2人を包み、辺りは眩しく輝いた。輝きと炎が消えると狼たちの姿はなく、2人の手の平には一角狼の牙が握られていた。

「まあ、加護だけじゃなくて牙までくれたなんて、2人は幸せ者ね！」

「……メイ？」

あの一角狼が何者だったのかとか、どんな加護だったのかとか、この牙の意味が何なのか、全くわからないんだけど。」

「ボクもボクも」

「えーとそうね、まずはあの一角狼は精霊だったわけよ。」

「それはわかったわよ。でも依頼受ける時、言葉が通じないって話だったじゃない？」

精霊なら人間と話してできるんじゃないの？」

「それね、確かに精霊は人間と話ができるわ。」

でもね、あの方々は古代精霊なの。古代精霊とは精霊言語を使わないと会話ができないの。」

「古代精霊？何それ、ボク知らない。」

「……2人は古代文明が繁栄していた頃の精霊の在り方について知ってる？」

「古代文明の頃？」

「確か、精霊は空想の産物と謂われていた時代だったって聞いたこ

とある！」

「その通りよ。……精霊は人間社会に関わらない、関われない仕組みの時代だったの。その時代に活躍して長い眠りについて、最近目覚めたあの方は人間と会話ができなかった。」

「へえ……。あ、でも何でその仕組み？それが変わったの？」

「……それは、私の口からは言えないわ。私の立場上、人間に漏らせば消滅させられるから。」

「こわっ！聞かなかったことにする。」

「じゃあさ、ボクらが貰った加護とこの牙について教えて！」

あの狼さん、グルルル〜って言ってて、どんな加護だったのかわからなかったし。」

「基本的に火の民が生まれつき持つ加護と同じよ。」

ただ、あの方はフェニックス様より高位な存在で、火属性の中でも命の炎を司る方だから、火の里の人たちとは微妙に強みが違うわ。」

「フェニックスよりも高位……。そんな相手に攻撃してたんだ、ボク。」

「

「あの方は守護や武力の加護を与えて下さったから、その牙は炎の武器や防具に変換できるはずよ。」

それと、依頼達成の証にしろってことだと思っわ。」

「炎の加護があれば、火の里の民に襲われても闘えるわね。ちょっとこの牙試しに使ってみよっ！」

牙を握りしめ、防具を願うレン。すると、牙が青く光り、光の範囲が大きくなる。

「うまくいったかな〜

……………あれ？」

防具を願ったのだが、足もとには青い炎を纏う子どもの狼がいた。

「あらあら、この子火属性と水属性を持ってるわよ。もしかして力を注いだ？」

「うそ。私が願ったのは防具よ―」

「クウン…。」

「まあまあ、こんなカワイイのに。それに、上手く育てれば強力な相棒になるんじゃない？盾にも武器にもね！」

「いーなー、ボクも欲しい―」

そんなかんやで、日が完全に暮れ、砂漠を渡るに危険があったため、遺跡の入口で野宿するのであった。

砂漠の遺跡－2－

砂漠の夜は寒い。しかし、遺跡の敷地内は温かであった。火の王の加護を得たレン達には、火の精霊が息づく気配を感じられた。命の炎のあたたかさを肌で、心で感じた。

地平線から橙色の光が頭をだし、眩しさに辺りは包まれ始める。青狼はレンに寄り添い、頬をペロッと舐める。

「ひゃっ…

う…、おはよー。」

レンの声でメイとクルトも起き出し、朝食をとる。

暑さが増す前に砂漠を渡ろうと、準備をする。身なりを整えるレンの服を引っ張る者がいた。それは青狼だ。

「ちょっと何より、いい子にしてなさーい！」

「クウン、クン！」

「…なんかついてこいのなこと言ってるわよ。」

「メイ！通訳お願い！」

「クウン……………」

「シャラララ……………」

「また精霊言語？ボク、習おうかな…。」

青狼とフンフン、話し込むメイ。明後日の方向を見つめ呆けるクルト。

「…ちよっと2人共！

耳寄りな情報を得たわ。なんと、この遺跡には首都近くへ繋がる転

移門があるとのことよ。それも牙に詰まった火の王さまの記憶を辿って案内できる、ですって。」

「わお！」

「砂漠を渡らず、ひとつ飛びできるって事？」

「そう。：ああ、あとこの子に名を与えれば契約も完全になって言葉も通じるって言ってるわ。」

「契約？」

「ほら、レン姉が水属性を注いだことじゃない？」

「中途半端に力を与えて、仮契約の精霊みたいな感じなのよ、今。」

「名前かあゝ」

「名を授ける正式な方法は、こう……で、……だからね！」

「うーん、安直だけど青いからこれにしようっと。」

メイとクルトが見守る中、レンは人差し指の指先を槍の刃先で少し傷つけ、青狼の口へ指を突っ込む。レンの血が青狼の体を巡り、青狼の体が青と赤に点滅しながら輝く。

「我、マーメイドと契約せし水の巫女の血をひきし者。命の炎と癒しの水を司る者よ、我が血をもって契約す。」

汝の名はセイラン、契約者の名はレン。

我が血、途絶える刻まで、我が盾となり武器となり友であることを願う。」

光はレンとセイランを包み、暫くすると消えた。

「御主人様、名を授けて下さりありがとうございます。」

貴女のため、尽くしていきます。よろしくお願い致します。

……ああ、私は人型も狼体型も武具にも成れます。お好みのタイプをどうぞ。無論、性別や容姿も御希望あれば最大限できる範囲でお応えしますよ。

そうそう、クルト様？精霊言語でしたら私がお教えしましょうか？
但し、私は厳しいので、それでもよければですけど。

あと、メイ殿？子守も大変ですね。辛い時は愚痴も聞きますよ。
それでは、皆様今後ともよろしくお願い致します。」

そう言って項垂れるセイラン。見た目は可愛らしい子狼。中身は
丁寧な執事だった。

外では暑さが増す頃、3人は1匹の狼に遺跡内を案内されていた。
遺跡内は適度に空調管理され、暑すぎず涼しすぎない快適さを保
っていた。また、一般的に知られる遺跡の内部は暗く罠も多いのに
対し、この遺跡の内部は明るく罠にかかることなく、上部へ進んで
いった。単にセイランがいるため罠が発動しない、という事でもあ
るが。

転移門目指し進む3人。途中宝の部屋もあったが、無視して突き
進む。

「ああ、宝の山があゝ！」

「メイ？私達の依頼は遺跡を安全に調査できるように魔物を駆除す
ること、だったわよね。」

遺跡荒らしじゃないのよ。」

「メイ、何かとっていてもどうせ後から没収されるのがオチだよ
」

「メイ殿、あれは侵入者向けの宝ですから触れば怪我しますよ。」

「え！アハッ、そんなことわかってるわよ」

そして、セイランは壁に橙色の玉が填まった場所の前に案内する。

「あれ？行き止まり？」

「ちょっとお待ち下さいね。」

ええと、ここをこうして……。さあ、どうぞ！」

ゴゴ　ゴゴ

セイランが玉に触れて何やらすると、壁が左右に開く。

「ほわゝ、知らないと解けない仕掛けばかりね！」

壁の先は1本道で、最後は階段になっており、上りきると祭壇のようになっていた。天井は三角の頂点の様だった。

「ここは、祭壇？」

「はい。ここはこの建物の頂上に位置しています。頂点に注がれる太陽の力を集め、大規模な術を発動させるのを可能にしています。かつてはこの祭壇にて太陽神様が巫女に降臨したそうです。」

「ということは、この力場を使って転移を？」

「はい。御主人様と契約している私なら、貴女様の記憶する場所を貴女様が強く思い浮かべることで、転移させる術を発動できます。」

「転移術って、風の補助があると精度があがるんだよね！」

「ええ、そうですね。」

では、メイ殿、クルト様、お手伝い願えますか？」

「あいあいさ〜！」

首都の壮大な門、竜人の門番とお色気門番を強く思い浮かべるレン。

全員に風の纏いをかけ、セイランの術にも風を上乗せするメイとクルト。

クウ〜ン：

「太陽神よ、我が願い、我が主人の思いに応えたまえ。」

時の精霊よ、風の精霊よ、我らに転移門を開き運べ。開け、次元の

狭間よ、導け風よ。

我、命の炎に連なる者。我、マーメイドの庇護者と契約する者。この場の力を贅に。」

シャラララ：

「唄え唄え唄え、大いなる自由の風よ。

踊れ踊れ踊れ、愛しい稚児よ。

我らを渡せ、彼の地へ導け。」

「風よ、道を。ボクの友よ、彼の地へ道を繋げ。」

祭壇に大きな力が渦巻く。天から眩しい光が射し込み、周囲を真っ黒の闇が包み始める。

3人と1匹が闇に飲み込まれると、闇は消え、静寂が訪れた。

束の間の休息

その日も首都は快晴だった。結界が強力で有事もなく、代わり映えのない風景を過ごす毎日だったが、門番という仕事に誇りを持って働いていた竜人。

彼は200年と、長く門番を務めているが、生真面目でお堅い性格だった。

彼は今日も、露出度高い乱れた服装の同僚に、はしたないだのなんだのグチグチ説教していた。

すると、突然風の流れが変わり、何やら強い力が向かってくるのを感じ取る竜人。

「おい！風が変わったぞ！武器を構え備えろ！」

門番の目の前に凝縮された風が発生し、突風が彼らを吹き飛ばそうとする。同時に門全体に結界をはる竜人、出入りする民に門から出ないよう勧告する女性門番。

竜人がジッと目の前の風の塊を見つめていると、その中心から闇が広がっていく。

突風はおさまり、闇が人ほど大きくなると、なんとその中から何人かの人と獣がでて、地面に落ち伏せた。

メイ、クルト、レンとセイランは、王都の門の脇にある詰所にいた。彼らの前には、門番の竜人が1人。

「では、お前達は何者だ！」

この首都に侵入しようとはな。一体どこの国の間者だ！」

「だ〜か〜ら〜、それは誤解だって言ってるでしょ！」

「そうよ、私達はただギルドの依頼を達成して戻ってきただけよ。」

ギルドに確認してきなさいよ。」

「ふん、ギルドの方は調べさせている。しかしあんな力を発生させずとも戻ってこれただろう。それをワザワザあんな方法をとったということは、何か後ろめたい何かがあるはずだ！」

「ねーおじさん、あれは初めて皆で力合わせて発動した転移術で、砂漠越えを短縮するためだったって言うてるじゃん。門も街も何にも被害なかったんだからいいじゃん。」

「俺はまだおじさんなどではない！」

それに被害がなくても、お前らの存在が問題だ！」

「ぬぁんですってー！」

レン、クルト、セイラン！コイツは私の敵よ！」

「ふふん、やっと本性を現したなこの女狐め！」

目の前で広がる惨状に呆れるセイラン。セイランは場をおさめるため、おしとやかな女性体を取り、竜人の肩を叩く。

「なんだ。今はいそがし…」

竜人が振り返ると、そこには蒼髪を腰まで伸ばした清楚な女性がニコリと微笑んでいた。その姿はセイランが力を使い、竜人の理想の女性像を体現した姿であった。竜人はカッカしていた気持ちを、一瞬でドギマギした気持ちに変えた。

「あのお、私の仲間が失礼をしたようで、申し訳ありません。

よく言っけかせるので、今日の所はこれで勘弁していただいだけませんか？」

あなたの怒ってる姿より、笑ってる顔のが好きですわ。」

「えっ、あ、いやその…」

上目遣いで竜人を見つめることも忘れないセイラン。竜人は好みの女性にそんなことを言われたことがなく、照れてあたふたする。そこへ、もう1人の門番が部屋にやってくる。

「かつちよく、ギルドの裏とれたわよ。その人たち問題なしよ。……って、課長が照れてる！」

何々？ ははあん、この人課長のタイプなの？

ああ、そりゃアタシの服装に毎度イチャモンつける訳だ！」

「あ、あああ、貴女の名前は？」

「…………ランと申します。」

「ラン殿、この度は貴女の仲間を疑ってしまい申し訳ない。御詫びに今度は非食事でも！」

「…ごめんなさい。私は御主人様のモノですから。」

「御主人様？」

頬を赤く染め、恥ずかしがながらりレンを指差すセイラン。

「あの女が貴女の主人…。」

え！ 女同士で？ いやでも、それなら……………」

「おーい、課長？」

なんだなんだ？ ブツブツ言って自分の世界に行っちゃったよ。

アンタ達、長い時間拘束してわるかったね。

ほら街に入んな。じゃあね♪」 門から少し離れた場所で、狼に戻るセイラン。眉間に皺が寄るレン。声にならない笑いを発し転がるメイとクルト。

「……………ねえ、セイラン？」

何故アソコで頬を染め上げて主人を示す必要があったのかしら？ 私、百合だと思われたのよ。門を通る度、そういう目で見られるのよ！」

「エヘッ」

「笑って誤魔化そうなんていい度胸じゃない。メイ？もちろん例のムチ貸してくれるわよね？」

レンの迫力に圧され、電撃のムチを渡すメイ。ムチから発せられる属性を察知し、冷や汗をかくセイラン。

「あ、あの？御主人様？」

「あら、今更言い訳は無効よ。悪い子どもは、よく寝ないとね！」

そこにいたのは悪魔の微笑みに電撃のムチをもつレンだった。

セイランの表情がどんよりする一方で、なんとか気持ちを復活させたレン。

クルトとメイは笑いすぎて、元気がなかった。

彼らは日が暮れる頃、朽ちかけの教会、ギルドに到着した。

「さてと、とりあえず先に物流センターに行って、旅で倒した魔物の素材を売りにいきましょ。」

テクテク

トコトコ

「こ・ん・に・ちわ〜」

「おお、レン達じゃねえか！久しぶりだな！」

「トップスさん、お久しぶりです。」

「ねえ、おじさん、これらを換金してランクポイントは全てレンに入れてあげて。」

「がってんだい！って〜なんだいこの量は！」

「あのボクたち、ついこないだまで南の砂漠に行っただけだったところだから。」

「帰り道にギルドがなかったから、こんなに増えちゃって。」

「ったく、しょうがねえなあ。」

「……ほら、報酬は2玉500石ってとこだな。ギルドカードだしてみ。ポイントは、……っと。」

「ありがとうございます！」

「次はこんな溜めないでこいよ」

その後、彼らは受付へ。

「皆様、依頼達成が認められました。ギルドカードをお出し下さい。……返却しますね。」

レン様、今回の依頼達成と物品調達にてランクアップ試験を受けられます。お受けしますか？」

「はい！」

「では、こちらの用紙とギルドカードを持って試験室へ。」

掲示板前に戻る彼ら。レンはそのまま試験室へ、クルトとメイはギルドホテルへ、セイランはレンに付いていく、と言い分かれた。

白い扉を開けるレン。

「ここが試験室……」

真っ白で何も無いわね。」

「ふふ、ようこそランクアップ試験室へ！」

誰もいないはずなのに、知らない声が部屋に響く。声はレンが持っていた試験資格書から発されていた。

「か、紙が話したわ!」

咄嗟に用紙を離すレン。用紙はレンの手を離れ、落下すると思いきや、宙に浮かんだ。

「う、浮かんだ!」

「クッククック、驚きすぎ!」

紙の中心部が光り、レンそっくりの女性が目の前に降り立つ。

「私とそっくり?」

「私は貴女。貴女は私。」

貴女は弱い。私にはあって貴女に無いもの。さあ、私を倒して掴み取りなさい。」

偽物の私はセイランそっくりの狼も呼び出し、私の槍そっくりの槍を持ち、氷の鎧を纏った。足場に氷の玉を放ち、体に炎の玉を投げ飛ばしてくる。それと同時に進行で、狼に跨がり槍で鋭い突きを振るう女性。

私は足場を常に温め氷を溶かし、炎を纏い、彼女の攻撃を避けるだけだった。セイランは人型をとり、火と氷の矢を交互に後衛から放っていた。

「その程度? その程度でランクアップを願うの?」

「私は、私達は負けられないの! 逃げる訳にもいかないのよ!」

「そう、私は貴女、貴女は私。どう足掻いても無駄よ!」

「セイラン! 我が身を守る鎧となりなさい。」

「無駄無駄。」

水よおいで、水よ唸り波となれ！彼の者を水に沈めよ！」

「波よ凍てつけ、炎よ彼の者に灼熱を！」

「ふん、だから貴女は私。貴女に防げるものに、私ができないとでも？」

水鏡よ灼熱を跳ね返せ！」

「くっ、水鏡よ我に結界を。」

「…これでおしまいね。」

青狼よ炎角に、水よ魚となりて。命の炎よ、新たな力、生み出せ！」

炎を纏った細長い角を持つ魚が現れる。

「そ、そんな、力の魚への変換！？」

「ふふ、貴女はにできなくて私にできるこの力で、貴女を倒す！」

魚がレンに迫る。危機一髪で、攻撃を避ける。魚の口から氷のナイフが飛び、角から火の玉が飛び出す。レンはひたすら防御に徹する。

「うっ、これじゃ勝てない？

強いわ…。」

「御主人様！諦めないで下さい！」

「でも、相手は私と同じ力を持ち、しかもあっちのが能力は上なのよ。」

「御主人様、それでは相手の思う壺です。これは試験なのです。勝てないような試験でないはずですよ。」

それにあの者、何度も御主人様と同一であると言ってます。何やら意味深でないですか？」

「そういえば…。」

魚がレンを襲い、レンが防ぐ合間にレンに気づかれないよう氷の

壁を四方に張っていく女性。

「ねえ、そろそろ終わりにしたいんだけど。周りを見てごらんない？」

「はっ！壁が！…逃げ場がない。」

「御主人様…。」

レンは考える。

貴女は私、私は貴女。彼女はそう言った。

つまりは、私にもあの魚は作り出せる能力が備わっているということかとよね。

…でも、彼女を傷つけたら私も傷つく？

それならば…

「ふふ、やられる覚悟を決めたかしら？」

「いいえ。」

「まあ、呆れた。苦しめばいいわ！」

「御主人様！」

「私は貴女、貴女は私。それが本当ならば…

水鏡よ、命の炎よ、この場にあるモノを清め、癒せ。

マーメイドよ、火の王よ、我が願いに応えたまえ。

浄化の水よ、命の炎よ、我が心を清めたまえ。」

魚も氷の壁も、水と炎によって消された。部屋にはレンとセイラ
ン、偽物の彼女だけだった。

「…よくやりました。合格です。

黒の者が赤に上がるためには、己自身と闘い、心の弱さに打ち勝つ
必要があります。

貴女に私が見せた強さは、実践する力あるのに発展できずにいただ

けで、貴女も持つもの。

ただ、あの魚は貴女が願う姿じゃないから、自分で姿を創造してね。
：ああ、時間です。

私は貴女の心の欠片。いつでも私は貴女の中にいるけれど、もう会えない、愛しい貴女。

幸せになってね。」

彼女の体は薄まっていき、やがて消えた。すると、レンは部屋から出され、廊下にいた。

足元には紅色のギルドカードが落ちていた。

束の間の休息―2―

レンはギルドランクが紅に上がり、クルト達とは別行動で様々な依頼をこなしていった。

ある日、レンは悩んでいた。そう、力を魚にできると試験で知ったものの、イメージが固まらず未だ創造に至ってなかった。

レンはサラの泉にいる魚を見つめ、悩む。

魚、魚、魚…

どうせなら可愛くて癒しになるような魚

でも強くて頼りになる魚

スマートなのがいいわね

セイランと合体させる？しない？

うううゝ悩むわゝ

「ふう。全然考えがまとまらないわ。魚の上位が水蛇だから、それより小さくて魚っぽいモノなら大丈夫よね。セイランは合体するなら、どんな魚が良い？」

「…そうですね、水蛇より下位なら鱗をもつ魚に限定しなくてもよろしいかと。

甲殻類や貝類、稚魚、幼体、クラゲなど様々な種類が水中に住んでおりますよ。」

「なるほど！…それなら可愛くて強いというのもイケるかも！」

セイランのおかげで

可愛くて強いイメージが湧いたわ！

「さてと、まずは試してみよ。セイラン、一度牙に戻って。」
ふう、イメージ、イメージ

「我に宿る水精の力よ、思いの姿にて現れよ。命を司る炎よ、癒しの水よ、彼の者の翼となりて、飛翔を助けよ。片翼の炎の翼よ、時に刃となれ。片翼の水よ、時に浄化の水を。」

レンの目の前に現れたのは、体長50cm程で赤と青の翼を持ち、宙に浮かぶ透明の生命体。その名は、クリオネ。

「きゃ〜かわい〜！」

イメージ通りだわ、成功ね！」

よし！これで私だけのカワイイ天使が手に！

ふふ、今度自慢してやろ〜。

クリオネを自慢しようと、ギルドホテルに戻ったレン。しかし2人は不在だった。残念に思いつつ、掲示板で依頼を選ぶ。

ある1枚の依頼が目を惹く。

「ふむふむ、求む水の彫刻。美的センスに優れ、長時間水を溶かさない能力を持つ者を募集。ランク指定なし、報酬は応相談。

依頼主は皇家直属芸術祭運営委員会、ね。

センス云々はどうかかわからないけど、やってみよ♪」

だが、受付嬢は難色を示す。

「レンさん、本当の本当に、この依頼にするんですか？
今ならまだ取り止めできますよ。」

「そんなに危ないの、コレ？」

「内容自体は問題ありません。今の時期、カグラ教国は芸術祭に向けてどこも様々な才能を持つ人材を求めていますから。」

ただ、ね、皇家直属というのが問題大有りです！」

「へ？ 普通は皇族が関わってるから信用するものじゃないの？」

「普通であればいいんです、普通ならばね。」

それはカグラ教国の皇族に普通や一般的は通用しないと思って下さい。」

「そうなの？」

「：昔、凄く素敵な男性がいたんです。遅しくて顔も素敵で、頼りになって、同世代の女子は彼に恋したわ。」

ふっ…、それもその時まで。皇家直属機関に関わって、彼は変わってしまった。誰もが彼の変貌を嘆いたわ。同様に多くの素晴らしい人々が、皇族の犠牲者に！ううゝ怨めしいー」

一体どんな変貌だったのか、知りたいけど、この様子じゃ聞けないわね。

「とりあえず、それ受けるから行ってきます！」

首都の右柱と謂われる塔の最上階。そこに、皇家直属芸術祭運営委員会本部があった。

レンは、そこで面接を受けていた。面接官はパリっとしたシャツを着てメガネをかけた女性。170cm程の身長に、ボタンを飛ばすような豊満な乳房、スカートは短く、脚を組みかえる時に色気を感じる。まさに知的で大人の女性といったところだろうか。

「ええと旅人のレンさんね。ギルドランクは紅の水使いね。」

私は面接を担当する、第1皇女シンラよ。ああ、皇女だからって構えなくていいわ。普通にして頂戴。

まずはあなたの力を見せてもらおうわよ。じゃあね……………」水使いの基本から、氷の製造、クリオネまで見せて力をふるうレン。

「：素晴らしい！素晴らしいわ！私達は貴女のような人を探していたの！」

合格よ、合格！

さあ皆でてきなさい。宴よ、宴会よ」

部屋のどこに隠れていたのだろうか。天井から、足元から、四方八方からわらわらと人が集まる。部屋の中央に長机が置かれ、食べ物も山盛りだ。

「委員会の新たな人材に、乾杯！」

気づくと宴会が始まり、委員腕章を填められていた。

「はっ！何この急展開！」

と、とにかく今日は帰らないと！」

「あら、レンさんどうなさったの？」

「今日の所は一旦仲間のもとに戻って報告しないと、ですね。」

「ああ、言い忘れてましたわ。芸術祭が終わるまで、ここに滞在して貰います。」

もちろん、私達の作品は芸術祭まで秘匿しなくてはいけませんから、外出も禁止させていただきますわ。

それにちゃんと私の方から、仲間の方々にお伝えしときますよ。御安心ください。

で、どちらに滞在のどなたかしら？」

「え！そんなこと初耳です！軟禁じゃないですか？」

「大丈夫、皆さん始めはそう仰います。ですが帰る頃には、うつとりして帰るのを嫌がります。ふふ、レンさんも、きっと、ね。では、仰って。」

「……ギルドホテルに滞在中の風精メイと黄ランクのクルトです。」

メイとクルトの名前を聴いて、動きを止めるシンラ。

「メイに、クルトですってえ〜彼奴ら、この国に居やがったのね！」
「……………」

「はっ！私としたことが。ホホホッ」

「…とりあえず、一旦帰して下さい。依頼は受けますから。」

「そうね、メイとクルトを敵に回すのは得策じゃないわね。」

良いわ、でも一筆書かせて頂戴。」

手紙を受け取り、塔を去るレン。

ホテルの部屋で正座させられ、悶絶していたのはレン。鬼の形相をしているのはメイ。皇女の手紙に顔をしかめているのは、クルトだった。

「…受付嬢の忠告をきくことも大事な事だと、身をもって知ったわね？」

さて、この依頼どうするの？断るにしても、皇家直属機関の違約金は法外よ。」

「うっ……………」

「う〜ん、なんならさ依頼受けちゃえば？」

「は？何、軟禁推奨してるの？」

「違うって。報酬は応相談なわけでしょ？だからね、それを逆手にとるんだ。」

そうして纏めた内容は、こうであった。

1つ、依頼中は、ホテルからの通いを認めること

1つ、依頼中はクルトが塔への送り迎えすることを認めること

1つ、今回の依頼を達成したらレンのギルドランクを桃に格上げすること

1つ、依頼達成後にレンを皇家直属機関に引き抜かないこと

以上

上記を了承若しくは破った場合、クルトとメイが全力を費やして貴機関を叩き潰すこと

「こんなもんでどうだろう」

「…まあ、いいんじゃない。」

これならシンラも了承するでしょうね。」

翌日、レンは塔の一室にいた。室内には、様々な女性の氷像が置かれていた。

「さあーとと、レンさんに創った貰いたいのは5日溶けない氷像よ。ある女性像を模して欲しいの。」

で、ね、貴女はこの世で一番美しい女性が誰だか知ってる？」

「この世で、ですか？いえ、知りません。」

「ああ、なんということでしょう！この世で最も美しい女性が私であると知らないなんて！」

「シンラ様が、ですか？」

「そう！私は、まさに美の集大成ともいえる芸術品！

宝玉のように輝く瞳、光りを浴びれば輝く金の髪、豊満な胸に、きめ細やかな肌、煌めく肉体……………」

皇女シンラの語りは10分も続いた。レンは最早ドン引きである。

「それで、私をモデルに最高の作品を創って頂戴！」

「はあ、まあ、わかりました。」

1時間後

「氷の製造は終わったわね。
これから細部を削って。
ええ、髪はそんな感じで……」

3時間後

「ちょっとレンさん？
ここは違ってよ！
もっと慈愛の満ちた笑みをつくって。肌はもっときめ細やかよ！
…ああ、貴女はもっと私自身をよく知るべきね。
一旦作業を中止して、別室に行きましょう？」

その日の夕方
レンの叫び声が塔内をこだましたそうな。

束の間の休息―3―

芸術祭が始まる数時間前、塔の入口にレンはいた。華やかな服装で、身だしなみを整える人々が行き交う中、レンの美しい蒼髪はくすみ、頬は痩せ、目は死んでいた。

「ふふっ、ふふふふ……」

あゝはっはっはっ！ やっと、やっと解放された！ 魔女め、この怨み、忘れぬぞ！ 魔女シンラめ、いつか報復してやる！
ふふふふ……」

そこには純粹な水の巫女の面影なく、水の魔女がいた。不気味な笑いは絶えることなく、宿に向かって塔を去っていった。

そんなレンの後ろ姿をじっと見つめる女性が1人、皇女シンラ。

「ああ、なんて恐ろしいこと！ レンさんがあのようになってしまったなんて。」

ああ、女神さま、私の美しさはなんて罪なんでしょう！ レンさん、怨むなら私じゃなくて、私に美しさを与えた神様ですわ。」

皇女シンラは、とんちんかんなことを考えていた。

レンが街中で不気味な笑いを発している頃、メイは1人図書館の個室で何やら筆を走らせていた。彼女は上司への定期報告書の作成をしていた。

「はあ、なんで私がこんな目に。アイツに合わせて、体つきもキャ

ラも合わせて、ストレス溜まるわ。同僚達は今頃、エステかしら？私もしたいわ。」

そう、風精霊、小人族のメイとは仮の姿。彼女は小人よりも高位的な精霊であった。

今、彼女は本来の姿をしていた。風のエルフと謂われる、風精霊でも数少ない者の1人。見た目も身長も人間と遜色なく、背中に白い翼が生えている。彼女らはかつて、天使と呼ばれ、古代にも姿を見せた古代種。

「あゝ、あんなムチじゃなくて全力で根性叩き直してやりたい！」

ぐっと気持ちを抑え、報告書を書き上げた。そうやってできた報告書には、こんな記述があった。

修行精霊使い…クルトⅡフェザームーンは今年で22才になるにも関わらず、発言・行動全てに於て幼さが抜けない。これは見習い時代から変わらず一切の成長が見られない。幻獣フェザームーンの血に連なる者であり、他種族よりも成長が遅いとはいえ、限りがあると思いたい。

精霊を惹き付ける才能に磨きがかかっているも、精度にムラがあり、今年度も修行完了の許可は出せません。よって評価Dとし、修行を継続するものとする。

なお私、風天使メイⅡサラサは精神的苦痛が著しく、監督官の交代を懇願する。

一方クルトは…

芸術祭当日、普段以上に街中は屋台やオブジェ、様々な色鮮やかなモノで溢れていた。

芸術祭は毎年1回、この首都で行われる。クルトはここ数年は毎年首都に訪れることを楽しみにしていた。カグラ教国は芸術にも秀でており、クルトを特に惹いたのは『美しくて美味しい』美食コンテストであった。

食に関するプロの猛者が国内から、国外からも集まり競う。各々の作品を評価するのは審査員だけでなく、芸術祭に訪れた全ての者だ。よって作品を食べられなかった者は存在しない。もしそのようなことがあれば、減点対象だからだ。

舌の肥えたクルトが求めるのは、芸術祭でしか食べられない新品や珍味、限定品だ。芸術祭では、食材にかかる費用に糸目をつけない。そうでなくては、勝てないからだ。

『美味しいもの、いっぱい。わーい。』

召喚状

華やかな芸術祭の3日間は、あっという間に過ぎた。街中を行き交う人々に笑顔があふれ、今年の芸術祭も成功した様である。

レンはというと、様々な美術に刺激を受け、魔女の微笑みは鳴りを潜めた。だが、魔女の被害に遭ってしまった者は、芸術祭の途中から自宅に引きこもり寝込んでしまった。

事の次第を知ったメイが御詫びに各家々を訪問して回り、症状の重い者には癒しの力を施した。メイの数少ない休息期間の後半は、精神的にも肉体的にも疲労感激しいものだった。

クルトは美食コンテストの作品をあちこちと頬張っているところを、大食いコンテスト主催者に見初められ、ぶつけ本番でコンテストに出場。そして見事優勝し、『首都飲食店街5年フリーパス 旅人ver.』を入手した。お財布の中身と相談して食べれなかった高級店でもタダ飯が食えると、歓喜したクルトであった。

レンは皇女シンラの依頼を達成し、ギルドランクは桃になっていた。3人はカグラ教国をでる手筈を整え始めた。

突然、宿の窓から手の平サイズの妖精が風に乗ってやってきた。妖精は軽やかに跳ね、クルトの肩に止まった。そして妖精の体が淡い緑色を発し、妖精は手紙に姿を変えた。手紙は淡い緑色の封筒で、中央に複雑な紋が押されていた。

「あっちゃー」

「何？その手紙。」

「召喚状よ。」

「召喚状？」

封を切り、手紙を開くクルト。内容を読み、落ち込むと手紙をメ

イに渡す。メイも手紙を読んでは、ため息をつく。

「…ほらみて？」

「何々？」

『仲間と共に城に來たれし。教皇より』 って……、え！？」

「シンラに口止めしわすれたわねー。」

「ああ、教皇に会わないで去る予定だったのに！」

「……一体どういう知り合い？」

それよりも、教皇さまの人柄は一体？」

「あー、んー、シンラとは別の変態化け物よ！」

流石に教皇の召喚状を無下にする訳にもいかず、城に向かう3人。城に入るためには、城が浮かぶ真下に行かなくてはならない。城はミニチュア版のカグラ教国で、城そのものが宙に浮いている。街の最奥にある、『カグラの花園』に向かう。

花園の中央部に平べったい石が鎮座し、その周囲を見張るように兵士が立つ。この石が城への一般的な玄関口、転移石だ。転移石に乗ると上昇し、浮遊城に到着する仕組みだ。クルトは兵士に召喚状を見せ、確認がとれると3人は転移石に乗せられた。兵士が何やら手に持つ装置を操作すると、転移石を底辺に透明な膜が3人を覆い守る。そしてゆっくりと、高層ビル50階分を上昇していった。

始めは空の旅が楽しくウキウキしていたレンは、あまりの高さに振るえていった。

「怖い怖い怖い！ぎゃーもうだめ、落ちる！降ろしてー」

「落ちない落ちない！」

「ああだから子どもだけの乗り合いは御断りなのね…」

魂が抜け落ちたかのようにレンが脱力した頃、やっと浮遊城に到着した。レンの視界に最初に入ったのは、色鮮やかな花たち。ここ

は『サラの花園』。女神サラが唯一愛した人間との間に産んだ神子カグラと、女神サラは姉妹のように似て美しく、仲良かったとされる。その間柄から、城と城下を繋ぐ場所は『サラの花園』と『カグラの花園』とされたのだ。

可愛らしい兵士に案内され、長い廊下を歩く。狐のようなフサフサの耳と尻尾をもち、お餅のようなブリッとした頬をもつ獣人の兵士。城内をキョロキョロしていると、案内の兵士のように可愛らしい耳と尻尾を持ち、子どもの様な身長の方が多く見かけられた。

「ねえ、メイ？目の錯覚かしら？…子どもの様な可愛らしい人ばかり城内にいるように見えるんだけど。」

「あー、とー、それはね…」

メイが説明を始めようとした時、前方から人間の子どもが埃をたてながら突進してくる。子どもはクルトの胸元に飛び込んだ。

「クルトくん、かわゆーい！

もう、食べちゃいたい！きゃっ！」

目の前に現れた子どもは銀髪を肩まで伸ばし、120cm程の身長、クルトに負けない可愛らしさをもった少女だった。

「はあ、いきなり突撃してくるのはいい加減にして下さい。……：：：教皇？」

「は？教皇！？」

「サヤ、教皇なんかじゃないもーん！」

「キモっ！

：レン、騙されちゃだめ！コイツはカワイイモノ大好きのシヨタコンロリコンの変態。在位150年と高齢な癖に、趣味でこんな形をしている化け物教皇よ！」

「城内がカワイイ人材で溢れてるのは教皇の趣味。可愛くない容姿の者で力強い者は、わざわざ子ども時代の形に変化しているんだよ」

「あら、何の事かしら？」

初めまして、水の巫女様。カグラ教国教皇のサヤと申します。よろしくね！」

「はぁ…」

「んもう、この子もか・わ・い・い！」

さぁお茶にしましょ♪」

シャツシャツシャツシャツ

シャツシャツシャツ

シャツシャツ

…コトン。

「美味しい！」

レンは抹茶を飲んでいた。教皇の茶道の腕前は賞賛に値するものだった。

「喜んでいただけは何よりですわ。茶道も代々の教皇が守ってきた真実の一端…。」

「真実とは？」

「ふふ、嬉しくてつい口が滑ってしまいましたわ。ホホホッ。」

「でさ、何の様なわけ？この変態！」

「ボクらも暇じゃないんだよ——」

「ふふふ、貴女達風龍の里に行くのでしょうか？」

「!？」

「良いことを教えて差し上げるわ。風龍の里はリヒト大陸に最も近く、最も遠い場所にある。入口はリヒト大陸のどこかにあるわ。」

「そんなことを教えて、一体何のため？」

「そうね、と言いたい所だけど、ただのお節介よ。あの方が関われない代わりにね。」

：クルト、里長様から伝達よ。『全ての精霊使いは表舞台にでてもよい。クルトよ、水の巫女の護衛を。』とね。」

「なんてこと！」

「：精霊使い？って伝説の？」

「：うん。レン姉、黙っててごめんね。」

「：いいわよ。言えない事情があったんでしょう？後でゆっくり説明してね。」

「まったくどんよりしちゃって。美味しいお菓子が目の前にあるんだから、どんどん食べて！」

お茶会は和やかに終わり、3人は風龍の里を探しにカグラ教国を出発した。

カグラ教国の南の転移門。周囲は草原で、その日も静かな日常が過ぎる、はずであった。

ゴオオオオ

ドン

ガラガラ　ガラガラ

突然激しい爆音が辺りを響かせ、転移門は崩れた。転移門が突然崩れたということは、転移先の門が壊れたことを意味していた。転移門が崩れる瞬間、1人の兵士が転移してきた。

彼の全身は傷だらけで、腕から足から腹から血を垂れ流していた。咄嗟に門番が駆け寄り、治療薬を飲ませようとするも、上手く口に入っていない。彼の命が尽きるのも時間の問題だった。

「首都に伝達を。アースランド、兵器にて転移門攻撃し、不可侵条約破られたり。転移門生存者、残らず。」

兵士はそれだけ言い、絶命した。こうして世界を巻き込む戦いが始まった。

風の章 守人と水の民（前書き）

く編をやめてく章に変更。

この章では時折 R・18 内容を含みます。読み飛ばしても問題ないように投稿する予定です。

風の章 守人と水の民

時は水の里から煙が上がった頃に遡る。

リヒト大陸に最も近く最も遠い大地は、人を阻む霧に覆われていた。霧の結界の綻びを直しながら、端から端を歩き回る1人の青年がいた。淡い緑色の瞳に金の髪、185cmと高身長に整った顔、程よく筋肉がついたハンサムな青年。彼の名はフェイ。風の里の『守人』で、守護の力に長け、次期風の長と謂われる人物である。

この大地は風の里の守護龍の故郷、風龍の里である。本来なら、たとえ風龍の加護を得ているからといって、風の民に門戸が開かれることはない。そこを彼らの守護龍が無理矢理結界を抉じ開け、風の里の民を全員一度に転移させたのであった。緊急事態であったため、件の風龍や風の民の滞在は許可された。だが、結界の修復は彼らが行う義務とされたのだった。

ここで、何故守人が修復作業にあたっているのか。それは、守護龍が今回の大規模転移術で疲弊し、眠りについてしまい、風の民で一番の結界使いである守人が選ばれたのであった。なんて澄んだ空気なんだろう。この大地はリヒト大陸に近いと聞いたが、このように清浄で数多の精霊が溢れる場所があったであろうか。もしや未開発の遺跡大陸なのか。いや、それだと魔物がいない理由にならない。とても不思議だ。

：ふう、あの子は無事であろうか。火の焰にいじられて、いつも私の背に隠れていた水の巫女。レン、君はドジな女性だけど悪運には強いと思うんだが。彼女なら、きっと生き延びているに違いない。

フェイが一息つき、思考に耽っていると、どこからともなく耳が痛い高音が聴こえてきた。

キュイーン キュイーン

閉じたばかりの綻びに亀裂が走る。そして小さな穴があくと同時に、3つの大きな水球が飛び込んだきたのだった。

水球は内部に侵入すると、勢いを失い、動きを止めた。彼が近づくと、水球の中に人がいるのが見てとれた。

なんと、人が中にいるとは！
一体誰なのだろうか。

彼が水球に近づくと、水球が弾け水は蒸発した。中にいた人々は、そのまま大地に横になった。

「うっ……………」

「大丈夫か？私の声がわかるか？」

1人の男が呻き声をあげたため、彼は男に近づく。

「…！？」

なんと、レイ殿ではないか。私だ。風のフェイだ、わかるか？」

「…フェイ、か。ならばここは風の里なんだな。風の里は無事だったんだな。」

「…いや、ここは守護龍様の故郷だ。許可を戴いて滞在しているのだ。」

「そ、う、か。」

「おいっ！しっかりしろ！」

倒れていた男は、水の巫女レンの兄で水の次期長と期待されているレイだった。彼は安全な場所に辿り着き、安堵すると意識を失った。そして彼ら3人が侵入してできたはずの穴は、いつの間にかに塞がっていた。

「さて、流石の私も1人で3人も運べないな。ふう、仕方ない。おいで、愛しい風の君よ。」

彼が呼びかけると、目の前で風が舞った。半透明の羽を4枚背に携えた、美しい女人が現れた。精霊の妖精族は、その者の生まれ持つ素養に応じて、手の平サイズから人間並みに容姿も成長する。彼女はフェイの横に並んでも、遜色ない体に容姿を持っていた。

「お呼びでしたか、御主人さま？」

「ああ。…いつも口煩く言っているが、契約してはいるけど君は私の友人であり、愛しい存在だから、『御主人さま』はやめないか。」

「…今時、そのようなことを精霊に言うのは精霊使だけなのに、御主人さまは希少ね。」

「だからな…」

「まあまあ。それで用件は？まだ夜には早いですよ？」

「ふう…、その3人を居住区に運びたいんだ。浮かせて風で送るのを手伝ってくれないか。」

「はい。頑張ったら、今夜はいっぱい激しくしてくれる？」

「…わかった。」

「んふっ♪夜の帝王もいいけど、普段の騎士もそるわ」

精霊の妖精族は風や水など様々な種が存在し、風の妖精族の大半は大気のエナジーを糧に生きる。しかし、彼女は中でも特殊だった。風の妖精族の王女『アイラ』、彼女は生まれ持つ素養が高く背に羽があるものの人と殆ど変わらないサイズに成長した。精霊としての能力も風天使に準じる高位なものだった。そして大きな力を補うため、契約者から生気を与えられることが必要だった。

彼女は予想だにしていなかった。契約者の意外な一面を知り、翻弄され、恋に落とされてしまうとは。

月光を浴びて ※R-18 (前書き)

直接表現を控え、猥褻にならないよう頑張ったつもりです。
卑猥な場面なので苦手な方は、飛ばして下さい。
苦情・意見あれば、よろしく願います。

月光を浴びて ※R-18

風の民のために設けられた居住区の外れに位置するコテージ。その一室に2人の男女がベッドに横たわっている。月の光が女性に射し込み、女性の裸体があらわになる。

「…キレイだな。」

男の低い声がか女性の耳元で囁く。すると熱いもどかしい女性の吐息が、部屋中に響き渡る。女性は下唇を甘咬みし、声を抑えていた。

「まだ、我慢するのか？ いじらしいな。」

男は女性に覆い被さり、舌で指で愛撫して、一方の手は彼女の秘部をまさぐっていた。秘部から溢れんばかりの粘液が流れ、男の指が秘部を犯す。1本、2本、3本と、男は指を増やし、艶かしい音が室内に充満していく。男の熱く硬い昂りが、女性の腿に当たり、何ともいえない欲情を女性に湧かせた。

男の指の動きは激しさが増し、女性の口は半開きになり、喘ぎ声が段々と増えていく。快感で女性の目は潤み、全身が弛緩し、物欲しげに男に体を寄せる。男は何食わぬ顔でとぼけ、突然指を秘部から引き抜く。女性はそれまで与えられていた快感が急に途絶え、いじらしく思い男に懇願するのだった。

「俺を感じる。」

男は女性とついに交わり、体位を何度も変え、睦言は日が昇るまで続いた。

チュンチュンチュン
ギシギシッ ギシギシッ

鳥が朝を報せる中、室内はムンとした空気に満たされ、1組の男女がベッドを揺らしていた。

浴びる光が、月の光から朝日へ変わっても、彼らの営みは終わらなかった。太陽の光が彼らの顔をあらわにし、窓の外から見れば男女が誰なのかはつきりする。彼らはフェイとアイラの2人である。

能力者の里人の婚姻は、一族の存続のため、他族との交際を掟で禁じられている。次期風の里長候補のフェイは、掟に反してもアイラを愛することを止められなかった。そして、アイラも、恋を断念できなかったのだ。

風の守人フェイと高位精霊のアイラ、2人が人目を気にせず愛の営みを育める時は限られる。故に、睡眠よりも営みに没頭するのであった。

互いに熱い吐息を吐き、フェイの腰が激しく動く。暫くすると、フェイが大きく唸り、アイラの吐息は激しさが増し、魚のように体を反らせ痙攣した。体を繋げたまま、快感の余韻に2人が浸っていると、サワサワと風に乗って知らせが届く。

「…レイ様が目覚めたそうよ。そろそろ行って。」

「離したくない。ずっと繋がっていたい。」

「また、そのうち、ね。」

「『また』がいつになることやら。」

「繋がれなくても、契約者として会うのはできるじゃない。」

「他人の前では、俺たちはただの契約者と精霊だ。関係を知られる素振りは見せられない。目の前にお前がいても、抱きしめられないなんて苦痛だ。拷問だ。」

「…わかりきったことをグダグダ言わないで。私だって辛いの。」

「浮気するなよ。お前は美人だからな、変な男が寄ってくる。」

「あなた一筋よ。愛してる。」

：だから、はやくコレ抜いて。そろそろ、人が来るわよ。」

「チッ、もう1ラウンド楽しもうと思ったのによ。」

「あんだけ出しといて、まだやる気だったわけ？この絶倫！」

「カッカすんなよ。：俺も愛してるよ。」

フェイはアイラに口づけし、体を離す。裸のまま、風呂場に向かった。アイラの裸体に劣らず、フェイの体にも完成された美があった。美しい者を見慣れた精霊のアイラから見ても、見惚れる肉体である。きつとこの世の全ての男子が羨む、扇情的で男らしい体と言っても過言ではない。アイラは暫くほおとした後、体が気に入ったから恋した訳ではないと己自身を叱咤していた。アイラが気持ち落ち着かせた時には、フェイが身支度を整え戻ってきたところだった。

「アイラ、そろそろ戻りな。」

「はい、御主人さま。ごきげんよう。」

アイラの体がずっと空気に溶け、その場を去ると、扉を叩く音が部屋に響いた。フェイは心に充満した甘ったるい空気を胸にしまいこみ、扉に向かっていった。

老龍と若人たち

コテージに囲まれた広場の中央に張られた白いテント。その中で、2人の男女が横になり、先に目覚めた男が1人、横に付き添っていた。

シャー

テントの入口が開かれ、男性が中に入る。

「起きたか、レイ殿。」

「ああ、フェイか。お陰さまで助かった。」

「2人はどうだ？」

「命に別状はないらしい。だが、もう暫し休養が必要なようだ。」

「確か彼らはそなたの従者であったな。一体どういう状況なのだ？」

「：風の里と然程変わりないと思うが。」

「ならば、火と土、アースランドの能力者が？」

「何！？火だけでなく土とアースランドもか？」

「ああ、私達は奴らに襲われ、早めに守護龍様が察知して保護してくれなかったら生きていなかっただろう。では水の里は火の民に襲われたのだな？」

「水の民は散り散りになった。父上と母上が命を犠牲に、水鏡を渡らせて下さった。：なあ、レンの居場所を知らないか？一緒に転移されたはずなのだが。」

「それがな、私達風の民は正式な手順を踏んで、この大地にいるのではない。罰はうけてないが、風龍達のお情けで滞在しているようなものだ。風龍達は友好的ではないから、風を通して充分に情報を集められない。役立てず、すまない。」

肩を落とし項垂れるフェイ。

「そうか。なら、早く体を癒して外に探しにいかなくてはな！フェイも、手伝ってくれるよな。」

「もちろんだ。…だがまずは、情報を得ないとな。風龍の里も無理矢理入った事だし、どうやったらでれるのかわからない。」

「：確か、龍族の里はリヒト大陸のどこかの転移門と繋がっていると聞いたことがあるな。」

「本当か？」

「幼い時に、チラツと耳にただけだから何ともなあ。」

「ふむ。とりあえず里の中を散策して誰か協力者を探そう！」
「そうだな。」

テントを出て、コテージ群から出発する2人。濃い霧の覆う森を突き進んでいった。

森を進めば進むほど霧が濃くなり、まだ午前様だというのに夕方のように辺りは暗くなっていった。

クスクス クスクス
ケラケラ ケラケラ
クスクス クスクス
ケラケラ ケラケラ

不気味な声が四方から聴こえてくるが、生き物の気配はない。声の主は現れない。しかし声は増えていく。

クツクツクツ
クツクツクツ
ゲヘヘッ ゲヘヘッ
クスクス クスクス

ケラケラ ケラケラ
キャハハハッ キャハハハッ

「おい！何なんだここは！」

「：精霊でも、罨の類いではないな。

誰だ！さっさと姿を現せ！」

フエイが霧に向かって怒鳴ると、不気味な声は途端に止み、銅色の髪に褐色の肌をもつ腰を曲げた小柄の老人が姿を現した。

「ふおっふおっふおっ。若い、その程度で腹を立てては、この先辛いぞ。」

しかしまあ、龍の里に人間がいるのは何百年ぶりかのう。」

「人間…？」

「ということは、貴方は龍！」

「え？どうみても人間のじい様じゃ。」

「ふおっふおっ、あんなでかい図体のままでしたら大地は龍だらけじゃぞ。龍とて、ある程度成長すれば人型をとるなぞ、簡単じゃ。」

目の前のヨボヨボの老人が龍だと知り、目が点になるレイ。フエイは多少驚きはしたものの動じなかった。対照的な2人の様子を面白そうに眺める老龍。

「：ところで、そなたら何処に向かっておったのじゃ？人間の滞在を風龍の里で許可されたところと聴いたがの。このまま真っ直ぐ行くと、火龍の里じゃよ。」

「火龍の里！？」

「おや？知らなかったかのう。」

「どういう事か、教えて頂けないだろうか？」

「ふむ。」

ジッと2人の目を見つめる老龍。5分程だろうか、厳しい顔つきで見つめられ、老龍は朗らかに笑みを浮かべた。

「：まあ、老人の戯言じゃ。他の者も咎めないであろう。知りたいかい？」

「「是非！」」

「ふおっふおっふおっ、孫より可愛いのうち。：ウオッホン。さて、そなたらはこの大地が何処にあり、どのような成り立ちか知っておるか？」

「成り立ちは知りませんが、ここはリヒト大陸に最も近く最も遠い大地と聴いてます。」

「ふむ、：人間としては正解じゃ。じゃが、この大地で生活はできないのう。」

「違うのでしょうか？」

「この大地はリヒト大陸の上空に浮かぶ雲と雲の狭間にある。大気の流れに合わせて、空を移動する浮遊大地じゃ。」

「なんと！ではカグラ教国のようなものでしょうか。」

「いや、ちと違うのう。あの国は元々海に浮かぶ島だったのが、遙か昔の事象により空に浮かんだもの。教国は島を動かせないであろう？この大地とは成り立ちが違うのじゃ。」

「成り立ちが違う？」

「そなたら、この大地、この森、何を基にしてできていると思う？」

「えっと、土ですか？」

「：わかりません。」

「ふおっふおっ、不正解じゃ。この大地は歴代の龍王の血肉を基にした龍樹によって成り立っておるのじゃ。」

「「！？」」

「では、この大地は龍で成り立っているのですね？」

「左様じゃ。」

「：ちよつと待て、龍王の血肉をと仰いましたよね？それだけの大事の恩恵を風龍だけが受けるのはおかしい。」

「そうじゃのう、この大地は別に『風龍の里』ではないぞう。この大地は『龍の里』。全ての龍が生まれ育つ、龍の故郷じゃよ。」

「：つまり、『龍の里』の一部である『風龍の里』に、私達は保護されただけということか。」

「正解じゃ！」

「ほわり、驚きの連続で頭いっぱいだよ。」

「老龍殿、貴重な話をありがとう。宜しければ、地上への転移門の場所も教えて欲しいのだが。」

「ほお、転移門のう。」

「私達には時間がない。急いで地上の仲間を助けにいかないとならないのだ。どうか教えて欲しい。」

「じい様、妹が地上にいるんだ。今にも戦地にいるかも知れないんだ！」

頭を下げ、老龍に懇願する2人。

ふむ。例の件のう、龍は過度の介入はするなどの通達じゃったが。
：困っている人間をほつとくのも、後味悪いわい。

「：教えてもいいが、今のままじゃ転移門に行けないがのう。」

「は？」

「転移門は龍樹の麓に2つあるの。風龍の里からは聖龍の里を突き抜けるか、火龍の里と風龍の里を繋ぐ洞窟内の最奥を通る許可を得ないと行けないのじゃ。」

「許可？」

「許可は風龍の許可が必要じゃ。どの風龍がどのような条件で許可するのか、そこまでは知らんの。」

「よし、コテージに戻るぞ！老龍殿、助かる！」

「じい様、ありがとう!」

転移門の場所がわかると、笑顔でその場を去る2人。老龍は少し寂しげに、彼らの後ろ姿を見送った。

「あの若人が、運命の役者か。その刻まで死ななくとも、辛い道よのう。女神サラよ、そなたは今、何を思う?」

老龍は空に目を向けて眩き、森の奥へ消えていった。

風龍の試練

風龍の里の中央を分断するようにある山脈の北側、風の里の民の保護地区の東に、守護龍は寝ていた。緑溢れる丘かと思えば、それは緑色の大きな体躯をもつ守護龍だった。口を開けば人なぞ丸呑みできそうだ。鱗は淡い緑色に輝き、鋭い爪をもつ。

守護龍は故郷の大地からエナジーを受け取り、急激な早さで回復していき、意識を取り戻す。

守護龍の意識が戻ったと聞きつけ、フェイたちが駆けつける。

「守護龍様！ 具合はいかがですか？」

「大丈夫。ご心配おかけしました。」

「いえいえ、守護龍様のおかげで私達がこうして無事なのですから。」

「守護龍様、起きて早々なんですけど、転移門への道を通る許可はどなたからどのような条件で頂けるのでしょうか？」

「おや？ 君たちにこの里の転移門について教えましたっけ？」

「……。」

「…教わりました。」

「君たちに教えるなんて、奇特な龍もいたのですね。」

「ええ。」

「まったく、ここは私が加護する里とは違うのですよ。奇特な御方に感謝なさい。」

滞在を許可されたといって自由を得た訳ではありません。風龍王の定めたルールに則る必要があります。」

「…風龍王。」

「そう。転移門への許可を得るにはまず風龍王からの許可が必要です。そもそも、ただの人間である君たちは、風龍王に面会する資格がありません。」

「そんな！守護龍様から何とか話を通せないのですか？」

「これは君たちが転移門を使うための面会でしょ？私自身は別に許可をわざわざとらなくても転移門に行けますし。大体、龍の里は一番安全です。フェイ、せっかく安全地帯にいるのに、自ら戦地へ行くのですか？」

「：はい。地上で戦う者たちのためにも。」

「妹を助けるためにも！」

2人の強い意志を受け取った守護龍は、肩をすくめて大きな息を吐く。

「意志は堅いようですね。はあ。」

：風龍王への面会許可は『友好の証』を、私以外の風龍から得る必要があります。一般的には緑色の宝玉ですが、形は様々です。子ども風龍でも構いません。

ま、君たちは無理矢理里に入った者だから、印象悪いんでしょうねえ。怪我しないように、頑張つて。どうしようもない時は、私に泣きつきなさい。」

守護龍は言いたいことを言って、眠りに入った。守護龍はもう暫し休む必要があるそうだ。

守護龍との話を終え、レイは拳を握り締め、わなわなと体を震わせていた。

「：なんだ、あれは！」

「あれとは？」

「守護龍様のことだ。いつもあんな方なのか？」

「：あの方はただ、私達に傷ついたり死んで欲しくないのだろう。手助けしたくても立场上、協力できないのかもしれない。」

「と、とにかく、風龍を探すぞ！」

「どうやって？」

「そうだな。山に登る、とか。」

「はあー。」

…仕方ない。おいで、我が風の娘、愛しい友よ。『アイラ』」

レイとフェイの目の前で木の葉が舞い、風妖精アイラが姿を見せる。

「おお！」

「アイラ、すまないね。私達を手伝ってくれるかい？」

「はい、御主人さま。」

「おいおい、誰だよこの美人さん。」

「ああ、レイ殿は初めてだったか？私の契約精霊のアイラだ。アイラ、こちらは水の次期長レイ殿だ。」

「主人がお世話になっております。」

「おおー！いいなあーこんな可愛い精霊！」

「レイ殿も能力が高いから、アイラのような高位精霊と何れは契約できるであろう。」

「…それで、御用は？」

「では、この風龍の里の地形を。できたら風龍が集まる街の場所や、近場で風龍に会えればということない。」

「まちい？」

「レイ殿、先日お会いした老龍殿を思い出せ。恐らく、龍たちは普段人型をとり、街を形成しているはずだ。龍の姿だと地上を支配してしまうと仰っていたのだから、かなりの数の龍がこの大地にいるはずだ。」

「なるほど！」

「流石、御主人さま！仰る通りです。風龍の里を分断する中央山脈の北部が、今いる場所です。山脈沿いに南下すると、街があります。」

「なら、その街に行くぞ!」

「アイラ、案内を頼む。」

「了解。」

2人はアイラの案内のもと、危険に遭遇することなく山脈を沿うようにある森を突き抜ける。森には彩り鮮やかな精霊や幻獣が、ちらほらと見られた。そろそろ木々が少なくなり、森を抜けようかという時、アイラが2人を引き止めた。

「なんだ?」

「御主人さま、そのままでは目立ちます。じっくり目を凝らさないとわからないよう、擬態しましょう。人型精霊に化ければ、多少人間臭くても誤魔化せます。」

「そっか! アイラちゃん、気が利く!」

「なら、私達も妖精族にか?」 「ええ。」

アイラが何やら呟き、2人に粉をまくと彼らの背に半透明の羽が、耳はやや尖った。

「:羽があるって、変な感覚。」

「直に馴染みますよ。」

「さっさと行くぞ。」

3人は、妖精族の団体を装い街に入ってしまった。

街の中は自然溢れているだろうと、レイは期待していた。だが期待は、街に入ってすぐ崩れる。街の大地一面が花畑で緑を感じられるものの、住民は空を闊歩していた。電車が空中を走り、高層ビルが空中に浮かぶ。

風龍は歴史を紡ぐ者。風を通して過去を渡ることもでき、世の歴

史の真実を知る者。故に彼ら風龍は古代栄えた人間の技術を応用し
実用化、風龍仕様にアレンジしていた。そして風龍は基本、悪戯好
きで、面白おかしいことが大好きだ。過去から面白いものを見つけ
ては、街にとりいれていった。

「さあ、飛びますよ。まずは、宿屋へ行きましょう。」

風龍の試練―2―

風妖精アイラを先頭に、空中街を飛び、大きな旅館に辿り着く。空中に浮かぶ純和風の建物、それはとても異様だった。

一行が一息つき、入口の扉を開くと何やら揉めているような怒鳴り声が聴こえてくる。

「ちょっとどういうことよ！この宿に泊まることを楽しみに、遠路遙遙やってきた客を泊めないですって？ふざけてるわ！」

「ですから、こちらの事情は御説明した通りです。問題が解決するまで、申し訳ありませんが、他の宿をご利用下さい。私どもが紹介する宿でしたら、最高の部屋を御用意致します。もちろん当旅館との差額は、私どもが支払いますので…。」

宿の女将と思われる着物の女性と、蝙蝠のような羽を背に持つ女性は何やらフロントで騒いでいる。

「…どうやら泊まれないようですね。どうしましょう？」

「何やら問題があるようだが。」

「うーむ。」

3人が旅館の玄関で立ち往生していると、フロントで騒いでいた女性が鼻息を荒くして横を通り過ぎた。すると、3人の存在に気付いた女将が歩み寄る。

「ようこそ、当旅館へ。」

「…女将よ、今はこちらでは泊まれないのか？」

「ええ、残念ながら。先程の騒ぎを御覧になって？ お恥ずかしい限りです。」

「…もし何でしたら、問題を解決する手伝いをさせていただきませんか？」

「え？」

「そうだな、私達が解決するから泊めていただくというのはどうか？」

「ええと、お客様にそんなことは…。」

「けど、早く解決しないと信用問題ですよね？」

「うう、はい。でも…」

「なんだ？」

「この街の者の誰もが匙を投げた問題なのです。ですから、お客様の技量でも無理ではないかと。」

「そんなもの、やってみないとわかりませんわ。」

「そうだな、私達ならできるかもしれないしな。」

「…では、お願いできますか？」

3人は街外れにある屋敷の前にいた。ゴーストハウスとも呼ばれ、生あるものは一切寄りつかない、禍々しいオーラを発する屋敷。屋敷の中には人を陥れる罠が張り巡らされ、隠し扉や隠し部屋が溢れる、かつての忍者屋敷や日本の城を模されたものだった。

旅館の問題は、旅館の売りの動力源が盗まれたことから始まる。元々治安もよく、街の警備も統制とれたものであったため、犯人はすぐ捕まった。だが問題は、すぐには解決しなかった。犯人が盗んだモノを隠した場所、そこが悪かった。

人が入る度に内部構造、罠の位置が変化する屋敷。犯人が隠した部屋は変化する。そして、侵入者を阻む屋敷。

幾人もの龍が、精霊が、屋敷に侵入し、罨に嵌まって返される。奥に行けた者も僅かにいたが、目的のモノを見つけられず戻ってきた。一度奥にいったからと安心して、二度目は罨に嵌まり、奥には行けない。

旅館は『どんな疲れも病も吹き飛ばし、美肌を保つ癒し』が売りだった。旅館の癒しを求めて、半永久を生きることと疲弊する心身を休めに幻獣や龍、精霊たちが度々訪れた。その癒しは、宿主の先祖である風龍の心臓石を動力源としていた。

動力源がなければ、売りにできるものを持たない。女将は途方に暮れていた。そこにフェイたちが、手を差し伸べたのだ。

「で、これが問題の屋敷か。」「むやみやたらと、侵入するのは得策ではないですね。」

「外側から圧力をかけるとかは？」

「それでは屋敷が壊れてしまうだろう。」

「うーむ。」

あーだこーだ、屋敷の前で作戦会議をする3人。

「そうだ！人形だよ人形！」

「人形？」

「罨って生物に反応するんじゃないかな？だから無機物を投入して、そいつに僕らの意識を投影するんだ。」

「…水人形を作れるのか？」

「もちろんさ！」

「…レイ様って馬鹿じゃなかったのね。」

レイの作戦が採用され、レイが作った水人形に3人の意識が投影される。安全のため、肉体は不可視と不可侵の結界で守られた。

「じゃあ行くよー。」

水人形を己の体のように操作し、屋敷に入っていくのであった。

屋敷の玄関では拍子抜けするほど、何もなかった。屋敷に来るまでの情報収集にて、屋敷に入った途端に汚水槽に落とされた者・鉄のタライが頭に落ちた者・首だけ龍が肩に乗った者などと、様々な話を聴いていたのだから。

レイの推測は当たっていたのかと、安心して彼ら水人形は突き進んだ。だが、それは屋敷の思う壺。玄関で安心させて油断させていたに過ぎない。彼らがそのことに気づく頃には、四方八方から罠に襲われていた。

壁だと思って寄っ掛かったら、ぐるんと一回り、ようこそ罠の部屋へ。ひたすら逃げ回り、人形の水がすり減ってもうだめと、諦めかけたら何故か給水場所にでる。これも罠かと疑うも、考えてる余裕もなく人形の体を修復する。修復が終われば、待ってましたと言わんばかりに、廊下を転がる巨大な雪ダルマ。

「絶対遊ばれてるわ！」

「しゃべる余裕なし！」

「あわわわわ」

屋敷はまるで生きているかのように変化し、侵入者の様子を間近で見ているかのようにだった。

昼時に屋敷に入ったが、辺りは疾うに日が暮れていた。3人はまだ屋敷の中にいた。歴代で最高滞在時間を記録していた。彼らは罠から逃げまとい、時には休憩部屋を与えられ、時には地獄を駆け走

るような思いをし、精神をすり減らせていた。

「…行き止まりかしら？」

目の前は壁があるだけ、罨も発生しない。不思議に思い、壁を押すと小さな部屋に繋がる。

室内は明るく、床は畳で茶室のようだ。3人の水人形が室内に入ると入口が閉まり、押しても戻らなかった。

「くそっ！」

「最後の最後で閉じ込められた？」

「あ、あれ！」

レイが指差す方向には、人がいた。いや、人ではない。映像のよ
うなモノが浮かんでいた。

「…幽霊？」

「思念体かしら？」

「どっちにしろ生きてない！」

映像は徐々により鮮明になり、1人の像をつくる。

「ようこそ、試練の間へ。」

「あれ？幻覚かな？女将さんに見えるんだけど。」

「私もよ。」

「どういうことだ？」

目の前に映し出されたのは、旅館の女将だった。満面の笑顔が眩しい。

「ふふ、風の守人フェイ殿に水の貴公子レイ殿、ようこそ。この部屋に辿り着けたことで、『友好の証』を受け取るための試練を受ける資格を得ました。おめでとうございます。」

「はぁ？」

「正体バレてるし…」

「アイラさん、ツメが甘いわ。これは街興しの一大イベントなのよ！匂いに詳しい者にかかれば、簡単よ。」

「街興し？」

「イベント？」

「あらいけない！私の役目を果たさないと。ああそうそう、四方の壁についてる龍の目を通して、現在も街中に中継されてますので。」

「はぁ？」

「中継？」

女将からの説明を要約すると、盗みの話云々は嘘であった。フェイ達が『友好の証』を求めて旅立った後、風の里の守護龍がその旨風龍の里全域に報せを出したのだ。そこに食いついた街が、街ぐるみで『友好の証』を賞品に試練の場を設けたのだ。永い時を生きた龍達は変わらない風景に飽き飽きし、観光客も少なく刺激が少なかった。そんな時舞い込んできた話を逃す訳もなかった。フェイたちを街に留め試練の場に誘導する。そして試練の様子を中継し、大事な場面では賭けをして龍達は盛り上がった。

「私達は風龍のおもちゃか？」

「…邪険にされてないだけマシかと。」

「う、もっとカッコイイ水人形にしとけば良かった」

風龍の試練―3―

ゴーストハウスの最奥の茶室、否、試練の間にフェイたちはいた。3人は意識を肉体に戻し、かつ妖精の擬態は解き、本来の姿をしていた。彼らの視線は目の前のテレビに釘付けだった。

「こちら試練の間、中継の楓です。それでは挑戦者の紹介をしましょう！」

カメラは3人を捉え、テレビに彼らの顔がアップで映る。

「右手にいる美男子こそ風の里の守人『フェイ』殿、その隣が契約精霊の風妖精の王女アイラ、もうう居るだけで絵になる2人です。そして最後の役者は、水の里の貴公子『レイ』殿です。皆様見ましたか、あの水人形！風龍の笑いのツボを心得ているようかの傑作、奥が深いです。」

中継をしているのは、旅館の女将役だった楓という若い風龍だ。

「さて、画面を見ている視聴者の皆さん、準備はよろしいですか？挑戦者の皆さんも、心の準備はよろしいですか？」

心の準備もなにも、風龍たちの暴走に彼らは啞然とするしかなかった。彼らがぼけっとしている間に、トントン拍子でルール説明がなされ、風龍たちは盛り上がっていく。屋敷の外では花火があげられ、街中お祭り騒ぎだった。

「一体どの挑戦者が、一番ポイントを稼げるのか！？友好の証を賭けて、レディーゴオォー！」

ブオオオオ―

3人の頭上には緑色のゲージが浮かび、視聴者の評価ポイントが溜まればゲージが満たされていくという。視聴者とは街の住民や観光客を指す。視聴者には配布されている装置で、評価ポイントの操作と、最優秀者が誰か賭けることができた。

視聴者にもお得、というのがミソであった。なんせ挑戦者はたったの3人。掛金の制限は無く、3分1の確率で配当が手に入るとあれば、住民でなくても食いついた。

開始の合図と共に楓の映像体は姿を消し、ヒラリと一枚の紙が天井から落ちてくる。

「何々？ 迫りゆく壁に潰される前に、試練の間から脱出せよ？」

ピギギギィゝ

嫌な音をたてているのは、後方の壁。部屋には窓も扉もない。

「ど、どうする？」

「落ち着け！…迫ってくるのは壁だけだ。つまりは天井か床に脱出口があるはずだ。」

「探しましょう！」

ピギギギィ ピギギギィ

ピギギギィ ピギギギィ

「ないないないない！」

「あわわわわわ！」

「…ここだけ怪しい風の流れが。ふんぬっ！はっ！」

ドゴオン

フェイがある畳を無理矢理どかすと、どこかに繋がる穴を見つける。

「ありましたね！」

「やったあー！」

「もう壁がきている。急いで飛び込むぞ！」

あと数秒で足場がなくなるほど、壁は迫ってきていた。危険を感じたフェイはレイの首を掴み、穴に飛び込んだ。

ヒュー

スゴン

バコン

ゴロン

ゴロゴロ パタン

一体何があったのか、中継の楓の解説を聴いてみよう。

「ファーストステージを冷静に突破した挑戦者たち！突破に安心したのでしょうか？セカンドステージへの道を、何の対策ないまま通り抜けるうー！」

長いトンネルを急下降していきます。ああ、あまりに長い下降に、レイ殿が風圧でフェイ殿の手から外れたあ！……あ、落下して着地に失敗しましたね。その上、運の悪い事にレイ殿の上にフェイ殿、アイラの順に落ちました。あああー転がる転がるうー！…倒れましたね。」

『暫しお待ちください。』とテロップが流れ、一旦街のCMが流された。

フェイたち3人は満身創痍になりながらも、第2、第3とステージを突破していった。

良くも悪くも、彼らは風龍の関心を惹き、緑のゲージは満たされていった。賭けも最初は誰が一番かだったのが、いつの間にか『レイは最後まで生き残るか』に変わり、かなり盛り上がっていたとは本人の知らぬ所だ。

3人は地上にいた。屋敷の入口に並んで椅子に座っていた。彼らは頭に帽子を被り、机に手をつけている。机には何やらボタンがあり、押すと帽子の頭頂部が光る仕組みになっていた。

「とうとうきました、最終ステージいゝ！最終ステージは世界の歴史クイズうゝ！
風に属する者、歴史を答えられずに歴史を紡ぐか？挑戦者よ、応えてみせよ。始めえー」

「第1問、女神サラが唯一愛したとされる人間の名前は？」
「おおっと、序盤から難問が！」

ピコーン

「更木たくや。」

「正解！フェイ殿、1ポイント先取！」

「知らないよ、そんなの…」

「流石、御主人さま！」

「第2問、龍の里には全ての龍種が存在する。風龍・火龍・水龍・土龍・聖龍、残りは何だ？」

ピコーン

「黒龍！」

ブー オトトイキヤガレ

「ええー自信あったのに！」

ピコーン

「闇龍。」

「正解！フェイ殿、一步リード。アイラ殿、主人を立てて答えない場合はペナルティが発生しますので、真剣に！」

「そんなあゝ」

目まぐるしく展開した試練という名の祭は、フェイが総合1位という結果になった。

レイは最後まで生き残ったため、『途中脱落』の掛金の何割かがレイの懐を暖めた。本人はその事実を知らず、試練の賞金だと思っている。最終ステージを終えて迎えてくれた住民たちが、満面の笑顔の者と泣き崩れている者という、さぞ不思議に思う光景であったことだろう。

何がともあれ、3人は住民の関心を大きく惹き、楽しませたとして『友好の証』としてエメラルドの石を手に入れたのであった。

風龍の試練－4－

「「只今戻りました！」」

元氣澁刺な声が辺りに響く。『友好の証』を手にしたフェイ達は、守護龍の元へ戻った。守護龍は欠伸をして、だからなんだといった視線を送ってくる。

「ああ、意外と早かったですね。風龍の街は楽しかったでしょう？オモチャにされて転がされて、Mに目覚めましたか？」

「「目覚めません！」」

「そうですかー、つまらないですねえ。で？」

「で？…じゃありません。風龍王に面会を申し込みたいのですが。」

「そういえば、そうですねえ。ああ、メンドクサイ。勝手にしなさい。」

「あの、だから、そのっ！」

「ん？」

「いい加減、私達をおちよくらないで、さっさとして下さい！」

「せっかちですねー。はいはい、わかりましたよ。わかりました。」

風よ、彼の者たちを風龍王の元へ。友好の証よ、扉を開き、送れー
飛んでけー吹っ飛べー」

「な、なんてやる気のない声！酷いわ！」

「うわっ、暴風ううう」

「……………はあ。」

守護龍は欠伸を噛みしめ、最後まで面倒くさがりながらフェイ達を送り出した。守護龍の周りに台風のような暴風が吹き荒れ、3人を空の彼方へ吹き飛ばしていった。

風龍の里の上空を移動する竜巻。貝殻のように、風が渦巻く。渦

巻きの内側に、風龍王の王宮があった。何者も撥ね飛ばす竜巻が、部外者を阻む。たとえ龍の里の民であろうと、風龍の『友好の証』を持たぬ者は一步も立ち入ることができない。『友好の証』を無理矢理奪えば、証は彼方へ散る。『友好の証』を現在持つヒトは限られ、風龍達は大変注目していた。

ゴオオオオオオ

「北西より高速飛行物体接近！」

「飛行体の進路、友好の扉！」

「開門申請なし！飛行体とのコンタクト不可！」

「生体反応3体あり。龍属性なし。精霊属性なし。参内記録に該当なし！」

「飛行体着陸後、速やかに対象を捕獲せよ！」

飛行体、それは守護龍により高速で飛ばされたフェイたちのことである。

グオオオオオオ

「飛行体、着陸の気配なし！速度変化なし！」

「このままでは、王の間に直撃！」

「何！？」

「王を守れ！全員フォーメーションだ！」

「緊急放送！緊急放送！フォーメーションX、フォーメーションX」

各々が武装をし、決められた配置につき、飛行体の突撃に備えた。無論、そのような事態に陥っているなど、フェイたち飛行体は知らない。高速で飛ばされ、物事を考える余裕はなかった。

グオオオオオオ―
ドオオオオオン！

激しい音を立てて、飛行体は王の間に着いた。砂埃が舞い、モクモクと王宮の者たちの視界を塞いだ。暫し待つと、飛行体の姿がハッキリしてきた。それが確認できると同時に、王の側近たちが生命体へ刃を当てる。

「何奴！」

「大人しくすれば、命だけは助けてやろう。」

刃を首元に当てられたのは、フェイ・レイ・アイラの3人だった。彼らは、何故刃が当てられているのかわからず、呆然としていた。

「…ん？風妖精？」

「こっちは、人間？」

どんな侵入者かと構えていた側近たちは、意外な者たちだと知り困惑していた。すると側近たちの後方から、銀の髪を腰まで伸ばした、女神のような女性が現れる。

「王！何者か、まだ明らかではありません。むやみに近づかないで下さい！危険です。」

「よい。何者かは明らかだ。もう、風の守人よ。」

「「！？」」

「…初めてお目にかかります。風龍リンフウカ【鈴風華】の加護する風の里の守人フェイと申します。」

「ふふ、王の気配に吞まれないとは、中々やるの。鈴風の教育の賜物か、はたまた生まれつきの素養かの。好みの男子だの！」

「王！戯れは、いけません！」

「何を言う。妾は風龍を統べる王ぞ！」

：人間だが、いい男ではないか。顔、肉体、素養、態度、能力、どれをとっても妾と並んでも遜色ないのう。そう思わなんだ？フェイよ、妾と交わり、時を共に過ごさぬか？」

「：私には、勿体無いと思われます。側近の方にすら敵わないですよ、私は。」

「まあ、良い。暫し王宮に滞在されよ。さすれば、考えも変わるであらうよ。」

ふふ、そなたらの望みを叶えるには妾の許可が必要だしのう…」
「……………」

風龍王が現れると、その空間は強い圧迫感で支配された。レイやアイラは、王の気配に吞まれ身動きできなかった。だがフェイは平然と口上を述べ、風龍王の魅了もかわしてみせた。

風龍王が去ると空気は和らぎ、レイとアイラはやっと息を吐くことができたのだった。フェイは、風龍王が最後に残した言葉に黙るしかなかった。アイラの愛を裏切る訳にいなかった。

王宮から滞在場所として与えられた部屋は、フェイが王の部屋に最も近く、アイラが最も遠かった。滞在当初は、王宮内を案内され、数日経つと彼らは暇を持て余していた。フェイが王に応えるか悩んでいた頃、アイラもまた悩んでいた。

風龍王に謁見した初日、王がアイラの横を通り過ぎる時、王は精霊言語であることを囁き去ったのだった。

「そなたには勿体無い男よ。妾に明け渡すがよい。風妖精の姫には、相応しい男を紹介してやろう。妾の御下がりで良ければだがの。」

：ふふ、見ていたのは月の光だけでなくてよ。はしたない喘ぎ声が耳に入っの、どんな女かと思えばそなただ。妾なら、もっと愛ら

しく淫靡にフェイを快楽に誘うぞ。アッハッハッ」

風龍王の言葉が、アイラの頭の中で何度も反芻される。圧倒的な力を持つ相手に、言い返すこともできず、悔しくて唇を噛んだ。

「何よ何よ何よ！悔しい悔しい悔しい！

ああ、フェイとの愛を切らないといけないの？それしか方法はないの？女神サラよ、どうして精霊は里人と愛を誓ってはいけないの？

…ねえ、誰か教えて？

…ねえ、フェイ、私を愛して？」

苦悶の日々が過ぎるだけで、答えがでることはなかった。そして、回答を出す謁見の機会が刻々と迫ってきていた。

風龍の試練－5－

※R－18（前書き）

またR－18です。卑猥すぎるとか、批評あればメッセージ下さい。

貴賓室の一室でアイラが悩み苦しんでいた頃、フェイも苦悩の最中にいた。

彼は連日、風龍王の歓待を受けていた。時にはお茶会、時には庭園散策、時には風龍王の料理がふるまわれた。風龍王はとても刺激的な服装で、フェイをもてなした。風龍王の豊満な胸は強調され、スリットの入った装いからスラッとした美脚が見える。特に見たいと思わなくても、つい下着が見えそうでドキドキしていた。フェイは我慢強いが人一倍性欲が強く、風龍王の誘惑に欲求を解放したくてたまらなかった。だかフェイは風龍王の誘惑には、決して落とされなかった。

ふむ、もう少しで落とせると思ったのにのう。

妾の魅了に落ちんとは！

手強いが、その分燃えるの。

はよう、妾の手に！

「フェイよ、どうだ？この結界は、こうでな…」

この日、風龍王はフェイに結界の実技指導をしていた。風龍王が張った結界の繋ぎ目を、風龍王がフェイの手をとり、一緒になぞる。風龍王はフェイの前に回り込み手を取り、前方の結界を向き、体を後方のフェイに押し付けた。プリッとしたヒップが、フェイの秘部に突き出された。

「ここが、そなたの張る結界との大きな違いだ。わかるか？でな…」

体勢のことをとやかく言う間を与えず、風龍王は説明を続ける。その間にも、風龍王はフェイの秘部にヒップを擦り付け誘惑した。次第にフェイは風龍王の説明に集中できず、彼の秘部に熱が集まり始めた。

くっ、この体勢は辛い！

はやくこの手を離せ！

もう少しだ。もう少し我慢するんだ！

小癪な女に負けるな、俺！

「ええ、流石は風龍王ですね。大変ためになります。

：そろそろ執務の御時間では？側近の方々に叱られる前に、今日はこれで終了しませんか？」

「せっかく熱くなってきた所だったのにう。ここからが一番熱くなるどころだぞ。

：生徒が優秀だと、熱く語ってしまうの。なんだか、体が火照ったわ。」

フェイが指導の終了を切り出すと、風龍王はフェイの方へ向き直った。服からはみ出た胸をフェイの胸元に押し付け、頬は紅く彩り、目は熱で潤んでいた。ウルウルとした瞳で、フェイを見上げ、体が火照るとぼやきながら手はフェイの熱く昂った秘部を服の上からなぞっていた。

「ふ、風龍王？」

咄嗟にかわせなかったフェイの隙を突いて、風龍王は空いていた手でフェイの手を掴み己の秘部に導いた。

「ふふ、フェイのせいでこんなに濡れてしまったぞ？どういたす？」

風龍王は下着を履いていなかった。風龍王に導かれた指に、アイラと違うしっとりしたモノが絡みついた。風龍王とフェイしか存在しない狭い個室に、女体の芳しい薫りが充満した。

「何のことでしょう？」

フェイの対応は至って冷静だった。隙を突かれて風龍王の秘部に触れたが、すぐに手を離し、触れていた体を離れた。そして無表情で、風龍王に挨拶をするのだった。

「もう時間です。先に失礼します。では。」

ふむ、大抵の男はここですぐ掻き回すのにのう。なんと強い精神だのう。

人間にしておくのが、惜しいの。

部屋をでたフェイは、与えられた自室に戻らなかった。彼が向かったのは、最も遠い貴賓室。そう、アイラがいる部屋である。彼は無表情で、廊下を突き進んだ。圧されるような気迫に、フェイに声をかける強者はいなかった。

ゴンゴン

「はーい。……きゃっ！」

扉が開き、アイラの姿が見えると人目を気にせず抱きついた。

「ちよっ、ちよっと御主人さまあ？何なんですか？入口じゃなんですので、どうぞお部屋……」

アイラが言い終わる前にフェイは寝室へ向かった。何も言わず、アイラを引っ張りベッドに押し倒す。ギュッと抱き締めたまま、放そうとしない。

「…御主人さま？」

「…アイラ、暫くこのままで。」

「…何かあったのですか？」

「……………」

「風龍王さま？」

「…ただ誘惑されてるだけだ。手は出してない。」

「…でも、コレ、堅いです。」 「俺は何もしてない。」

「…でも負けそうだった？」

「……………」

「…沈黙は肯定ですか？」

「……………」

「…私、信じててもいいんですか？」

「だまれ。」

無理矢理アイラの唇を奪うフェイ。アイラは続きの言葉を発することができなかった。与えられたのは、吐息を漏らせるほんの一瞬、一瞬だけだった。

「もう我慢できない。」

「ちよっ…」

「なんで嫌がる？」

「…ここは王宮ですよ！」

「…ほんの少しでいい。手か口で俺を慰めてくれ。」

「そんな…」

「頼む。」

「…ふ、風龍王さまに慰めて貰えばいいじゃないですか！そしたら、地上へもすぐ行けるし全て結果よ…」

「俺を信じるんじゃないかったのかよ！ざけんなよ！」

アイラの発言に憤怒したフェイは、彼女の言葉を遮った。己の秘部を無理矢理アイラの口に差し込み、欲望を解放した。

ベッドに横たわるのは、アイラ。着衣はしているが、所々乱れていた。最後の一線は越えなかったが、無理矢理弄ばれ、アイラは心が痛かった。目は涙で溢れていた。フェイは既に部屋にいない。

あんなこと言うつもり、なかったのに。

どうしてこんなことに？

私はただ、彼を愛しているだけなのに。彼の未来のために、私は引くべき？

でも私のいない未来は、自分の幸せではないと、彼はいつも言っていた。

どうしたら、どうしたらいいの？

一方フェイは暴走してしまった自身を叱咤し、酷く落ち込んでいた。

あんな、愛のない欲望を満たすだけの行為はしてはいけなかった。
傷つけない愛しいやつなのに、どうして。

俺はどうしたらいい？

アイラ、愛しているのはお前だけ。

お前だけを手にしたいのに。

俺は、どうする？

答えは出ぬまま、悶々とした夜は更けていった。到頭、明日が答えを出す謁見の日である。

風龍の試練－6－

再び王の間に集まった一同。王の間にいるのは、風龍王と側近たち、フェイたち3人だ。風龍王は相変わらず、男を刺激する服装で目をひいた。

「さて、フェイよ。先日の答えを。」

「風龍王さま、私は貴女様には相応しくありません。ですから…」
「相応しいかは、妾が決めること。滞在中、そなたは良き働きを見せてくれた。妾には、そなたこそが相応しいと判断したのだが？」

「…それでもです。私はまだまだ若輩者ですから。」

「ふむ、フェイはこう申しておる。では、そなたの意見は？」

風龍王が後ろを振り向くと、暗幕から姿をみせたのは、風の里長だった。

「「長さま!?!」」

「…風龍王さま、お招きありがとうございます。」

私は風の里長として、風龍王さまの望みに叶うよう努めるべきと思います。」

「だそうだ、フェイよ。」

「フェイには特にこれといった婚約者はありません。歴代の守人中でも能力人格共に優れており、伴侶に相応しい者がいないと悩んでいた所です。」

「ほう、婚約者はおらんのだな？」

し、白々しい！

私達の禁忌の關係を知ってるくせに！
里長さまの目の前で、私達の關係を言えないこともわかってるくせ

に！

これじゃ、フェイも風龍王さまに応えるしかないじゃないの！

王の間に風の里長が現れ、フェイが風龍王の伴侶になることが正しい選択、という空気になる。アイラは覆せない現実、絶望感を味わった。しかし、フェイは毅然とした態度で、風龍王に答えたのだった。

「…風龍王さま、里長さま。私は、風龍王さまの伴侶になることはできません。何故なら、愛する女性がいるからです。」

「初耳だのう、里長殿？」

「ええ。しかし風龍王さまより相応しい相手とは思えません。」

「里長さま！」

私は、風龍王さまに劣ろうとも、愛する女性はただ1人です！それは死する時まで、永久に変わることはありません！」

「里長よ、相手の名前を言わない男だ。フェイの虚言かものう？賢い男だ、妾の手から逃れようとは、いい度胸のう。」

「…我が息子よ、正直に真実を言うが良い。真に虚言であるなら、罰は私が受けよう。」

ああ、フェイは応えなかった！

私達の愛は永遠なのね！

信じていいのね。

絶壁的な状況で、自分を曲げないフェイの姿にアイラは心を奮わせた。

「……………」

「答えぬのか？なら虚言であったと認める…」

「私です！」

話に割って入ったのは、アイラである。彼女はもう風龍王の気迫に負けなかった。

「私は、私達は禁忌であると知りながら、愛を育みました。しかし、それを無にかえすことはできません！」

「アイラ…」

「里長さま、風龍王さま。私とフェイの愛は永遠に不滅です。たとえ互いが離れようとも、我が身が朽ち果てようとも、切り離すことはできません！」

予想外の展開に、ただ呆然とし言葉を発せない里長。

「ふむ、で、フェイよ。アイラが伴侶であると？」

「…はい。私の伴侶は、アイラ、ただ1人だけ。永遠に。ですから、風龍王さまのお気持ちに応えることはできません。申し訳ありません。」

風龍王は押し黙り、誰も何も発せない。沈黙が暫く続く。だが、それは長く続かない。堪えきれず噴出するかのような笑い声が、突然室内にこだました。

「ふふふ、アハハッハッハ…」

「「ふ、風龍王さま？」」

「良い、良い。試練は合格じゃ！」

「「「は？」」」

「フェイとアイラの覚悟と精神の強さを試されたのですよ。

ね、風龍王？」

「鈴風！」

室内に突然銀髪美女が現れた。顔は風龍王に瓜二つ、体つきは、

逆に残念な女性だ。

「―「鈴風？って、まさか？」―」

「ああ、人型久々だから肩こるわ」

「この緩い発言は、守護龍さま！」

「そうよ、風龍王の従姉であり、風の里の守護龍【鈴風華】ちゃんです！」

「自分にちゃんづけ…、イタイわ。」

「ちよつとちよつと、守護龍になんてこと言うのよ。」

「…鈴風よ、妾もフェイらと同意見じゃ。」

「…あら、私が貴女を子守していた頃の恥ずかしい話とか、貴女の恋の失敗談、初めてHした後の初々しい報告とか、映像媒体に残してるの公開しようかしら？」

ねえ、側近の方々、イイ値で買い取らない？これさえあれば、サボりがちな風龍王の執務も円滑に！風龍王の手綱は、簡単掌握よ」
「り、鈴風！何をしておる！そんなものは、妾が買い取る！
ま、まて逃げるな」

側近に押し売りを始めた鈴風華を捕まえんと、憤怒して風龍王は王の間を去っていった。

王の間に残ったのは、里長とフェイたちだけだった。

「息子よ、先程の誓いに偽りはないな？」

「はい。」

「風妖精アイラ姫よ、先程の誓いに偽りはないな？」

「はい。」

「…：風の守人フェイよ、風妖精アイラとの永遠の愛の誓い忘れることなかれ。風の里長と水の民レイを証人に、この誓いを承認する。」

「「里長さま？」」

「何故？禁忌なのでしょう？」

「フェイよ、我らは風の民。風は真実を紡ぐ者。里長だけが知る口伝の一部をそなたに教えよう。」

「え？」

「フェイとアイラの関係が、風龍に認められたのだ。そなたらに關係ある事項を教えても、問題なからう。」

「…はあ。」

「昔々……………」

遙か昔、精霊たちが人間に加護を与えた。加護者は、人間の血と契約し、契約者の血族は里を作った。里は大きく育ち、世界に4つできる。4つの里は、交流を深め協力体制を造り上げた。その最高機関が長老会。引退した里長で構成された。長老たちの関係は円滑で、様々な問題を解決しては、掟をつくり人々を導いていた。しかし、民は知らない。長老会に名誉顧問が存在したことを。今も残る婚姻の禁忌の掟も、顧問の一声で生まれたものだというこれも。

「「「名誉顧問？」」」

「謎のベールに包まれた存在。どの里にも属さないにも関わらず、長老たちが束になっても敵わない存在で、何代も長老が入れ替わっても姿形は全く変わらなかったとされる。

200年前に彼が長老会により円滑に流れていた里の関係を、長老会の存在を消滅させることで崩し、現在に至る。故に歴史を紡ぐ風の里長以外、各里に染み付いた掟の始まりや根拠を知る者はいないのだ。」

「つーまーりー、禁忌は禁忌でない？」

「長老会の立ち上げにも、その顧問が関わっていたとの話だ。ならば、長老会が存在したことも、婚姻の掟をつくったことも、何かしらの意図があつてのことだろう。」

「どういう意図があったのかはわからないが、私達はその顧問とやらに振り回されていた訳だな。だが、私達の愛は不滅だな。」
「一件落着？」

レイの言うように、ひとまず風龍の試練は終わった。地上への道が開かれた。フェイはアイラを手離すことのない結果に安堵していた。アイラもそうであったが、それよりも里長の話に胸中穏やかではなかった。

もしかして、名誉顧問って、あの方かしら？
もしそうなら、フェイたちには明かせないわ。

時代が変わっても、容姿が変わらない。かつ、どの里にも属さない。そして圧倒的な力。

それは、あの方だわ。

人であって、人あらざる者。女神に狂わされた哀しい人。

全ての精霊が愛しく思う人。

ああ、つまり婚姻の掟は、その意図は、あの方の僅かな抵抗だったのね。

私も、運命の歯車の一部か…。

「アイラ？どうした？疲れたか？」

「大丈夫よ。貴方の愛の誓いで元気いっぱいよ！」

「そうか、じゃあ今夜は寝かせないぜ！」

「もう、ス・ケ・ベ！」

忘れられた洞窟

風龍王の許可を得たフェイら3人は、風龍王より授けられた美しい黒真珠の指輪から発せられる光の導きを追って歩いていた。彼らが歩き進めるのは、龍たちに忘れられた暗い洞窟。地上への転移陣が洞窟の奥にあるという。本来なら転移陣など、龍族には必要ない。成人した龍なら転移術を使えるからだ。この洞窟は龍の里を訪れる人間のためだけにつくられた場所。許可された人間は少ない、故に永久に近い時を生きる龍に忘れられ手入れもされない洞窟と化したのだった。

この洞窟は龍の里にある。龍の加護に満ち、魔に属する者のいない大地であるはずだが、何故か洞窟は魑魅魍魎で溢れていた。

「ね、ねえ何でこんなに魔物がいるの〜？」

「はっ、ふっ、知るかっ！」

「私も知りません！」

奥に進めば進むほど、魔物は強く、息を漏らしながら彼らは魔物を薙ぎ倒していった。

「ふう〜、やっといなくなったね！」

「俺様のおかげだな、感謝しろ。」

「フェイったら、カッコイイ！」

「…なんか違う、これ違う〜。フェイの本性がこんなだったなんて！寡黙な騎士はどこいった？」

魔物の大群を倒し、一息つく。風龍王の前でアイラへの愛を誓ってから、フェイは猫をかぶるのをやめた。以前は仏のように見えたフェイの微笑も、レイには悪魔の微笑に見えた。

「「!？」」」

「指輪の光が強まった!」

「こっちだ!」

指輪の光が強く示す先に進むと、より光の輝きが増した。

「やっと終点?」

「:長かったな」

「早く休みたいです。」

もうすぐ転移陣に着くと思ひ馳せた時、道の先に1人の男がいた。スラッとした高い背丈で頭から角が生えている。肌は褐色で、瞳は紅色。修行僧のような衣を着て、錫杖をもっている。

「「!？」」」

「あああああ!」

「アイラ?」

「な、何故ここに鬼人が?」

「「キジン?」」」

シャラーン

「ほう、鬼人を知る者がいるとはな。

まあいい、この先にいきたくや、俺を倒していけ!」

「:門番なんているって聞いた?」

「いや?」

「聞いてません。」

「おい!俺は門番じゃねえ、ここの主だ!」

「鬼人が龍の里の洞窟の?」

「なんだ、俺がここの主じゃ不服か？ここに来る人間は許可を得た限られた人間。即ち人間の中の猛者！俺の相手に相応しい！よって龍すら忘れたこの洞窟の主を買って出てやったのさ！ハッハッハ！」

目の前の鬼人は、声高々に言い放った。

「…どうやら自称ですね。勝手にここの主として居座っているようです。どうします？」

「…どっちにしろ、コイツと戦わないと先には進めなそうだぞ。」
「えー、面倒くさそう…。」

シャラン

「話はまとまったか？」

「さっさと通してもらおう。」

「まあまあ、そう焦んなって。…いでよ、死神の鎌！敵を食え！」

大きな禍々しい黒い鎌が3本現れ、それぞれフェイ達を襲った。鎌は1人1人の前に到達すると、真っ黒な闇を吐き出し各々の体を包み込んだ。フェイ達は黒い珠に包まれ、宙に浮いた。珠の前で鎌が静かに構えていた。

「さて、どいつが生き残るかね。楽しみ楽しみ♪」

「それは困りますね。」

「誰だ！」

鬼人の目の前に現れたのは銀髪青年と少女。

「てめえ、何しに来やがった！このクソ精霊使い！」

「君がどのくらい強くなったか確かめに？ま、大して変わらないよ

うですね。」

「なんだとおー！」

「長さま、挑発しちゃダメですよ。今回は別件でしょうに。」

「そうだった、そうだった。ついうっかり。この子って、いじりたくなるんだよね。何かそういうオーラが出てる、みたいな？アハハッ」

「うう…」

「長さま！」

「はいはい。じゃあ本題。」

君には悪いけど、その子達を殺される訳にはいかないんだよね。だからお願い。」

「はあー？んなの俺が聞くとでも？宿敵のお前にい？」

「だよねえー？」

「じゃあ取引をしないかい？」

「取引だあ？」

「そう。君、閻魔に一傷つけたくない？」

「閻魔に？」

「そうそう、君がここで人間の猛者と戦う修行だって、冥界の主、閻魔との99999999敗9999999引き分けの戦いから1勝でもしたいからなんでしょ？」

そのお手伝いができる武器をあげようじゃないか。」

「…そんなことして大丈夫なんかよ、おめえ。」

「ふふん、冥界を離れてすっかり忘れちゃったのかい？僕が閻魔の管轄外の魂保持者というのを。…僕の魂に刻まれた名にかけて、貴方に武器を授けましょう。」

「…何が目的だ？」

「鬼人で自由に世界を渡れる貴方なら、わかるでしょう？その紅色の瞳を使えば、彼らの宿命が。」

「……………」

「…貴方がこのまま彼らを殺せば、どうなるでしょうね？」

「…ただ刻が早まるだけだろう。」

「そうですね。でも僕はできる限り足掻きたいのです。運命に逆らって生きるって素晴らしいですか？」

「ふん。逆らった結果どうなったか忘れたのか？」

「…忘れてませんよ。だから今回は役目を果たします。でも舞台に立つべき者は、来るべき刻まで生かします。それが僕にできる最大限のお節介。」

「おめえ…」

「さああと、君の錫杖をお貸し。」

おいで、時を司る友よ、光を司る友よ、闇を司る友よ、愛しい風よ。我願う祝福を錫杖に、分け与えたまえ。我が魂の名にかけて。」

「お、おい、何勝手に、この野郎！」

「…はい、おしまい。」

「ちっ。」

その空間は異様だった。しかめっ面の鬼人が1人、その周囲に3つの鎌と黒い塊。鬼人の目の前にニコニコと笑う銀髪の青年が立ち、青年の横に疲れきった表情の銀髪の少女がいた。

「で、よ、俺の錫杖に何しやがった？ 答えによっちゃあー、取引だっけ、それは聞かなかったことになるぜ。」

「あれ？ お気に召さない？」

「何がどう変わったのかサッパリだな！」

「うーん。…ねえ、その錫杖に鬼人の力を流して僕の周りをよく見て？」

「あん？ ……歪んでる？」

「そう！ それだよそれ！」

「意味わっかんねえ…」

「はあ」

「何だよその残念な子みたいな溜め息！」

「…残念な子。」

「ぬわにいゝ」

「長さま！控えて控えて！」

「…はあ。とりあえずその錫杖の機能と閻魔について説明するよ。生き物の魂を管理する冥界の王である閻魔や僕のような不老長寿は、時間軸を操作できるってことは知ってる？」

「知るか！俺は理論派じゃねえ、感覚派だ！」

「…長さまあ、この人単に勉強嫌いってだけなんじゃ？」

「あん？クソガキ何か言ったか？」

「続けますよ。で、時間軸の操作ができる者の多くは、己の周囲の時間を歪ませているんです。それが閻魔に攻撃が当たらない理由。」

「はあ？あんの野郎、やっぱり反則技で避けていやがったんだな！」

「…その錫杖には時・光・闇・風の精霊の力がこめられています。敢えて具体的な能力を与えなかったので、全般的に貴方のイメージに合わせて力が発動します。錫杖の操作に慣れれば、強力な武器にも防具にもなり、閻魔と良い闘いができるでしょう。」

「やりいー！これで奴とも互角に！」

「で、取引はしてくれるんでしょうね？」

「あったりめえゝよ！…んん？こっちの風の奴らは何もしなくて平気だが、水の奴はヤバイな…。」

「何てこと！うっかり長々と話し込んでしまいましたね。重傷でもいいので、命だけは取らせないように！」

「…もし違えたらどうなるか、わかってますね？」

「うっ、わかったよ。」

忘れられた洞窟―2―

ザザー　ザーザー
ザザー　ザーザー

水が流れる音が、絶えず辺りに響く。天から水が注ぎ、大きな水溜まりがあちこちに点在している。水溜まりには大きな蓮が、満開に咲き乱れていた。

ある水溜まりの上に、人を乗せた蓮の葉が1枚。乗っている人は、レイだった。

「あゝにゝうゝえゝ」
「ううゝ…ここは？」

どこからか、妹の声が聞こえ、起き上がるレイ。

「ここは、水の里の我が家？」
「兄上！探しましたよ！」

また昼寝してたのですか？修行をすっぱかして、御父様がおかんむりです。」

「修行？え？…というかレン、無事だったのか？」
「はあ？何寝惚けた事言ってるの？さっさといかないと、夕食のデザートの水羊羹貰っちゃうわよ！」

レンは呆れた顔をして、その場を去っていった。

「あれ？えーと、夢だったのかな、あれは。火の里が攻めてきて、風龍の里に行ったのは。うゝん。」

頬をつねっても痛みがあり、夢ではないと思うものの、それまでフェイ達と過ごした日々も本物のように思え、首を傾げる。疑問に思いつつ、修行の間に向かうレイ。すると前方から1人の女性が現れる。

「レイ？こんな所で何をしているんです？今は修行の時間のはずですが？」

「は、母上！生きていらっしやったんですね？」

「は？なに泣いているんです？よく分からない事も言うし。」

「貴方、どこへ行ったの？風の香りがするわね。」

「風の香り…」

「でもここに風の者は暫く訪れてないし、気のせいかしら？」

ああ！レンを見なかった？あの子ったら私が少しずつ食べてた秘蔵の水羊羹を勝手に持ち出して！」

「あゝ」

「それなら今日の夕食のデザートとか言ってたなあ。」

「ぬあんですって！」

「水鏡よ、我が子の居場所を示せ！……ふむふむ、そんな所に隠れてたのね！待ってなさい！」

彼の母は、あっという間に、目の前から疾走し姿を消した。

「母上、そんな事に水鏡を使わなくても……。はあ、あれは夢だったのかな？風精霊がイタズラしていったのかな？うーん。」

答えが出ぬまま、とぼとぼと道を進むレイであった。

「遅い！一体何度遅刻したらわかるんだ！そんな弛んだ気持ちで長が務まると思ってるのか！我が子ながら情けない！」

叱っている男こそがレイの父、水の里長である。レイに貫禄をつけたような美丈夫で、御歳60には一見見えない才人だ。レイは外部からは『水の貴公子』と呼ばれてはいたが、実態はとんだ怠け者で様々な教師が匙を投げた阿呆だった。父親の説教が厳しくなるのも仕方がなかった。

「またどこかで寝惚けてたのだろうか？」

まあ良い。お前の態度に付き合うのもいい加減疲れてきた。よって、この修行はこれにて終了とする。今後は好きなだけ遊ぶと良い。」

「……え？」

「なんだ？ 不服か？」

「ど、どうして？」

「どうしても何も、お前が修行に専念しないだからであろう。ならば私は何もしない。」

「で、でも私は長から秘伝を教わってません！」

「何を言っておる。誰が怠け者のお前に秘伝を教えると言ったか！ 修行はもうしない。つまりは長候補から落第という事だ。候補は他にもおる。ま、我が子が長になるのも夢であったが、真の幻であったな。今後は里で過ごすのも、外の世界にでるのも自由にすることが良い。」

「そ、そんな〜」

里長から時期長候補脱落を告げられ、レイは魂が抜けたように呆ける日が増えた。ある日は蓮の葉の上で日中過ごし、ある日は口から食事を溢した。ある日は何もない所で躓いた。

「あゝに〜う〜え〜水羊羹あげちゃいます！」

…嘘こけ！ って、ツツコミは兄上の役目です！ 腑抜けてないでツツコミ、ツツコミ！」

「あ、ああ？」

「もうダメだこりゃー」

レイは腑抜けてしまった。その様は、日に日に悪化し、最後まで粘って構っていた妹も、やがて匙を投げた。レイは蓮の葉の上で、ぐうたらと、無気力に寝る日々を過ごしていった。食事を作ってくれる者も近くにおらず、トイレ以外はほとんど寝て過ごした。『水の貴公子』と謳われた美貌は、頬が痩せこけ、体も骨と皮だけのようにゲツソリとし、様変わった。心配して寄り添う水精霊が彼に水を与え、何とか生きていた。だか彼の心は絶望の端で、今にも消えそうだった。

「ねえ、彼、そろそろ死にそうなんだけど？」

「いやー、まさかこんなに展開早いとはな。だが鎌は止めたから死にはしねえハズだぜ！」

「もう少し早く止めてたら、彼が自力で脱出できたのに。」

：これ、貴方じゃなくても弄っても壊れないよね？」

「おう！って、おめえ入るのか？」

「入るのは僕じゃなくて、その彼女だよ。あれでも一応、我が里が誇る神降ろしの巫女だしね。」

「精霊使いでありながら、神降ろしって最強だな！」

「ええー！！」

長さま、いきなり無理難題を押しつけないで下さい！」

「ちっ。」

レイの腑抜けっぷりを、上から覗いていた3人。レイは水の里になぞいなかった。死神の鎌がだした闇に包まれると、その者が最も恐るモノに関わる試練が与えられる。レイがいたのは、レイの記憶によって造り出された偽りの世界だった。試練を越えられなかった者は、闇に生気を奪われ、最終的には死神の鎌に魂を刈られるのだ。

「仕方ない、僕が行きますか。」

「さっさと行け！」

「長さま、ファイト！」

腑抜けたレイにとって、毎日是不変りない日々だった。起きて、寝て、トイレに行って、寝て起きる。ただその繰り返し。水精霊が何やら騒いでも、何も感じない。精霊も己自身のことも、最早どうでも良かった。だが何故か水精霊が与える水を拒絶することも、糞尿を垂れ流しすることもなく、ただ生きていた。そんなある日、見知らぬ少年がレイに近づいてきた。水の里では見かけない銀髪の少年。少年の右肩にはマーメイドが小型化して乗り、左肩には子龍が、頭の上には火の小鳥が乗っていた。

「おにいさん、大丈夫？」

「平気。構わなくていいよ。」「ならどうしてお兄さんは、水を受け取るの？その水精霊はお兄さんに水を毎朝毎晩あげてるよね？」

「さあ、どうしてだろね。」

「お兄さん、死にたいの？」

「そうかもね。」

「本当に死にたいの？」

「そうかもね。」

「本当に…？」

「そうかもね。ねえ、君は誰？死にゆく僕をお迎えに来た神様の遣い？」

「どうしてそう思うの？」

「だって君はマーメイド様も、龍も火の鳥も従えているじゃないか。そんなの伝説の精霊使いか、人外が存在だけだよ。そんな圧倒的な力を見せつけられて惨めになるだけだから、さっさと連れてってよ。」

「惨めなの？だから死にたいの？生きたくないの？」

「そうかもね。」

「それしか言わないの？」

：そう。なら手始めにお兄さんの大事な妹さんを殺そうか。お兄さんはこのまま死ぬから関係ないよね。」

「君は僕を迎えに来たんじゃないの？妹は関係ない。」

「あれ？僕の目的言いましたっけ？勘違いも程々にして下さいね。」

ドゴン ドツカン

少年の手から放たれた光が近くの建物に当たり、崩れた。

「どうして…？」

「どうして？何のことです？」

「この里が襲われるのは、夢だったハズなのに。」

「夢？夢なんかじゃありませんよ。げ・ん・じ・つ。」

まあ、お兄さんはこれから死ぬんだから関係ないですよね！」

少年は満面の笑みで、レイに言った。少年の手から火の矢が、竜巻が、水の槍が、土の礫が放たれた。里は目まぐるしい早さで壊れていった。レイはただ呆然と、その場に立つ事しかできなかった。

「ねえお兄さん、最後に聞きます。

：死にたいですか？」

水の溢れた大地は割れ、建物は崩れ、煙が昇る。人々の泣き叫ぶ声が響き、血の匂いが風に乗って運ばれる。美しい水の里は1人の少年の手で崩壊していった。

「……………」

「沈黙は肯定と受けとりますよ。」

少年の手に火の槍が生み出される。

「…残念です。さよお…」

「待て！」

レイを庇うようにして立ちはだかったのは里長、レイの父だった。

「父上、どうして！」

「我が子を守るのが、父上の役目だ！」

「麗しき親子愛、ですか？」

「アハハッ！」

「何がおかしい！」

「だってお兄さん死にたいって言ってるから、殺してあげようかと思っ
て槍だしたのにねえ？」

「何？…本当か、レイ？」

「……………はい。」

「親より早死する事を考えるなぞ、馬鹿な事を！」

「でも私は出来損ないの欠陥品です。努力しても報われず、父上の期待にも応えられない。未来への希望ありません！時期長候補にすらなれない私は、もうすべき事はありません！」

「馬鹿者！誰が出来損ないなどと言った！誰が欠陥品などと言ったか！誰だって初めから何でもできる訳じゃない。誰だって辛い下積み時代があるのだ。」

…我が子ゆえに甘やかしてはいけないと、厳しくしたがかえって悪かったようだな。すまない。」

「父上…。」

父と子は強く抱擁しあい、涙した。その横で少年は2人を呆れた目で見ながら、鼻をほじくり、鼻くそを2人に飛ばして遊んでいた。

「で、お兄さん、答えは？」

「…私は、生きたい。生きて皆を守りたい！」

「はい、良くできました！じゃあ、お父さん後はお願ひしますね！お兄さん、またいつか会おうね！」

「え？」

少年は言うだけ言って消えた。すると大地が揺れ、辺りの地面が割れていく。

「息子よ、レンを、世界を頼むぞ。最後にまた会えてよかった。」
「え？」

里長の体は、揺れの激しさが増すと共に色を失っていく。

「どうして？」

「私はもう死んでいる。この世界は、偽物だ。試練を超えたお前に、この世界は必要ないのだよ。」

「そんな！せっかく会えたのに！」

「…さあ、行きなさい。生きて、在るべき場所へ。」

「父上！」

レイの世界は割れ、レイは闇の世界から脱出した。

割れた世界には2人の男がいた。消えかかった里長と消えたはずの少年だ。

「…感謝する。偽物の世界とはいえ、息子に会うことができて幸せだ。」

「…いいえ、こちらこそ。彼がこのまま死んでしまうと歴史上困った事になりますからね。」

さあ、戻りましょうか冥界へ。」

「おい、なんで少年体だったんだ？」

「カワイイでしょ？」

「あん？」

「じゃなくて、ほらうっかり現実世界で会っちゃても、僕だってバレないでしょ？」

「一応直接関与はタブーだからね。」

「長さま、そろそろ帰りますよ！」

「はいはい、わかりましたよ。じゃあまたね〜」

「二度とくんなよ！」

死にかけていたレイを闇から脱出させ、レイが現実世界に戻ったのを確認すると、精霊使い達は立ち去った。

闇に覆われた大地に、ほのかな淡い光が灯る。太陽の光のような穏やかな灯りに映るのは、黒い人の影。影は2つ、膝をつき四つん這いになる影と、それに被さるかのように前後に動く影。

大地は広大であるのに、何故か影は2つしかなかった。まるで、生きし者は彼らだけしかないかのように。

「ハアハアハアハッ……」

「あああんっ……」

大地には2人の男女しかいなかった。彼らを支配する者は誰もいない、静かな大地。生ある営みを交わすのは、彼らだけ。その様を叱咤したり、嘆く者は誰もいない。生あるモノは彼らしかない、闇に包まれた大地。それでも、彼らの間に風は吹かない。あるのは、燃えるような熱と、愛の粘液だけだった。

「…愛してる。」

「私も。ずっとこのままで…」

女の甘い囁きに、男の打ち付ける腰の動きは激しさが増し、口や指が女の体に這い愛撫する。女の甲高い嬌声は、止まる事を知らないかのように響き渡った。

男の昂りは萎える事なく、女を突く。暗闇に包まれた世界が、彼らに時というモノが、存在しないかのような錯覚を与え、ひたすら交わり続けた。光に映る影の動きは止まる事を知らない。

「もっとおっ、奥にっ…」

「クッ……、ハアッ……」

淫らな営みに溺れていく男女を止めるモノは何もない。空腹も睡眠も忘れ、男は営みに没頭した。

「ずっとこのまま繋がっていたいね。」

「ああ……」

繋がる、…つながる？

俺は、俺は今、何をしている？

今、目の前で喘いでるのは、愛しいアイラ。

だが、ここは？

ううっ、暗闇だ。

思い出せない、何故だ？

いつから俺たちはここにいるんだ？

「ハアハアハッ…、アイラッ、ここは？ここはどこだ？レイは？」

「ああん！ここには私達しかいないわっ、あん。レイってだあれ？

私以外の女に渡さないわ！もっと突いて〜」

誰だ、この女は！

俺のアイラは…

俺のアイラはこんな程度の低い女じゃねえー！

「離せ！」

離れる事を忘れたかのように、繋がり続けた秘部は離された。男自身、フェイの手によって。

「あーん、もっとおー」

女は無理矢理離されても、諦めなかった。甘い声と体を駆使して、男に体を絡める。

「…誰だ、お前は。」

「フェイー、忘れちゃったの？フェイのお嫁さんのア・イ・ラ！」

「違う！お前は偽物だ！」

ここはどこだ！さっさと帰せ！さもなくば、…殺すぞ。」

「フェイ？何これドッキリ？愛の試練？」

「おいふざけんなよ、頭かちわってやろうか、あん？」

「フェイ…」

「…………。」

見つめあう2人。2人の間には数分前にはなかった風が、雨が、雪が通る。

「…………クッ。」

「クッ？」

「クックックックッ、アーハッハッハッ！淫欲に堕ちない御霊持つ者か、流石だな！」

突然笑いだしたアイラの顔は、見覚えある鬼人に変化した。それと同時に、何故闇の世界にいるのか思い出すフェイ。

「!？」

…ってことは、俺は男と交わっていたのか？」

「オイオイ、んな訳ないだろ？まあ、お望みならヤッてあげてもいいけどよ。」

「じゃあ誰と交わってたんだ？」

「…さあな。」

鬼人はフェイに疑問を残し、姿消した。そしてフェイが悶々としている間に、闇は晴れていった。フェイの体も、洞窟に戻っていた。

一方のアイラは、フェイと違い闇から精神攻撃を受けていた。

空は赤黒く染まり、岩がむきだしの黒い大地にアイラは1人ぽつんと立っていた。

アイラはフェイと結婚し、森奥でひっそりと慎ましく暮らし、幸せを謳歌していた。だがある日、空から隕石が降り注ぎ、図ったかのように同時に地震も起こり、地獄のような世界に地球は変わってしまった。それでもアイラは、フェイがいたから何とか生きていった。しかし、フェイは変化した大地が蝕む空気に汚染され、日に日に衰えていった。

「アイラ、すまない。」

「フェイ、何を謝るの？私は幸せよ。」

「せめて子どもがいれば良かったんだが…。お前を残して、先に逝ってしまう俺を恨んでもいい。」

「逝くなんて、縁起の悪いこと言わないで！フェイはまだまだ生きるわ！なんとって私がついているもの！」

「ハハッ、そうだな！ハハハッ…ゴホッ！」

「フエイ!しっかりして!」

「ゴホゴホッ!

…ア、イ、ラ、愛してる。」

「フエイ?フエイ?フエイ〜!」

血を吐き、フエイは意識を失った。26歳という若さで、フエイはこの世を去った。

「フエイ…置いてかないで……」

愛しい者のいない世界に絶望するアイラは、何もする気が起きない日々を幾日も過ごした。

荒れた大地は人間だけを害するものではなかった。麗しい自然からエナジーを得ていた精霊にとって荒れた大地は、不味いエナジーしか生まなかった。当然、フエイが愛してやまなかったアイラの美しさや若々しさは日に日に衰えていった。フエイの死は、その速度を恐ろしく早めていった。

ガターン

「何、かしら?」

フラフラする体を起こし、音のした方へ歩むアイラ。その先には、エメラルド色の宝玉があった。緑色の美しい宝玉に、どこか懐かしさを覚えた。

「これは…?」

アイラが手にとると、宝玉が光り、光の先に何やら人の映像が浮かび上がる。

「…フエイ！」

映し出された人は、愛しい人だった。喜びでアイラの目は涙で潤んだ。

「ゴホッ、ゴホゴホゴホッ…

アイラ、愛しい人よ。お前がこれを見ているという事は、俺は死んだという事だな。

…きつとお前は俺が死んだら、何もする気にならなくて、すぐに後を追おうとするだろう。でもな、俺はそんな事、望まない。元々俺は人間で、お前より早く死ぬのはわかっていた事。ただそれが早まっただけさ。

俺はお前の笑顔が好きだ！死んでも俺は、空からお前の笑顔を楽しみにしてる！だから、な、俺に負けないぐらいイイ男つかまえて、イイ笑顔を空に向けてくれよ！」

「フエイ…」

アイラの目から涙が溢れる。フエイが残した映像が消えても、涙は止まらなかった。

「フエイのばかぁー

死ぬ時は一緒につて誓ったくせに、先に逝くなんてずるい。こんなモノ残すなんてずるい！大好き！」

…もういない、の、に、ね。」

アイラは泣き叫び、一息つく。ふと、宝玉を握りしめていた事に気づき、掌をひらく。

「あれ？…やっぱり何か見たことあるわね。」

宝玉は風龍の街で得た友好の証であった石が珠型に変化した物。風龍王に会うために必要だったモノだ。闇に取り込まれた時に、封じられた記憶のワンピースだ。頭に引かかるものを感じ、思いだそうとアイラは暫し悩み耽る。

「んゝ……」

こんな時にフエイがいてくれたら。ああだったら、こうだったら、言っても仕様のない事だけど、ああどうして……。どうしてこんな事になっちゃったのかしら、せっかく風龍王さまに認められて結婚できたのに。

ん？風龍王？どうして私達は風龍王さまに会えたのかしら？」

カッーン

「あー、悩んでたらうっかり落としちゃった！割れてないかしら？」

床に落ちた宝玉はヒビすら入らず、美しさは変わらず放たれていた。

「この宝玉……。この宝玉は、風龍王さまに会うためにフエイと……！ここはどこ？」

アイラが宝玉の記憶を思い出し、呟いた途端宝玉から強い光りが放出された。するとどこからか歌が聴こえ、赤黒い空は青い空に変わっていく。大地もまた、緑が増えていく。

オイデマセ　オイデマセ

イトシキ　カゼノコ

イトシキ　カゼノミコ

オカエリ　オカエリ

イトシキ カゼノミコ
イトシキ サダメノコ

「この歌は何？」

「還りなさい、在るべき場所へ。」

「誰!？」

景色が変わる様に呆けていたアイラの後ろから声をかけられる。
驚いて振り向くと、そこには銀髪の青年と少女。

「あなたは!？」

「この宝玉は貴女達のモノです。どんな絶望にいても、きっと助け
てくれるでしょう。大事にきなさい。はい、どうぞ。」

「…どうして貴方様方が。」

「…わかってるんでしょう? それでも？」

「…運命の子は、フェイの事ですか？」

「……運命の子の定めは避けられません。誰かが死ぬかもしれない
し、誰も死なないかもしれない。それはたとえ神であろうと誰も知
らない。」

火と水と風と土が集う刻、それが再生と破壊の刻。貴女も運命の役
者、風の母なる者よ。」

「私も…?」

銀髪の青年は再び歌いだす。だが闇が造り出した世界は崩壊した
し、アイラは最後まで聴けずに現実に戻されるのだった。

火矢が飛び

大地が割れ 水は凍る

大地は枯れ

風は吹き荒れ

人は争う

ああ愛しき者よ

何故 壊す

ああ愛しき者よ

何故 嘆く

ああ愛しき者よ

何故 怒る

愛しき者よ

哀しきことよ

数多の星が

あと1つ

運命は変わらない

神々の見棄てた

宇宙という星の中の

最後の星

蒼き星

運命の子よ

応えなさい

女神の声に

女神の嘆きに

女神の望みに

闇の世界から脱出したフェイら3人は、鬼人の前で横たわっている。フェイとアイラは、疲労でグッタリしているだけが、レイは緊急を要する状態だった。

「ったくよー、治療は苦手なんだよな。さっさとこのねえちゃん起きて交代してくれよな！くそっ…」

ぶつくさ文句を言いながらも、レイに治療術をかける鬼人。

「うーん…」

「んん」

「起きたか？」

「んーここは？」

「鬼人がまだ…」

「試験おつかれ、おめえら合格合格！」

「合格？…ってレイはどうした？」

「大丈夫なの？」

「ちよっと痛めつけすぎちまってな、すまねっ！

けどよ、治療術苦手なんだよな」

ジーっとアイラを見つめる鬼人。

「はあ…。仕方ないですね。

風よ、彼の者に癒しを！」

「ん？宝玉が光ってる？」

「あら？いつもより癒しが強いわ！宝玉のおかげ？」

友好の証として手にした時は石の形だった物が、何故か闇の世界以降珠型になってアイラの手助けをしていた。強い癒しの力がレイに注がれた。

「うーん…」

「レイ？レイ、わかるか？」

「ここは…？生きてる？」

「ああ、生きてるとも！」

「良かったわね！」

無事レイの意識が戻り、安心するフェイ達。

「んで、門を通るんだろ？」

「そう、けど…。」

「：フェイ、いい氣にしないで。私は地上に出て闘える状態じゃない。2人でレンに合流してくれないか？」

「レイ…。」

「レイ様…。」

「すまない。」

意識が戻って早々活発に活動できるほど、レイの体は回復していなかった。レイは風の里の民のもとで、治療することになった。

「おい、話はまとまったか？門を開くぞ！」

「レンをよろしく頼む！」

「地上への扉よ、冥界の使者、鬼人の血に従い、開門せよ！」

「「いってきます！」」

赤い光が眩しく輝き、フェイとアイラを包み、地上へ2人を運ぶのであった。

第2部 聖女覚醒1（前書き）

第2部

聖女と女神

第2部 聖女覚醒1

ふと気づくと、私は暗闇にいた。何故か私は、闇の中をさ迷い、目的もよくわからなかった。それなのに、私は歩みを止めなかった。暗い暗い闇の中、1人でひたすら歩いた。もう何時間歩いた事か、定かでない。しかし不思議と、私は疲れを知らなかった。歩いている目的も、己が何者かも、全く疑問に思うこともなく…。

ザザッザザッ

ザザッザザッ

ザザッザザッ

何の灯りもなかったはずの場所に、突然音が舞い降りる。目の前で強い光が発され、一瞬目を瞑った。再び目を開けると、目の前には大きな白黒の画面があった。見るのも聞くのも初めてのはずなのに、私はソレが巨大なテレビ画面だと分かった。理由もなく、私はソレがテレビだと知っていたようだった。

ザザッザザッ

ザザッザザッザー

ザザザザッザー

目の前のテレビから出る音が変わり、白黒画面は鮮明な色へ変化していく。画面に現れたのは、美しい女性。何故か懐かしさを胸に抱かせる、そんな女性だ。

「お兄様、私もお兄様みたく大きくなったら天帝のお父様を補佐する女神になるわ！期待して待っててね！」

満面の笑みを向けるのは、幼い女神。5歳ぐらいの人間と大差ない見かけだ。天帝とは神々を束ねる者だろうか。

ザザッザザッ

ザザッザザッ

また画面が変わる。今度は10歳ぐらいの人に近いように見える女神が映る。彼女の横に映る細面の男性は、彼女によく似ている。女神の兄であろうか。

「サラ、よく見てごらん？これをこうやってだな、ココをこうすると宇宙ができる。この球体に沢山の銀河を創り、銀河の中に沢山の星と生物を産み出せる。お前も天帝の子、まずは今渡した宇宙を管理してみようか！」

「ほわー、これが宇宙。とても小さいのに広い世界！大事に管理しますね！お兄様大好き〜」

ザザッザザッ

ザザッザザッ

また画面が変わる。画面には緑が溢れた森と、20歳ぐらいに成長した女神と数人の人間がいた。女神は何やら哀しい顔つきで、人間たちと話をしている。

「ごめんなさい。私は行かなくては。お願い、私の愛しい子、カグラを継ぐ者たちよ。守って助けてあげて、愛しい人々を。」

「サラ様、どうしても行くのですか？」

「ごめん…ね。残りたいけど、お兄様を助けに行きたいの。」「…わかりました。カグラの名のもとに、与えられた役目を全うしましょう、未来永劫に。」

「ううっ…、許してちょうだい…」

ヴァー…ッ

画面に魅せられていた私は突然の爆音に驚き、目線を上げた。闇の中にいたはずだったのに、赤黒い炎が辺りに舞う。燃やされると恐怖を抱き、咄嗟に身を縮めさせたが炎は熱くなかった。まるで私はそこにいないかのように、素通りしたのだ。

ヴァー…ン

ヴァー…ン

また爆音がした。しかもその音は段々近づいている。そう思っていた私の前に、1人男性が現れた。美しい黒髪はチリチリに焼け焦げ、体のあちらこちらに傷を負っていた。それでも彼の瞳は絶望に堕ちてはいなかった。

「こんな所にいたのか、早く逃げなさい。あの星で傷を癒すんだ。」

何を言ってるんだろう、この男は。だが不可解だと思っていた私の口から、勝手に言葉が発される。

「嫌です、お兄様！私も、私も最後まで闘います！」

「お前はよくやってくれた。あの強大な破壊神と淫神を、お前の人としての魂に封じた。たとえ封印が解けても人として生きるしかない奴らは、永遠に人の輪廻から抜け出せない。」

「それでも、まだ闘いは終わってません！」

「サラ、愛してるから許してくれ、…すまない。」

「お兄様？」

勝手に動いていた口は止まった。一体何だったのだろうか。そして、目の前の男性から何やら視線を感じるのは気のせいだろうか。

「…ふむ。サラは去ったが、何かいる。別の次元、別の時間軸の気配か。神をも覗き見る者がいようとはな。クククッ、面白い。死ぬ前にこのような出会いに感謝すべきかな。」

「貴方は…？」

「ほう。声も届くとな！良い魂だ。そなたに最後の天帝の加護と祝福を。」

女神の兄は、私に祝福を与えると同時に消失した。まるでそこに何もなかったかのように。しかし、加護と祝福とは一体何の事やらさっぱりだった。

1人、ぽつんと残されて、私は誰なのか初めて疑問に思う。すると闇は晴れていき、眩しい光に包まれた。

チュンチュン
チュンチュン

朝日が差し込むベッドに横たわる1人の少女がいた。彼女の寝相は大変悪く、何故か足は枕に、頭はベッドから落ちていた。それでも起きないのが不思議だ。

彼女を起こすのは毎朝窓から入ってくる猿。寝相の悪い彼女の鼻を摘まんでは、息苦しさで目覚める彼女に怒られて追いかけ回される。そんな彼らを人々は微笑ましく眺める。それが日常だった。

だがその日は違った。鼻を摘まんでも反応なく、違和感を感じた猿は森の仲間達を応援に呼んだ。彼女の部屋は動物達で溢れた。

「はっ！」

突然目を開き、飛び起きた彼女。普段と違う様子に、動物達は恐る恐る彼女に近づく。

「私は誰？私は女。私は子ども。ここは魔の森の村の私の部屋。そう、私はミラ！私はミラよ！私はミラ！」

彼女はミラ。魔の森の村に住む、神に愛されし巫女。もちろん、森の動物達もミラを愛した。が、彼女の発言に動物たちはずっことした。

「あれ？なんでこんなに森の子達が？よくわからないけど、か・い・さ・くん！さっさと朝食にいかないと、お母さんから大目玉食らうわ！」

先ほどまで見ていた夢の事はすっかり頭の隅に追いやったミラは、階下の食堂に向かって走り出した。

聖女覚醒2

アースランドがカグラ教国との不可侵条約を破り、戦争が始まって2年が過ぎた。戦いは激しさを増し、戦禍はカグラ教国の田舎村、魔の森の村まで及んでいた。魔法使いたちは疲弊し、子どもたちは不安な日々を過ごしていた。

だが村人たちは希望を捨てなかった。神に愛されし巫女ミラが、村人に未来への希望を忘れさせなかった。彼女はレン達により、素養を見出だされてから魔の森に住まう精霊達のもと、修行に明け暮れた。そして今日も、ミラは森奥で修行する。

しかし今日のミラは、どこか違った。おかしい夢を見て、修行に集中できない。精霊を体に降ろしても、長続きしない。

「ミラ、集中できないなら今日はおやめ。」

「しゅ、集中する！ちゃんとするから！」

「そう何度言われても、ねえ……。」

今日の指導担当は大地の精霊、砂人のリュウ。砂で構成された褐色の肌を持つ青年。彼の周りには大地に属する精霊や動物が集まり、ミラの修行を手伝っていた。

「もう、今日は砂漠に帰ろっかな。ね、悩み事？お兄さんに話してごらん？」

「…………。今朝ね、変な夢みたの。気づいたら真っ暗な所をさ迷っていて、テレビとかいうモノが目の前にでてきて。綺麗な女の人が映ってた。その人はサラって名前で、天帝の子どもでお兄さんがいて。天帝って、どこかの王様かな？で、画面をジッと見てたら途中から私がサラさんになったかのように、そのお兄さんに話しかけられて。それで勝手に私の口が動いたの。その後もよくわからない事

言われたりして、眩しくなって、気づいたら朝だったの。夢の中の事なのに、本当に起きた事みたいだったし、私がサラさんになったような感じで変なの。りゅー、どう思う？」

「……………!？」

「りゅー？」

「それは、夢見…かな。」

「夢見？なに、それ？」

「夢の中で、過去や未来へ魂を渡らせて、過去起きた出来事を見たり未来を予知すること。予知能力者か、高位体を降ろした巫女しか使えないはずなんだけどなあ…。寝る前に何かした？」

「ぜーんぜん！修行で疲れて爆睡！」

首を大きく横に振り、全くわからないと言うミラ。そんなミラの話に考えこむリュウ。

うーん。

無意識に夢見が発動？

しかもサラ、天帝の子どもだって？

それってさー、女神サラ様の事？

サラ様を降ろせるのは、カグラの巫女だけ。

ミラはカグラの巫女の血筋じゃない。

あの方はまだ御存命だし。

どういうことだ？

「りゅー？」

「ん？ああ…、ミラ、驚くなよ？そのミラが見た夢に出てきたサラって方はな、おそらく女神サラ様だ。」

「へー……………、え！女神様!？」

「夢見で見たって事は、女神サラ様を体に降ろして、サラ様の過去を見たって事だ。」

「え！え！え！ウソ！」

「ウソじゃない。夢見できたからな。」

「えー！どうして私が？」

「知るか！：本来ならカグラの巫女以外に降りるはずもないんだが。試しに呼びかけて降ろしてみろ！」

「えー！無理！無理！絶対無理！」

「さっさとやれ！」

「うえー！いーやーだー！」

嫌がりながらも、精霊を降ろす時と同じように精神を集中し始めたミラ。期待に満ちた目でミラを見つめるリュウ。だが…。

「あれ？女神様って普段どこにいるの？どこに呼びかけるの？りゅー知ってる？」

「……ああ、そうだな、ええとな、それはだな」

「つまり、知らないと。」

「そうとも言うな。」

「もうダメじゃん！バカ！役立たず！グズ！あほ！マヌケ！ダメ男！似非王子！童貞！短小！早漏！」

「…おい、途中から聞き捨てならねえワードが聞こえたのは気のせいか？嫌、気のせいじゃないな！」

「あ、童貞ってなーに？」

「誰だコイツにこのワードを教えた奴は！」

「りゅー、短小なの？」

「……ミラ？お兄さん怒らないから、誰からそんな言葉教わったか教えてごらん？」

「えー…」

「ミラ？ミラのお母さんが、童貞とか短小とか早漏なんてはしたな

い言葉をミラが叫んだなんて知ったら、きっと大目玉じゃ済まないね。何日も部屋に押し込められて、ミラの嫌いな淑女レッスンが始まるよ？」

「はしたない言葉なの？」

「そうそう、だからね、誰が教えたか言ってくれたら、ミラのお母さんが鬼にならないよう協力してあげるよ！」

「ホント？わーい！んとね、教えてくれたのはね………」

ドドドドドオオオオン

その日の夜、森奥で何やら大きなモノが壊れるような音が鳴り響いた。普段賑やかな森の生き物が、不気味なほど鳴りを潜め、村人たちは変な日だなあと不思議がった。何が起きたのか、誰も知らない。

聖女覚醒3

チュンチュンチュン
チュンチュンチュン

鳥のさえずりが響き、爽やかな朝を迎える。今日も平和に人々は過ぐす。否、訂正。一見、平和に見えるの間違いだ。忘れてはならない、現在進行形でカグラ教国は戦時中である事を。平和に見える村の風景、それには少女の努力があった。5歳にして、大人びた口調で村を駆け回る彼女の努力があった。

「さ、て、と、…今日も頑張りますか！」

朝食を済ませた彼女がまず最初に取り組むのは、結界の補強だ。村の端々に置かれた結界石を守る精霊に、己の精気を与える。元々村の結界は魔法によって張られていたが、激しい戦いにて破れてしまった。そもそも結界は先祖が張ったつきりで、強力な結界を張れる者は現代に存在しなかった。そんな窮地を救ったのが、ミラの精霊から借りた力によるものだった。魔法使いの村には、精霊の力を借りれる者はミラしかいなかった。

「東、西、南、北っと！これで村の方はいいかな。もう、皆していっぱい力吸ってくから、バテバテだよー。…そういや、南のアイツ、私の初キスを！うがー」

ミラは自由奔放な精霊に結界の要を守る役割を与え、その報酬として生命エネルギーを与えていた。良心的な精霊は幼い彼女に配慮し、手やハグで彼女に触れる事でエネルギーを得ていた。精霊が人間に力を貸す時、人間が持つ何らかの代償を求める。差し出すモノ

が少ないミラは、生命エネルギーを彼らに与えた。精霊が人間から生命エネルギーを得るには触れるだけで良い。しかし疚しい考えの精霊は良質なエネルギーを持つミラへ内心涎を垂らし、成長したら処女を…と狙っていた。そんな疚しい精霊は幼いうちから唾をつけようと、彼女の初キスを奪うのであった。

「疲れたけど、後は森の結界！あと1つ！」

村の結界を補強したら御仕舞い、なんて事はない。仕上げに森奥の祭壇で森全体を守る結界を補強するのだ。ミラがマーメイドを降ろした祭壇は、元々先祖が結界を張るのに用いていた祭壇であり、古代の結界魔法陣が現在も息づいていた。祭壇で高位精霊を身に降ろし、魔法陣を補強するのが、最後の仕上げだ。

「おいでませ、おいでませー。天に住まわし光の精霊、光神の片翼よ。

おいでませ、おいでませー。

地に住まわし闇の精霊、黒神の片翼よ。

我が半身に光よ、降りて。

我が半身に闇よ、降りて。

我が魂と歌え、踊れ。

降り立ちたまえー」

ミラは祭壇に膝をつき、空へ祈りを捧げた。暫くすると空からミラの頭に光が射し込み輝きだし、足元は真っ黒な光が輝き出した。空からの光は白い翼を持つ女性を形取り、下半身はミラの右腕と合体している。一方左腕にも同様に下半身はミラと合体している黒い翼の男性が現れる。知らない人から見たら、腕から人が生えてる変人状態だ。

「久しぶり、今日は結界の補強の日かしら？」

「久しいな、今日も力を貸そう。」

「久しぶり！今日もあなた達に会えて嬉しい！…色々話したいけど、今日は疲れてるからチャッチャツと終わらせたいけど、いいかな？」

「「りょーかい」」

「じゃあ、体に入ってね！」

光の精霊と闇の精霊がミラの体に完全に溶け込むと、彼女の体は変化していった。ミラの髪は金髪に変化し、瞳の色は黒く、背から翼が生えた。片翼は白く、片翼は黒い。人外の美しさを持つ生き物に変貌した彼女は、祭壇で踊り歌い始めた。踊りの楽しさに多くの精霊や動物が誘われ集まり、歌の美しさに心を清められた。

歌いましょう、風よ

歌いましょう、水よ

大地を照らす光と共に

歌いましょう、樹よ

歌いましょう、炎よ

太陽を翳す闇と共に

光よ、悪しき者を妨げ

闇よ、悪しき者を葬れ

精霊の歌にのせて

守りましょう

愛し子たちを

救いましょう

愛しい子たちを
愛しましょう

歌が終わり、踊りが止まるとミラの右手から光の玉が空へ放たれ、左手から闇の玉が空に放たれた。玉は森全体を覆うように走り、境界に染み渡る。

「はあはあはあはあ、はあ―
づがれだ―もうだめ―」

疲労困憊の様子で、ミラは祭壇にバタンと倒れこんだ。彼女は元の姿に戻り、祭壇には光の精霊も闇の精霊も既にいなかった。祭壇の周りに集まっていた精霊や動物も祭りは終わったといったように、去っていった。

「うーん、やっぱり2体はしんどいなあ―」

彼女は巫女として、異常に力があつた。普通は一度に1体しか降ろせない。それなのに、2体も高位精霊を降ろし、制御していた。5歳にして末恐ろしい少女だ。

「お疲れ。水でも飲むか？」

「りゅー！ありがと！神様！イケメン！男前！」

「全く、こういう時だけ調子いいとか、しょーもねえなあ。」

砂の高位精霊リュウは、魔の森の先の砂漠に住む。魔の森から少々距離があり、滅多に森で見かけない精霊だが、ミラのために毎日のように訪れていた。ミラを娘のように可愛がり、時には友人のよう一緒ににはしゃいだ。

「今日は随分と疲れてるな。夜はちゃんと寝てるか？」

「ぎっくーん！」

「何が“ぎっくーん！”だ。いい加減にしろ！食って寝てはしゃげ！お前はまだ子どもなんだぞ！」

「あ、結構モノマネ上手いね！」

「はあ」

「りゅー、ちょっと寝たいから膝貸して？」

「わかった。ちょっと休憩な」

「おやすみ」

気づくとまた、闇に落ちていた。とても静かで、何の音もしない。光も射し込まず、真っ暗だ。

「ああ、痛い。このままじゃ体を維持できない！」

驚いた、また口が勝手に動くんなんて。そう思えば体の節々が痛いような気がする。一体全体何なのだろう。

「どこかに良質の魂がないか？輝かしい魂を。」

…ああ、見つけた！あの人間に宿ろう！丁度生まれる所だわ！」

輝かしい魂が目の前にあり、よくも考えずに飛び込んでいった。目の前が眩しいと思った瞬間、弾き飛ばされ、私はまた闇の空間にいた。私しかいなかったはずなのに、近くに人の気配がした。一体誰であろうか。

「あれが、私が犯した最初の罪。良く吟味もせず、人に宿ってしまった。」

「え？…あれ？声が！」

先程まで自分と同化していた者が、姿を現し何か語り、自分も声を発せられる事に驚愕した。

ザザッザザッ
ザザッザザッ

いつかに聴いた音が響き、辺りの風景が変わる。闇はなくなり、どこかの街の風景だ。空が青く、大きな山が見える。緑溢れる庭だろうか、そこを元気に走り回る3歳ぐらいの少年が見える。少年の周りには小さな精霊達が、ちょっかいをだしていた。少年は精霊に気づいているようで、一緒に笑いあっていた。

「キレイな山……。」

「…あれは富士山。フェニックスが生まれた炎の山。」

「え？あそこが！？」

ザザッザザッ
ザザッザザッ

また風景が変わる。少年は10歳ぐらいに成長し、何やら空を見て涙していた。

「どうして僕なの？どうして僕を選んだの？
どうして、サラ様？」

少年は涙を流しながら、空に向かって悔しそうに呟いていた。

「え？どーゆーこと？」

「…私は降りてはいけない子に宿ってしまいました。私が宿らなけ

れば、あのような事にはならなかったでしょう。可哀想な子。」

ザザッザザッ
ザザッザザッ
ザザッザザッ
ザザッザザッ

「これは？誰かがこの空間に干渉してくる？」

「え？何？」

ザザザザッ
ザザザザッ
ザザザザッ

美しい風景は崩れ、空間が歪む。立っているのが辛く、膝つくしかなかった。

ザザザザッ
ザザザザッ
ザザザザッ
ザザッ

辺りを見渡すと、先程いた女性はいなかった。辺りはどこかの山だろうか、緑であふれている。目線を少し上にすると、富士山が見える。

「ここは一体…？」

辺りを歩いてみると、目の先に海があり、夕日が射し込み橙色に

海が輝いていた。

「キレイ……。。」

「そう言って頂けて、嬉しいよ。」

「え？」

驚いて振り向くと、見たこともない銀髪的美青年がいた。

「え？」

「ごめんね、君の夢に勝手に渡ってきて。」

「渡る？」

「夢見は他人の夢も渡って見れるんだよ。便利だよ♪」

「じゃあお兄さんは予知能力者？」

「さあね？それはいずれわかる時がくるよ。」

「どうして？」

「ああ…、今代のカグラの巫女は質問ばかりだねー」

「カグラの巫女？」

「おや？んん？」

なんだまだ半覚醒か〜」

「半覚醒？」

「…今日はもうおやすみ。また夢で会いましょう。カグラの巫女、ミラに祝福あれ！」

ミラに疑問を残し、青年は頬にキスをして消える。同時にミラの意識は光に包まれた。

誰もいなくなれば消えるはずの空間は、ミラが去っても残っていた。何故なら青年が立ち去っていなかったからだ。

「私が宿らなければ、か…。懺悔はもう遅い。刻は再び刻まれる。運命の日はもうすぐ…」

青年は呟き、今度こそ本当に姿を消した。最後に空間に残ったのは1人の女性。

「ごめんなさい。…でも今度こそ、貴方を幸せにするわ。」

女性も姿を消し、夢の空間は塵となり消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9045p/>

再生と破壊の刻

2011年10月8日13時46分発行